# 奈良国立文化財研究所年報

1977

奈良国立文化財研究所

平城宮跡東院庭園の発掘遺構

撮影　佃　幹雄

2　飛鳥・白鳳在銘金銅仏の銘文 部分拡大

（左上）甲寅年光背銘　6倍　　（右上）戊子年釈迦三尊光背銘　4倍

（左下）辛亥年観音像銘　8倍　（左下）野中寺丙寅年弥勒半跏像銘　8倍

撮影　井上直夫

海住山寺蔵浄土図　兜率天曼荼羅図(上)　大般若経

撮影　八幡扶桑

4　法輪寺木造薬師如来座像(左)　法起寺木造十一面観音立像(右)

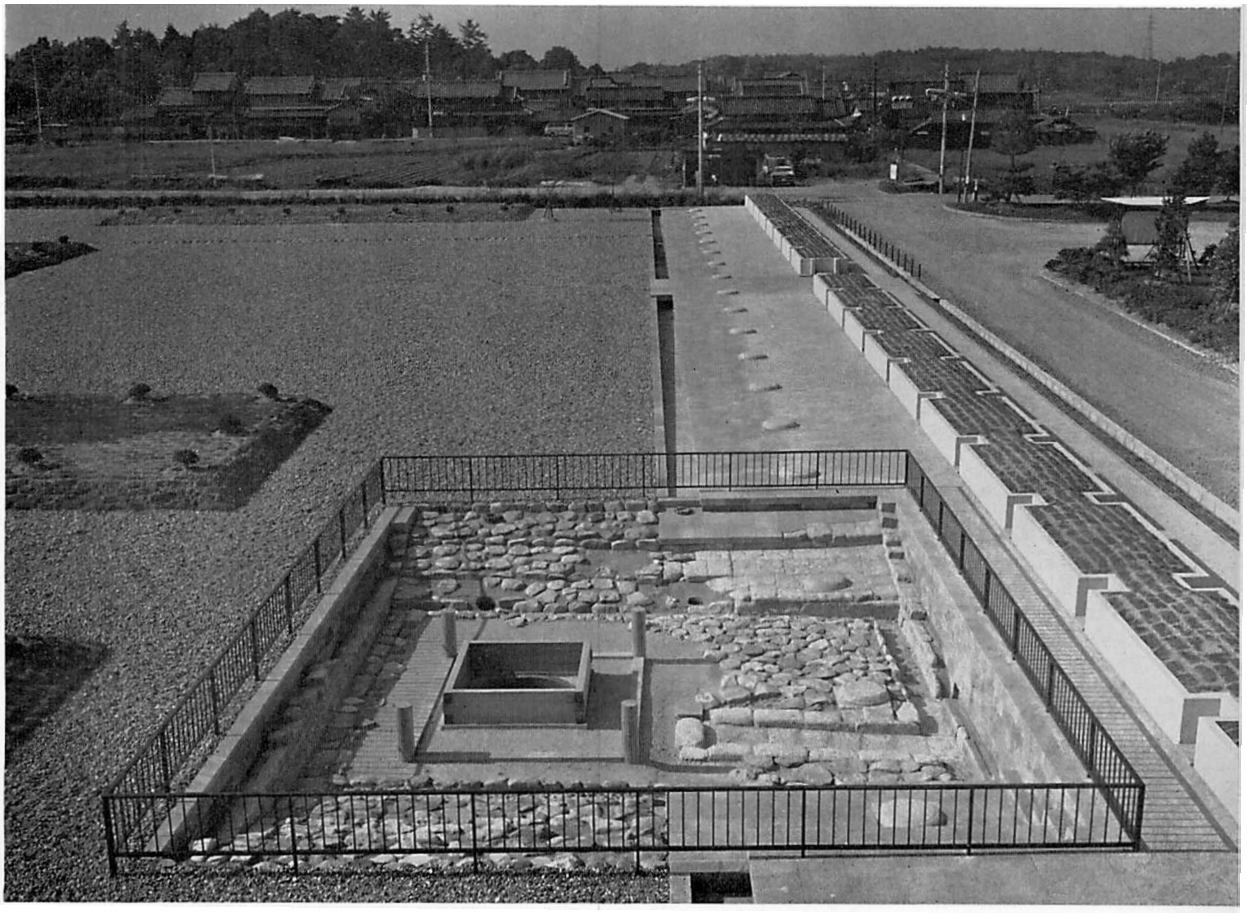
撮影　八幡扶桑

5　善財童子絵巻　模本（上　第二十二・第二十三段）（下　第三十二・第三十三段）

撮影　八幡扶桑

6　当麻寺全景（上）　東塔（下左）　西塔（下右）

撮影　佃　幹雄



7　奈良山出土の蔵骨器(上左)　同，銭貨と墨(上右)　平城宮跡第２次内裏大井戸復原整備(下)

撮影　佃　章雄

8　1976年度出土の平城宮木簡

撮影　佃　幹雄

9　山田寺塔跡発掘遺構（上）　稲淵川西遺跡発掘遺構（下）

撮影　井上直夫

10　山田寺跡出土の塼仏(現寸大)

撮影　井上直夫

# 目　次

口　絵　平城宮跡東院庭園の発掘遺構（カラー）
飛鳥・白鳳在銘金銅仏の銘文（カラー）
海住山寺蔵浄土図および大般若経
法輪寺木造薬師如来座像
法起寺木造十一面観音立像
善財童子絵巻
当麻寺全景および東西両塔
奈良山出土の蔵骨器と出土遺物
平城宮跡第2次内裏大井戸復原整備
1976年度出土の平城宮木簡
山田寺塔跡発掘遺構
稲淵川西遺跡発掘遺構
山田寺跡出土の塼仏

はじめに……1
海住山寺総合調査報告(2)……2
法輪寺・法起寺彫刻調査……7
東大寺善財童子絵巻について……10
奈良県民家調査……12
当麻寺東西両塔の調査……16
談山神社社殿の調査……18
識名園庭園の実測調査……19
写真測量による建造物の経年変形……20
平城宮跡と平城京跡の調査……21
1976年度発見の平城宮木簡……38
平城宮跡の整備(7)・藤原宮跡の整備(2)……41
平城京東三坊大路側溝出土の大型人形……44
奈良山出土の蔵骨器と墨……45
植物質繊維加工品の保存……46
飛鳥・藤原宮跡の発掘調査……47
飛鳥・白鳳在銘金銅仏の調査……59
遺跡探査法の開発……62
埋蔵文化財用語の収集と整理……64
在外研修成果報告……65
公開講演会要旨……66
調査研究彙報……67
奈良国立文化財研究所要項……73

奈良国立文化財研究所年報　1977
発行日　1977年8月20日　編集・発行　奈良国立文化財研究所　担当　細見啓三・木下正史　印刷　奈良明新社

# はじめに

当研究所が1952年に創立されて今年で四半世紀を経た。この25年間に創立当初3研究室15名の定員が，今日6倍以上の98名の定員と当初の3研究室のほか平城宮跡・飛鳥藤原宮跡の2発掘調査部が創設され，加うるに飛鳥資料館，埋蔵文化財センターが付設されるなど文化庁の付属機関としては大きな機構にまで発展してきた。これは当研究所創立の目的である多大の資料の所在する現地の利点を生かすとともに，文化財行政のニーズを先取りし，所員一丸となって業務に専念したことの評価によるものであるとともに，当研究所の事業拡大によせられた文化庁の熱意とこれをささえていただいた各方面の御支援によるものと深く感謝するものである。

当研究所年報も1958年にそれまで出していた事業要覧に研究成果の略報を載せたものにしようということからはじまった。当初口絵2頁，本文42頁しかゆるされなかったが，各号編集者の創意と努力が重ねられて，20冊目の本号は口絵カラーを含めて10頁，本文80頁と充実されてきた。その間に本文縦組から横組に変える論議など今は一つの思い出となっている。この20冊の年報を通覧すれば研究所創設当初の南都七大寺の調査を中心とした活動状況から，飛鳥寺，川原寺等の飛鳥地方の調査，平城宮跡の保存から飛鳥地方保存への発展，町並調査への取組み，埋蔵文化財センターの必要性などの研究所の歩みを如実に物語る貴重な資料となっていることがわかり，年報のはたした役割が大きかったことがわかる。本年から春日野庁舎の移転も軌道にのるなど研究所の将来への発展が予想されるが，従来にも増して各方面の温かい御支援と御鞭撻を願ってやまない。

1977年8月

奈良国立文化財研究所長
坪　井　清　足

# 海住山寺総合調査報告 (2)

美術工芸研究室・歴史研究室

海住山寺よりの依頼による調査で，昭和49年の総合調査の後を受け，昭和51年度にその未了部分の調査を完了した。その調査目録は別途仮目録として印刷に付したが，ここではそのうちの主要なもののみを取り上げて紹介解説する。なお今回も奈良国立博物館菊竹淳一・阪田宗彦，大和文華館吉田宏志氏の御協力を頂いた。

## 1. 絵 画

○両界曼荼羅図（絹本著色） 2幅 室町時代 （金剛界）縦112.8cm，横98.2cm（胎蔵界）縦112.3cm，横99.8cm

鮮やかな濃彩に，金泥盛り上げ彩色を用いた作品である。図像的な厳密さを失いつつ，現図曼荼羅系の図像に従っている。糊離れこそ著しいが，本地の保存は良好で，その巻留に「南都芝野林□筆」とある。この巻留墨書はにわかには信じがたいが，派手な彩色と弛緩した肢体の表現などその作風から見て，南都仏画であることは間違いない。室町時代末頃の南都での製作と考えられる。

なおこの他海住山寺には，紙本著色両界曼荼羅図（江戸時代），絹本著色金剛界曼荼羅図（江戸時代），紙本木版下図彩色両界曼荼羅図2組（江戸時代―うち1組は天明5年）などが伝わっている。

○浄土図（兜率天曼荼羅図）（絹本著色） 1幅 鎌倉時代 縦177.0cm，横205.2cm

やや横長の大幅の浄土図で，画面の両側に斜め奥にのびる楼閣の浄土を対置して描き，その間を大きく宝池としている。池の中央には舞楽段が設けられている。左右の両浄土では楼閣の中に如来がおり，多くの菩薩が囲繞している。当麻曼荼羅図などの阿弥陀浄土図とは全く構図を異にし，むしろ弥勒の兜率天浄土図に近い。弥勒上生経に基づいて弥勒が上生した兜率天における四十九院の微妙宝宮を描くものである。兜率天曼荼羅図は，大阪延命寺本（既調査済）などが知られており，それによれば明らかに本尊は未だ菩薩である弥勒として描き，宝宮の四門や宝幢が加えられ，弥勒浄土であることを示している。しかし本図においては2つの浄土共その本尊は如来形をなし，弥勒浄土としての明徴を認めがたい。一方釈迦と阿弥陀の浄土と見て，遣仰の浄土図とも解されるがこれも確証はない。しかし他に類例のない浄土図としてその図像的な検討はなお今後の研究に俟ちたい。本図は後世の補修が多く，著しく画面を損ねている。補絹，補彩はもとより，大部分に補筆が入っているが，うぶな部分には柔軟な暢達な描線によって変化に富んだ自由な肢体の表現が認められる。鎌倉時代中期の製作になると考えるのが穏当であろう。（口絵参照）

○十一面観音来迎図（絹本著色） 1幅 室町時代 縦101.8cm 横37.5cm

白雲に乗り大海原を越えて来迎してくる独尊の十一面観音を描く。独尊で立像の十一面観音

来迎図は東大寺本（既調査済）など数点知られており，南都系十一面観音来迎図として一括することができる。いづれも南都における観音信仰の所産と見られている。右手を施無畏とし，左手には蓮華を挿した水瓶をとり，十三条の放射光の頭光を負い踏割の蓮華に立っている。暗寒色系の鈍重な色彩は室町時代仏画に通有のものであり，切金・金泥による衣の文様や波の描き方にも形式化が著しい。室町時代後半の製作と考えられる。

○釈迦三尊十六羅漢図（絹本著色） 3幅 南北朝時代（建武5年） 中幅縦150.3cm，横80.5cm，右幅縦151.4cm，横68.8cm，左幅縦150.5cm，横68.8cm

釈迦三尊の幅と各々八体づつの羅漢を描いた左右幅とで三幅対をなす。中幅は，大きな挙身光を負い結跏趺坐する金身の釈迦と，その左右にそれぞれ獅子・象に騎乗する文殊・普賢の三尊を描く。獅子の手綱をとる優塡王と，象使いが描き加えられていて注目される。この釈迦三尊は岡山頼久寺の釈迦三尊図の図容に細部まで一致する。一方左右幅の十六羅漢は侍者を伴って山中に配され，その図像は京都天寧寺の十六幅本の羅漢図の中より主として選びながら，他の系統の羅漢をも混え相当異種交配した十六羅漢を構成している。中でも渡水羅漢を描き，図像的に注目すべき点がある。南北朝時代に特有の重厚な作風で，殊に岩の描法に用いられている輪郭線や点苔，岩の側面の墨のぼかしによくその様式的特徴を表わしている。本図は裏背に三幅共略同文の旧裏書を貼布しており，それによれば建武5年摂津国河辺南条難波村字新別所において開眼導師円如上人，発願勧進僧了阿によって供養され，図絵執筆は法印円順と知ることができる。様式的に見ても建武5年の製作と考えてよく，製作年代と筆者の明らかな南北朝時代仏画の基準作例として貴重な作品である。

釈迦三尊十六羅漢図のうち釈迦三尊図　　地蔵十王図のうち第一幅秦広王　　同左　地蔵図

○地蔵十王図（絹本著色）　11幅　元時代　地蔵図縦101.9cm，横47.8cm，十王図縦99.0～105.0cm，横44.3～44.7cm

いわゆる陸信忠様とされる地蔵・十王図に属し，地蔵の図像は岡山宝福寺の地蔵に，十王図は京都大徳寺の十王図によく細部まで一致する。そのいずれもが元時代とされており，本図も落款・印章は見当らないが，陸信忠様式の特徴を遺憾なく伝えている。暗寒色の賦彩とくせの強い描線によって緊密な画致を表わしており，日本での転写本と見るより，元画と解すべきであろう。陸信忠様の地蔵・十王図は他に滋賀永源寺本などがあり，それらの図像を比較すると，いずれも相互に図柄を反転したものや，前面の地獄の部分や背後の添景物を変化させたものなど，基本的には数少ない図像を巧みに利用していることが知られる。又当然同図柄の作品も幾組も作られて舶載したことが予想される。本図も先の宝福寺本・大徳寺本に略同大であり，そのような作例の一つと考えてよい。

## 2．書　跡

1975年度年報の調査報告(1)では，調査未了であった「大般若経」について報告する。

○大般若波羅蜜多経　（自巻第1 至巻第600，内巻第6欠）　599帖

紙本墨書，平安時代寛治頃写（但巻第146，253，278，279，476，477，478は鎌倉時代補写，また巻第181～200は春日版版本），折本装（巻子本改装），料紙黄斐紙（楮交り），墨界線

〔法量〕（巻第1）　縦23.0cm，横8.2cm，45折半，一紙長52.7cm，界高19.8cm，界幅1.6cm

「大般若経」600巻のうち，巻第6を欠くほか599帖現存し，各100帖が杉材の経箱6個に納められている。経箱は被蓋で中籠10段重ねであり，底内面などに「山州相楽郡瓶原郷／海住山／観音堂常什物」「宝永五暦戊子九月吉辰修補」（／は改行を示す）と墨書され，「龍」「虎」など六獣の整理墨書が付されている。

この大般若経は本来巻子本であったのが折本装に改装され，経箱と同じく江戸時代宝永5年（1708）頃に海住山寺一厲の摩尼珠院光賢等が行なった修補のときの白茶地に朱二重蔓法相華唐草文を木版刷した表紙（題簽中央）を有している。なお改装時に，旧表紙を後補表紙下貼りに転用しており，一部には外題を存するものもみられる。その旧表紙には丁子散しと渋引きの2種あるが，外題の筆跡等からみて，それぞれ南北朝および室町時代のものと思える。後補表紙下貼りには，また巻尾軸付部を切断転用したものもあり，それには奥書の残っている場合もあるが，その奥書はおおむね別巻のものと考えるのがよかろう。

ところで書写年代は，数巻の補写経と南北朝期摺写の春日版版経を除いて，筆跡・料紙等からみて院政期のものと考えられるが，奥書に「寛治六年七月四日書写已了筆師僧快運／『（別筆）滝尾山之経也』」（巻第54）のごとく，寛治6年（巻第54・112等17巻）・7年（巻第303等7巻）・8年（巻第495の1巻のみ）など，寛治6（1062）～8年の年紀をもつ書写奥書がみえることからも，その時期に書写されたとみるのが妥当であろう。また巻第494の奥書（年紀なし）によると，滝尾寺住僧範誉を願主として，その勧進のもと近隣の結縁衆の助成をえて，写経が遂行された

ことがしられる。僧範誉は範与ともかかれ，寛治頃の人である（巻第497）。結縁衆には河内讃良郡山家郷や摂津西成郡柴嶋村の住人がみえ，在地領主が「現世安穏後世菩提」「息災延命増長福寿」等を祈念して，結縁衆やその縁者自ら，或はまた僧に依頼して大般若経を書写し，滝尾寺に奉献したものであろう。料紙に黄色のほか，淡褐・濃褐色のがあることや，筆跡に10巻まとまって同筆のものがある反面，1巻数筆でかかれているなど一様でない。なお奥書には，「滝尾寺之経也」（巻第38等），「滝尾寺」（巻第316等），「滝尾寺之本」（巻第336等）のみのものもみられるが，これは書写よりやや降る院政期頃の筆と考えられる。滝尾寺については未詳であるが，四条畷市南野（旧河内讃良郡甲可村南野）の竜尾寺がその付近の清滝・滝畑などの地名により関連があるのでないかと思われる。以後滝尾寺に伝わったであろう当経は鎌倉時代を通じて，破損巻首尾の補写（巻第18等），欠失巻の補巻がなされている。

ところが南北朝期にはいると，巻末補写の場合には「暦応弐年七月廿五日　於天神宮書写畢」（巻第405）とか，修補のときには「暦応弐年己卯七月廿三日之修復／岸和田天神宮御経也」（巻第447）の修補奥書を認めたものがでてくる。また「岸和田庄御経也」（巻第347等）とのみ記したのも数巻あり，これらも南北朝期筆と考えられるが，このことから，この大般若経は暦応年間（1338—42）には滝尾寺から岸和田庄の天神宮に移されていたことがしれる。岸和田庄は鎌倉から南北朝期にかけて妙法院文書に新日吉社領とみえる茨田郡にあった庄園（現門真市岸和田）であろう。やや時代が下る（応永頃）奥書に「河内国讃良郡八箇所岸和田佐多宮常住也（下略）」（巻第600）とあるが，もしこの岸和田佐多宮が天神宮と同じだとすると，現守口市佐太（旧茨田郡庭窪村佐太）にある佐太神社がこれにあたることになる。佐太神社もまた菅原道真を祀る社である。讃良郡岸和田佐多宮とあるのが問題であるが，他巻にも「河内国讃良郡岸和田庄於天神宮／書写畢」（巻第167）とみえ，岸和田庄域が両郡に跨がっていたか何かで，讃良郡岸和田とかかれたのであろう。しかし岸和田と佐太神社とは若干距離があり，また岸和田に菅原神社という社があることからみて天神宮すなわち佐太神社とは断言はできない。滝尾寺から天神宮に移った時期は，もし次の奥書「岸和田／『滝尾寺之本』（別筆，院政期）／□□□庚午年歳奉渡也」（巻第336）を関連ありとすると，元徳2年（1330）かと思えるが，なお検討を要する。

南北朝から室町前期にかけて当経が天神宮にあったことは，巻第1，100，300，400，500，600の巻末に，応永年間天神宮・常法寺での真読を記した裏書があることでしられる。その後天文年間の校合や，室町後期に巻末に梵字真言（光明真言等三種）がかかれるなどののち，春日版版経20巻が補巻され，江戸時代にいたり海住山寺に入ったと思われ，宝永年間に修補が加えられたのは前述のごとくである。海住山寺では「十一面観自在尊宝前什物」「観音宝前什物」として本堂（観音堂）に安置され，月次転読などに用いられていたようである。

なお，墨書校合には書写時のもののほか，以後鎌倉—室町にかけて数種あり，また鎌倉後期・室町前期2種の墨書仮名（字音）が少々付されている。　（百橋　明穂・綾村　宏）

〔奥書〕（抄）

（巻第一一二）

経一部

書写法師義範　結縁衆大国政国女津守氏所生

愛子従類眷属為現世安穏後世菩提奉敬書写

寛治六年九月下旬

（巻第一六二）

宝永五年戊子九月吉日修補之

山州瓶原海住山寺住物一臈摩尼珠院光賢

（巻第二八四）

（別筆）「暦応弐年乙卯七月廿三日　修覆（ママ）

岸和田御経」

経一部　願主範誉

奉書写錦助国女藤原氏為現世

□　□

（巻第三〇三）

寛治七年七月五日結縁書写内蔵国忠女平岡氏

（巻第三二五）

経一部　願主僧範誉奉書写物部則光結女秦氏

筆者物部貞元結女津守氏所生等

（巻第四九四）

願主滝尾寺住僧範誉聖人助成讃

良郡山家郷住人　為菅乃光明女

美努氏現世安隠（ママ）後世菩提也

（巻第四九七）

寛治七年十一月廿七日共　願主僧範誉

（巻第五一三）

（又別筆）「滝尾寺之経也」

経一部

願主僧（別筆）「範与」結縁衆摂津国西成郡柴嶋村住人

王範資結女錦氏　筆者王為範結女津守氏

為現世安隠（ママ）後世菩提也

（巻第六〇〇）

滝尾寺

（別筆）「河内国讃良郡八箇所岸和田佐多宮常住也

修補勧進上人　大弐公覚眼　越後公什賀

経師大工　南都中院伊勢房栄順（以下切断）」

（同巻巻末紙背墨書）

奉信読　部数事

於天神宮一部　応永十二年乙酉五月廿五日　読誦曇凌庵主　願主覚円阿忍慶

於常法寺一部　応永十五年戊子八月十六日　読誦曇凌庵主　願主越前公覚実

於天神宮一部　応永十五年戊子九月三日　読誦曇凌庵主　願主少納言公祐十

於天神宮一部　応永廿九年壬寅三月廿日　前建仁書記　読誦釈聖順老年五十九歳　勧進聖越前公覚実　少納言公祐十

同壬寅　読誦助音衆　号一乗坊賢恵　号奥坊祐十　号中坊覚実　号宮坊十賀

就于堂社一部　応永廿九年歳次壬寅六月廿八日未刻満散

代々号西や檀那橘朝臣綱久或名宝増

当所公吏　読誦桑門聖順道号大川五十九歳

助楊覚実大徳祐十大徳　什賀大徳

（同巻巻末裏打紙墨書）

宝永六己丑年正月廿八日　読誦吉沢庄右衛門

同　三月十日　読誦山本夫久

（巻第四九四）

又如慮[illegible]

来元去

（巻第四九七）

（巻第五一三）

# 法輪寺・法起寺彫刻調査

美術工芸研究室

法輪寺・法起寺とも奈良県下屈指の古刹でありながら，両寺が所蔵する彫刻について詳細な調査が行なわれなかったのが現状で，今回の調査で幾つかの新知見を得ることができた。ここでは上代の木彫像を考える上で重要な手懸かりとなる法輪寺木造薬師如来坐像（重要文化財），今までほとんど注目されることのなかった法起寺木造十一面観音立像の二件についてその調査結果を報告することとする。

## 1．法輪寺木造薬師如来坐像

像は頭上に螺髪を植つけ，耳朶は不貫，三道を刻まず，偏衫の上に通肩の大衣をまとい，腹部に裳の結び紐の結び目をあらわす。各屈臂，左は膝上で掌を仰ぎ，五指をわずかに曲げて薬壺を執り，右は掌を前にして立て，五指をわずかに曲げ，右足を上に結跏趺坐する。大衣の裾を台座前面に垂らす。台座は大小宣字座二段重ね，上段分は上框，受花，腰部，反花，下框二段からなり，下段分は上框二段，受花，腰部，反花，下框二段からなる。

像（本体）は樟材，彩色（漆下地，殆んど剝落），彫眼。頭部，体部を通して中心部を一材とし，体部はこれに肩，胸，腹，袖，背面などほぼ全面にわたり厚さ4～10cm程の10数材を貼合せている。像底は台座上にひろがる衣の裾を含め約4cm厚さの板（左右二材及び他に小材四）を当てている。これらの材は現状いずれも釘留としている。こうした像の根幹部に両手首を各差込矧つけ，両脚部は木芯を籠めた横一材を矧つけている。台座前面に垂れる裳先は横一材製，左右にL字金具各一を打付け，各その一辺を像底と台座上面の間に差込んで留める。なお，鼻先，顎，右手第四指，襟背面などが後補で，螺髪の大半，左耳朶，左手第五指，像底左半材，垂裳端は明治42年の修理の際に補われたものである。台座は各段毎に組立てられる構造で，上下分共，各段は四方矧寄或いは前後二～三材矧，腰部を中心に各内枠が設けられている。上段分の上框，受花，腰部の束，下框二段，下段分の下框上段の両側面材，同下段の全て，内枠などが明治の修理の際新補されたもので，この他一部に古材が転用されている部分がある。なお，宝珠形，竹竿形の柄をつけた光背も全て明治の修理で新調されたものである。

本像は法隆寺金堂銅造釈迦三尊像の中尊との様式上，或は形式上の類似から飛鳥時代の止利様式の木彫像として早くから注目されていたが，この時代は鋳銅像が主流で，木彫像について詳細な研究が行なわれておらず，今回の調査や昭和41年に行なわれた中宮寺木造菩薩半跏像の修理などが契機となって，飛鳥時代の木彫像の研究が進展するこ

とと思う。今回の調査で特に注目されたのは本体の木寄の技法である。本像の場合，前述のように基本的には一木造といえるが，体軀の凸部に薄板を当てて矧足しているといった感じで，木彫像における「彫り」，「刻む」技法に塑像などのように「盛上げる」といった意識が加味されている。平安時代以降の寄木造の像にみられる，あらかじめ計画された木取は行なわれていない。このことは中宮寺菩薩半跏像の木寄や鋳銅像の中型を思わせるような底部からの内刳の状態，或は法隆寺百済観音立像にみられるような乾漆を一部に使用した塑形技法など共通する意識が働いていると解され，平安時代以降の一木像や寄木造の像にみられる木彫像とは異なり，木材という材料の特性といったものはそれ程意識されておらず，鋳銅像や塑像などと同様の塑形技法がその基本となっているものと考えられる。本像は将に飛鳥時代の木彫技法，或は彫刻意識を知る好資料ということができよう。

薬師如来構造図(一)

**2．法起寺木造十一面観音立像**

頭上に釣鐘状の髻を結い，頂に仏面一，天冠台上に蓮花座付の化仏立像一及び菩薩面等十面を付し，髪際まばら彫，耳朶は不貫，三道をあらわす。天衣・条帛をかけ，裳（折返一段）を著け，左手を屈臂して胸元で水瓶を執り，右手は垂下，掌を正面に向け，直立する通形の十一面観音像である。台座は自然木の根元を利用した岩座で，現在壇上に2分の1程があらわれ，以下は壇の中にかくれている。本体は杉材製で，根幹部を中央に木芯を籠めた一材から彫成，後頭部，背中，腰以下から背刳（刳は像内貫通）を施して木芯を除去，それぞれ幅40cm前後の蓋板を当てている。頭上の各面及び化仏を植つけ，左手は肩，肘，手首で各矧つけ，右手は肩以下一材を矧つける。足部は左足首が朽損したため後補されているが，当初は両足首とも台座の一部(岩座に差込む枘も兼ねる)を含め本体と共木から彫出している。岩座は杉の根元を利用し，上半部の前後左右に別材を矧足している。頭上面，化仏，両もみ上げ，冠飾，冠紐，胸飾，後頭部及び腰以下の背板，両肩以下，左足首（像底から像内に差込んで留める），右足内側の一部などが後補で，この他，本体の左側の損傷が著しかったため，左脇から腰にかけて数ケ所に埋木があり，右側の一部にも同様の埋木がある。肉身部の漆箔，衣部の彩色（いずれも泥地）も後世の仕事で，持物の水瓶（木製，漆箔），挙身光（木製，漆箔）台座の矧木なども後世補われたものである。なお，これらの後補部は右足枘に元禄7年（1694）の修理銘があり，恐らくこの時の

同　左（二）　　同　左（三）底部

ものと認められる。

法起寺講堂の木尊像で 3.4mを上廻る巨体の根幹部を一材から彫成する一木造の像である。頭部，体軀とも幅と奥行とを十分にとっており，やや寸のつまった面相部には眼鼻立ちを大振りにつくり，胸や腹のふくらみには抑揚があってくびれをはっきりと刻み，どっしりとした重みが感じられる。衣部には翻波をまじえた太目の衣文をあらわし，随所に渦文を配しており，全体に平安初期の一木像に通じる古式の像容を示している。ただ本像の場合，体軀の表現に柔か味がみられ，衣文線に鋭さが減じているところなどを考慮すると，制作年代は平安中期，10世紀末頃と推定される。この像で特に注目されるのは自然木の根元を利用した岩座上に立つことである。一般に立・坐像を問わず仏，菩薩の像は蓮花座上に置かれており，岩座を配す例は特殊なものに限られている。立木仏の作例がほとんど例外なく岩座上に置かれており，本像も現状では立木仏として祀られていて，本像の形からもその可能性が強い。ここで問題になるのは本体と岩座との関係で，造像当初のものであるか否かということである。前述のように岩座は自然木のままで全く彫刻されておらず，その形を様式上から判断することは不可能である。しかし岩座上面に穿たれた枘穴の状態から元禄修理時を遡ることは違いなく，用材が本体，岩座共杉材であることや，足枘と岩座の朽損状況がかなり似ていることから，或は本体と岩座が同木から木取りし制作したという可能性が強い。勿論記録等で確め得ないが，造像当初乃至それに近い頃から本像に付属していたと判断されるものである。

本像は平安中期の巨像の作例として評価されることは勿論であるが，立木仏であるとすれば現存最古の作例であり，彫刻史上貴重な存在ということになる。

（田中　義恭）

# 東大寺善財童子絵巻について

美術工芸研究室

東大寺絵画調査は，9月8日よりはじめて調査回数はすでに23回を数え，これまで約100件の調査を行ない，それは全体の約6割に当っている。なお東大寺絵画は先に南都仏教絵画の研究の一環として，昭和46年3月当研究室が「東大寺絵画調査目録」を作成し，一通りのリストアップが完了している。それに沿って詳細な調査を行ない各作品の調書を作成し，東大寺に残る絵画の全貌を明らかにしようとするものである。

これまで調査を行なった作品のうち，今回ここに紹介する「善財童子絵巻」1巻は，国宝に指定されている東大寺蔵善財童子絵巻（奈良国立博物館寄託，以下国宝本）及び，巷間に流出したその断簡を含めたものの模写本である。断簡として切断される以前の全段そろっていたもとの姿を伝える点で貴重な資料といえる。

原本に当る善財童子絵巻は別名華厳五十五所絵巻とも呼ばれ，華厳経入法界品に基づいており，画中の色紙形に書かれた讃文は北宋楊傑の「入法界品讃」から採用している。善財童子は文殊菩薩の勧めに従い54人の善知識を訪ね，最後に普賢菩薩の下で大乗の行願を得るというものである。全段55段に各善知識を歴訪する善財童子が描かれている。爽やかな淡彩の彩色と軽やかな筆致による清純で親しみやすい画面がくり展げられ，その不思議な魅力で多くの人に感銘を与えている。そのうち東大寺国宝本は，途中第22段から第31段までを欠き，又巻末の第48段から第55段までを失っている。すなわちこの部分は断簡として諸家に分蔵され，第22段から第31段までは藤田美術館，第48段，49段は上野家，第50段から第53段は友田家，第54，55段は東京国立博物館にある。

この模写本は紙本淡彩で，縦29.7㎝，横26～27㎝の料紙72紙を継いだ一巻の巻子本である。原本と同大であるが，紙の横巾が原本に比べ小さく，紙継は異なる箇所に当っている。全段55段を完備しており，原本と同様各段の区切りはなく，色紙形中の讃文を伴った各場面が順次描かれる。巻頭第1紙右下隅に朱円印を有する以外に落款・印章はない。模写された時期は後述する状況から明治20年頃と推定される。淡墨の輪郭線はなかなか巧みな線で原本を忠実に写し取り，しかも筆に勢があって模写の際にしばしば見られる筆の渋滞は少ない。賦彩も原本のもつ明度の高い淡彩の美しさをよく伝えている。朱・丹・白群などは原本の色調に合せ，ことに衣の襞の隈取りなども正しく表わしている。明るい線を施し，且つ原本に見られる顔料の剝落した緑青焼けの状態もよく表わして，原本のもつ爽やかな色彩を写そうとしたことがわかる。又黄色は原本では恐らく下に白

善財童子画像

色顔料を塗り，上から有機質の藤黄をかけたもので，現在はやや黄かっ色を帯びているが，模写本ではその変色した色をよく現わしている。色紙形には原本と同じ讃文を書込んでいるが，原本の持つはみ出すばかりの力強い書体ではない。原本を忠実に且つ的確に伝えたこの模本の筆者は明らかではないが，この模本とほぼ同じ頃にいくつかの絵巻のすぐれた模写がつくられたようで，時々巷間に散見することがある。

この模本によっていくつかの事実が確認できる。まず国宝本では第一段文殊菩薩指南の段から始まっているが，楊傑の讃頌では冒頭に毗盧遮那如来讃があり，それに対応する絵が最初にあったかとも考えられていたが，模本は国宝本と同様であり，当初から毗盧遮那如来の段は描かれてなかったと解される。更に国宝本の第21段は，それに続く第22段から第31段までが藤田美術館に流出したため，第32段と直接継ながっているが，その継目を細工するため，第32段の善財童子の部分を切り取り，第21段の末に貼布している。そのような断簡切断時の改変がこの模本によって確認される。

国宝本については従来より東大寺における伝来など一切明らかならず，明治の碩学黒川真頼をして「此絵巻ノミ独リ世ニ埋没シテアリシハ不審ナリ」（国華176号明治38年1月　ただし執筆は明治24年）と嘆ぜしめたほどである。そしてその後何時如何なる事情で断簡として先述の部分が流出したかも明らかではなかったが，この模本によってその一端を知ることができる。亀田孜氏によって「ただ明治20年頃に模写の為に寺外に搬出され，その完全な模本と入れ箱が幸に還納されたことが知られている」（清閑180号昭和18年11月）と伝えられ，この模本がそれに当たると解される。しかもこの時断簡が切断されたことを示唆しており，模写はそれを前提として行なわれたのであろう。諸家に離散する悲しむべき運命を前にこの模本が作られたといえよう。以上善財童子絵巻の模本の紹介と確認された問題点を略述した。

この他東大寺には善財童子関係のもので，絹本著色善財童子図1幅がある。合掌して腰をかがめた，善知識を歴訪する時の善財童子の姿を描いた単独像である。善財童子は54人の善知識を歴訪する図や，その一場面である補陀落山に観音菩薩と対座する図としても描かれ，又渡海文殊を先導する童子としても表わされる。しかし本図の如き単独像の遺例は極めてまれである。文献上では三宝絵詞にいう法華寺花厳会の造像が著名である。また明恵の影響によって東大寺で善知識供が行なわれたことが知られており，凝然の所述書目中に善財童子講式一巻が見えている。又後世の記録ではあるが東大寺年中行事記享保11年寺宝展観目録中に善財童子の木像が記録されている。本図もそのような善知識供に用いられたものであろうか。くせの強い描線と暗寒色を主とする重厚な彩色であり，又着衣には金泥によって唐草文，団花文などが施され，かの絵巻に描かれた童子とは対称的な作風を示している。むしろ高麗画とされる楊柳観音図に描かれた善財童子の像容や表現が本図と相通ずるところがある。よって表現上の特色や高麗仏画との関係を考えても本図の製作は南北朝時代を遡りえないと思われる。なお本調査には大和文華館林進氏の協力を得ている。

（百橋　明穂）

# 奈良県民家調査

建造物研究室

昭和51年度に奈良県民家緊急調査を同県教育委員会とともに実施した。奈良県ではこの調査を昭和41年度に実施したことがあるので，今回は2回目である。調査を再び行なった理由は，前回調査が，1) 調査対象が18世紀末頃までの民家に集中し，主として江戸時代前期の奈良の民家の状況を明らかにしたが，江戸時代後期について調査の密度が薄かった。2) 対象民家の規模が主に中型以上の民家を対象としたために小型の農家を含めて変遷を考察することが十分でなかった。3) 未調査市町村があった。また，前回調査後，4) 大和棟の成立の上限を考察しなおす必要が生まれた。5) 当時にはまだ建替えの心配がなかった江戸時代後期の民家に，改造や建替新築の危機が訪れていて，消失する前に調査する必要がある，などであった。なお，今回の調査には，上野・中村・松本が参加した。

調査は第一次調査として，県下37市町村に依頼して古民家をリストアップしてもらった。その際，前回調査や昭和41年度以降の市町村独自の民家調査，さらに奈良県の民俗調査などで調査対象となった民家は除外した。今回の調査では，このリストアップされた民家を中心に調査し，既往調査のリストの中からも重要と思われる民家を調査に加えた。したがって今回と既往の調査とを加えるとほぼ全県下にわたって実施したことになる。今回リストアップされた民家は約560棟，そのうち調査したのは約420棟である。

奈良県下の近世民家は他県に比べてきわめて多い。なかでも19世紀前半の民家はおびただしい数が残っている。しかもこうした古民家は，単体としてはもちろんのこと集落や町並としても多く残っていて，簡単な予備調査では伝統的景観を保持している集落・町並は少なくとも県下約200カ所あることがわかっている。今回の調査ではこうした集落・町並の所在の発見にも務めた。また民家の古式な間取・形態が根強く受継がれてきている。例えば土間とクチノマ境を土壁にする閉鎖的な古形式が江戸時代末期の民家にも見られる。

今回の調査の結果，県下の民家の平面・構造などについて，その地域的特徴，歴史的展開に

第1図　奈良盆地の集落（大和棟の農家）

第2図　南部山間地の集落，板葺の農家

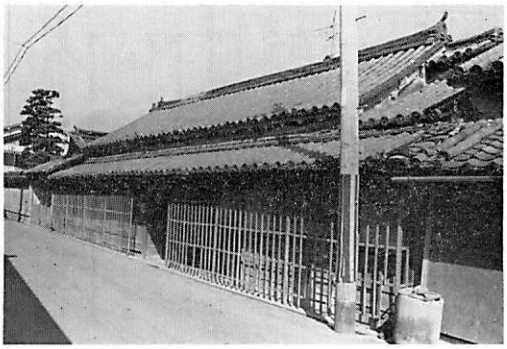
ついて知見を深めることができた。前回調査の成果とあわせて，奈良県民家の概要を述べる。なお，前回調査の大要は，『奈良県文化財調査報告第13集・民家緊急調査報告書』としてまとめられている。

前掲報告書で，奈良県民家の状況を次の4項にまとめている。1) 奈良県には古い民家が全国的にみても多数遺存し，そのなかには17世紀まで遡るものも少なくない。また，これらの残された民家は質的にみてもかなり良いものが多い。2) 個々の主屋のみでなく，屋敷構えがよく保存されている大型民家が多く，それらは時代が下るにしたがって，いわゆる大和棟になる傾向が一般的である。これは山間部ではあまり認められず，奈良盆地に類例が多い。3) 奈良盆地の民家は一般に4間取あるいは6間取の平面になるが，山間部では3間取ならびにそれから発展した4間取の民家が多い。平面の形式自体18世紀までは別系統に属していたと思われ，奈良盆地と山間部の民家が併列して発展していったとみられる。両者が交流・融合するのは19紀世になってからであろう。4) 奈良市・大和郡山市・橿原市今井町・五条市五条町及び新町などでは，近世町家の遺構がきわめて多くみられ，またそれらには18世紀に遡るものが少なくない。町家平面と農家平面を古いもの同士比較すると，17世紀に遡るものは構造自体は異なっているが，平面的にはあまり差がないように思われる。

さらに民家の平面の分類とその分布について，前掲報告書では，農家について，(1) 大型住居にみられる古式な5～6間取，(2) 平地部でみられる喰違い4間取，(3) 平地部のほとんどの民家にみられる整形4～6間取，(4) 東部山間地でみられ3間取，(5) 東部山間地でみられる喰違い4間取と整形4間取。(6) 吉野川流域の喰違い4間取と整形4間取，(7) 西吉野地方の3間取，(8) 西吉野地方の喰違い4間取と整形4間取，(9) 十津川地方にみられる桁行に長い間取，(10) 北山地方にみられる3～5間取の10種類に分類し，(2) と (3)，(4) と (5)，(7) と (8) は同系統としている。

農家であっても中世武士の系統をひく上層農家や大庄屋の民家（A型）では，一般農家の変遷と様相を異にし，江戸時代初期から4間取を成立させていたが，これら上層農家とあとでのべる町屋（F型）を除くと，奈良県民家の平面は，十津川地方などの南部山間地の山間地型と

第3図　東部山間地の農家



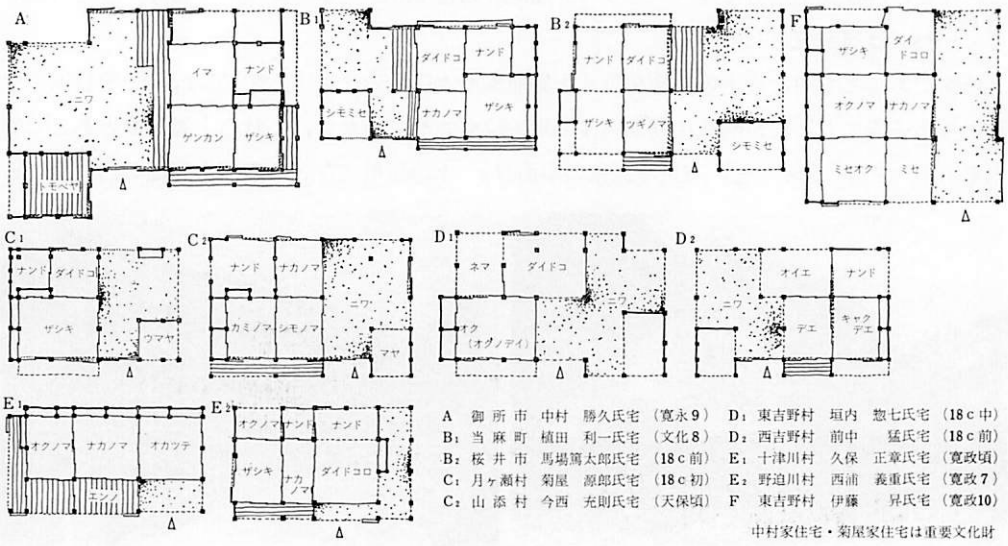
第4図　本瓦葺の古い町家

でもいうべき平面（E型）と，それ以外の地域での構造・外観・屋敷構などによって奈良県の人文地理上の3地域にほぼ対応してわけられる前座敷型の平面（B型～D型）とにわけることができる。すなわち，B奈良盆地（図$B_1$，$B_2$）　C奈良盆地の東部山間地（図$C_1$，$C_2$）　D奈良盆地の南・吉野地方（図$D_1$，$D_2$）　E吉野地方の南山間地（図$E_1$，$E_2$）の4地域である。この他に町家（F型）がある。この分類と前掲（1)～(10）の分類の対応関係は，(1）がA型，(2)(3)がB型，(4)(5）がC型，(6)(7)(8）がD型，(9)(10）がE型である。

B型～D型の前座敷型の平面をもつ一般農家では17世紀に遡る2間取・3間取の遺構はないが，18世紀前期の例があり，古式な間取として興味深い。すなわち，上層農家の早い時期の4間取とは別系統として，一般農家では前座敷型2間取・3間取があり，それを前身型式として18世紀末から19世紀初にかけて4間取へと移行していくことが考えられる。C型・D型では3間取から4間取への移行を裏付ける江戸時代前期の3間取民家がある。$B_1$，$B_2$の間取は奈良盆地の各地に広く分布し，近世を通じて続いた奈良県下の代表的な間取である。B型の農家は大阪・河内，京都・南山城にまで分布している。B型の喰違い4間取は$B_1$のように梁行に喰違うのが通常であり，一方C型・D型では桁行に喰違うのが普通である。ダイドコロに注目すると，B型ではダイドコロから土間に板縁を張出すが，C型には板縁がなく，D型ではダイドコロは土間に張出した一室として設けている。

屋敷構を見ると，B型では主屋の前に門屋があり，これに連らなって納屋・土蔵などが建ち並び，中庭を取囲む。C型～D型では，主屋と納屋・土蔵が1棟づつ並んで建ち，その前に庭をとる。主屋規模も屋敷規模もB型がC型・D型よりも一般的には大きい。

構造についてみると，A型～D型は叉首構造で，このうちD型には棟束が立つ。D型のうち




第5図　奈良県民家の平家・復原平面図

伊賀藩に属していた曽爾村・御杖村などでは土間上の梁組に特徴があり，伊賀地方の農家の系統と考えられる。E型は和小屋組である。

$E_1$ は十津川地方，$E_2$ は野迫川地方の代表的な平面である。南山間部は全てが同じ系統とは言えない点もあるが，狭い土間とダイドコロを中心とした間取で，桁行に長いことや屋根が板葺で勾配がゆるいなどの特徴をもつので1グループとする。これらの山間地型の間取は全国各地の山間部の民家と共通する性格である。E型は全体的に建築年代が新しく18世紀中頃まで遡る例は2棟しかない。しかし，古式で興味ある間取である。十津川の尾崎家（18世紀末）や旧木村家（19世紀初）は，ダイドコロ・ザシキが横に並ぶ2室住居と言ってよい平面で，これに炊事スペースが差掛けの庇で取付いていたらしい。なお，野迫川地方の民家には江戸時代はほとんど草葺であったのを明治時代に板葺に変えた家が多い。復原すると杈首構造・草葺となりE型に分類しないで，隣接する和歌山県山間部に分布する間取と考えることも可能である。

年代が確実にわかる民家が現在約100棟ある。この数は調査が進めばもっと増加するであろう。17世紀の年紀を持つ民家は，慶長12年（1607）の日本最古の棟札を持つ栗山家住宅（重要文化財）をはじめとして県下で計8棟あり，18世紀前半の民家は13棟，18世紀後半では22棟ある。なお，吉野地方では棟上げ時に木槌をあげる習慣があったらしく，木槌によって年代がわかった家が10棟ある。これらの年代が確実にわかる民家は，編年の重要な指標になる。

B型については大和棟の成立についての問題がある。B型には現在大和棟が多いが，当初から大和棟である家と，改造して大和棟になっている家がある。奈良盆地の17世紀に遡る民家では復原すると寄棟になり，大和棟はない。上層農家で大和棟が確実にあらわれるのは18世紀中頃であり，それ以前に建てられたと考えている民家もやはり18世紀中頃に大和棟に改造している。大和棟は上層農家では18世紀中頃に成立し，次第に一般農家で採用され始め，江戸時代末期から明治時代に広く普及したと考えられる。こうして奈良盆地では江戸時代後期に，$B_1$，$B_2$ の4間取で大和棟という奈良県を代表する民家があらわれ，その伝統が最近の住宅にまで影響を与えている。

町家では17世紀に遡る古いものは同時期の農家と平面は大差がない。18世紀以降平面は通り土間に沿って1列3室並ぶ小型の町屋の間取や，間口が広くなって2列4室～6室並ぶ間取が一般的である。ただし五条市の町家は，奈良市・大和郡山市・橿原市の町家と平面は似ているが構造が異なっている。すなわち，カマヤやザシキが主屋から突出る角屋となっている。したがって，主屋の梁間は他の町家に比べて狭く，主屋に限っていえば，通り土間に沿って2室とる例が多い。町家では18世紀後半頃から低い2階建となり，物置などに利用される。この「つし」は江戸末から明治にかけて次第に高くなり，窓を設けて部屋として整備するのが各地の傾向である。

なお，今後補足調査も加えて報告書を作成する予定であるので，未解決の問題などはそれに期したい。

（上野　邦一）

# 当麻寺東西両塔の調査

建造物研究室

当麻寺は二上山の東南麓にあって，古道「竹内越」にも近く，古くから開けた土地に伽藍が営まれた。その創立は天武年間と伝えているが，その頃まで遡る建築遺構は残されていない。現在，国宝・重要文化財建造物は東塔，西塔，本堂（曼荼羅堂），金堂，講堂，薬師堂の6棟で，このうち，建立の経過や変遷について問題が多い東西両塔について調査を行なった。

**西塔**　壇上積基壇上に建つ木瓦葺きの三間三重塔婆である。基壇上面は内外とも凝灰岩切石敷の土間床で，四方中央間を板扉，脇間を土壁とする。柱は円柱，軸部は地長押，内法長押，頭貫，台輪。組物は三手先組，中備えは初層のみ間斗束，軒は二軒繁垂木である。この塔は明治30年に国宝に指定され，大正2年に解体修理工事が行なわれたが，伏鉢銘によると，建保，慶長，正保，明和の4期に修理が行なわれたことが知られる。

初重では長押・扉口・天井・須弥壇がすべて大正修理時に新材で造り替えられ，柱痕跡によると，床張りとなった時期がある。また，軒廻りでは尾垂木を4㎝程外に引出して支輪勾配を緩くし，地隅木を8～17㎝程内に引込んで垂木を打替えている。

初重垂木割の現状は中間に9支，脇間に7.5支，出桁まで5.5支を配り，隅柱上で垂木を真に，中柱上と出桁上で手挟みとして，垂木間はそれぞれ異なる。支輪・小天井割りや出桁先端の垂木欠込み痕跡から当初の垂木割を復原すると，1支寸法を中間とほぼ等しく脇間と軒先に配って，隅柱上と出桁上では垂木は真にも，手挟みにもならない。この垂木割の変更にともなって，脇間の支輪割と軒小天井格子割りも変えている。

二重では尾垂木・出桁・隅木は全て新材で，三重では柱・台輪・斗・肘木・垂木以外は全て大正の取替材である。修理前の実測図によると，三重は尾垂木を内に引込んで，立上りの強い支輪に改造されていたが，大正修理に際して，現状のように二重に合わせて勾配の緩い支輪に改めている。また，二・三重では斗や肘木，垂木に後世の補足材があり，当初垂木に数回の打替え痕跡があるなど，中・近世の改造が多く認められる。

柱間割りは初重では中間を脇間（中間の8割）より広くして，二・三重では3間等間とする。垂木割りは初重では前記のように脇間・出桁の配置と無関係に垂木を配り，二・三重では柱上出桁上とも手挟みとして，垂木間をそろえている。

斗栱は初重では出桁下斗栱が平尾垂木，隅尾垂木上とも三斗形式とし，二・三重では隅で一木の連続した肘木を通している。また隅行の一段肘木は，初重は桧材で斗を重ねて二段肘木を受け，二重では斗と一木になった欅材を用い，肘木側面に斗形を刻木している。

斗の大きさは初重では大斗上三斗が上段斗より若干大きい。二重と三重では殆んど差はないが，初重と二重では見付幅で平均3㎝程の差がある。間斗は古いが，二・三重の斗とほぼ同寸で，束に桧の転用古材を用いるなど，初重間斗束は後補の可能性も考えられる。斗栱全体の木

割は初重は二・三重より木太く重厚である。

台輪の隅仕口は初重では台輪留とし，二・三重では三枚組仕口とする。

心柱は古く，細い欅材で，心礎の脇の方に片寄って立っていて，心礎と心柱とは合わない。心礎の中央には直径70.5cmの心柱枘穴があり，石で蓋をしている。なお，大正修理の際に心柱頂部から舎利容器・古銭・建保7年及び明和3年の修理記録等の納入品が発見された。

材種は各重とも柱・斗栱に欅材を用い，台輪・頭貫・通肘木・尾垂木・桁などの長材に桧材を用いるが，二・三重では斗や肘木に桧材を混用し，一部の長材に欅材を用いるなど，初重ほど明確な使い分けをしていない。

この塔はすでに指摘されているように，様式上平安時代初期の建立と考えられているが，詳細な検討を要しよう。なお，初重と二・三重では形式技法の差が大きく，二・三重は初重よりも若干遅れたものと思われる。

**東塔**　二重・三重は柱間2間とする。柱は上部を細め，肘木には笹繰りをつけ，下面に胴張りがあり，軒小天井の外の桁と，これを支える斗栱を隅で留に納めるなど，奈良時代の技法をもっている。隅出桁下肘木は西塔の二・三重と同様に，隅で一本の長い肘木を通しているが，これは中世の改造と考えられる。また，垂木は角垂木で各重とも中世材，明治材に混じって当初材を残すが，三重の地垂木は少なくとも2回の打替えが認められるほか，三重では軸部，斗栱，軒廻りとも中世に大改造を受けている。

各部の技法をみると，東塔は奈良時代の末期に属するものと思われる。復原についてなお問題を多く含み，引続き補足調査を行なう予定である。

（岡田　英男・宮本長二郎）

現状断面図　左西塔　右東塔

初重斗栱詳細　上東塔　下西塔

談山神社は，もと妙楽寺と称した寺院で，鎌足公をまつる聖霊院があり，古くから神社と寺院の性格をあわせもつ特異な存在である。明治維新の神仏分離のさいに，寺院を廃して談山神社となった。

建造物研究室では，かねて談山神社とその歴史環境の総合的な調査を計画しており，次のような調査事項をかかげている。

1．現存堂宇の調査―本殿，拝殿，十三重塔をはじめ，江戸時代以前の建築は20棟をかぞえる。
2．古社殿等の調査―近世を通じて度々の造替をしており，その本殿は談山神社境内に東殿と惣社本殿，広陵町の百済寺本堂，東大寺の本坊持仏堂として四棟が残っており，また輪蔵が橿原市中町の浄楽寺本堂として残っている。
3．境内および房舎の調査―境内には多くの社殿が現存するほか，房舎があって，建造物群を形成している。またかつてはさらに多くの房舎があった。
4．造営関係史料の調査―永禄9年の本殿ほかの絵図面をはじめとして，造替のたびごとの史料がある。
5．環境の調査―表鳥居から，談山神社にいたる4㎞の間の参道にそって，丁石や門前の民家があり，周囲の自然とあわせて，歴史環境をつくっている。

昭和51年の夏，まず現存堂宇の調査として，本殿一郭の建築のうち本殿をのぞく，拝殿，楼門，東透廊，西透廊の四棟について，主として当初部材の残存状況を調べた。現本殿は嘉永3年の造営になるが，他は元和造営になり，寛文年間の本殿造営のさいに大修理を受け，現状のようになったと考えられる。この社殿は昭和12年に内務省によって大修理を受けているため，そのさいの取替材が多いと予想されていたのであるが，各部材をこまかく調べた結果，旧材が非常によく残っていることが明らかになった。

なお今回の調査は，奈良県教育委員会，談山神社と共同で実施した。また，昭和51年11月に本殿，拝殿，東透廊，西透廊，楼門，東宝庫，西宝庫，摂社東殿神廟拝所，閼伽井屋，末社惣社本殿，末社惣社拝殿，末社比叡神社本殿が重要文化財に指定された。　（宮沢　智士）

# 識名園庭園の実測調査

建造物研究室

識名園は沖縄県那覇市真地にある。当園は琉球王尚穆時代（1783）に作庭に着手し，尚温王時代（1800）に完成したと伝えられる琉球庭園を代表する庭園である。戦前（1937）の吉永義信氏の調査によると，心字型の池が園の中央を占め，その中に大小2個の中島と島に架かる石橋，亭がある。池の西側に水源となる育徳・甘醴の2つの湧泉がある。園の北に主要建物があり，室内に園に関する6種の木額が掲げられている。その他園路，勧耕台（高台）があり，総計12,208坪の面積を持つと記されているが，現在，戦災により，建物，中島，橋などが破壊され，荒廃した状況である。今回の調査は，識名園復旧のために設けられた識名園環境整備委員会の要請により，中島，建物跡の発掘調査と併行して現状の地形実測調査を行なったものである。調査は伐開を済ました池周辺部を平板測量をして，周辺の密生林の部分はコンパスで補足測量を行なった。成果品として1/200平面実測図（下図）（等高線間隔50cm）を得た。なお育徳泉，橋，石垣の一部については修復前の状況の写真実測を行ない，1/50の各立面図を作成した。

（田中　哲雄）

# 写真測量による建造物の経年変形

建造物研究室

わが国の古建築は木造建築であるがために，経年的に各部材が劣化し，また継手・仕口に弛緩を生じて，構造自体が変形・破損に至ることが避けがたい。変形・破損が一定の限度に達した場合，建造物を部分的に補強修理するか，あるいは全面的に解体修理するかが必要となる。したがって，建造物の保存維持のために，経年的な変形・破壊がどのような部位に現われるのかを把握することによって，修理時における改善策の基礎資料を求めうることになる。建造物の実測は，従来各部材の寸法を測って集成していたため，実測に当っては足場を組み，直接個々の部材を計測する方法がとられてきた。そのため，実測作業を行なう期間と労力は多大のものがあった。これが障害になって，建造物の変形・破損を経年的に実測してその要因を求めることが困難であったのである。

今回，これら実測作業における時間の短縮と省力化をはかるとともに，実測精度の向上ならびに図面作成方法の確立のために，写真測量の技術を導入して建造物の実測を試みた。実施に当っては，SMK40およびSMK120のステレオカメラで写真撮影を行ない，図化はステレオメトログラフ，測定点の読取りはステレオコンパレーターで行なった。

写真測量の対象としてとりあげた建造物は興福寺北円堂・東大寺鐘楼・東寺南大門・薬師寺金堂等である。前三者については，すでに写真測量を2次にわたって実施していたので，今回さらに写真測量をおこなって変形による上下動・平面移動を測定した。これら建造物はすべてわずかながら沈下していることが共通して認められる。これらの原因は修理施工時の飼物のつぶれ，材料の経年的ねじれなどによるものらしく，今後継続的な写真測量による変形の実体を追跡することにより，構造的要因を明らかにすることができよう。とくに古材と新補材との関係がどの程度作用してこの要因となっているかに関心がもたれる。薬師寺金堂については今回はじめての実測であり，設計図との変形比較を行なった結果は，上層の方が下層に比べきわめてわずかながら変形がはじまりつつあるように認められ，今後の追跡が期待される。また解体修理前のものとして酒見寺多宝塔（兵庫県）の写真測量を行ない1/20の立面図を作製した。

酒見寺多宝塔の撮影

この他，軒先変形について実物大模型を作りこれに載荷して屋根荷重による垂木の変形破損の過程をみきわめるべく実験中である。垂木は2本を1組にした10種の木材をもちい，材種の違いによる変形差をも測定している。なお，本研究は昭和51年度科学研究費補助金（特定研究）によるものである。（鈴木嘉吉）

# 平城宮跡と平城京跡の調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では，1976年度に第1表に示した第97次から第101次までの32件に及ぶ調査を行なった。宮内では，まず，推定第1次朝堂院地区を対象とする調査を行ない(第97次)，東院地区については東南隅で1968年度（第44次）に一部を検出した庭園の北側部分の調査を実施した（第99次)。また，宮西北隅に近い佐紀池の調査（第101次）では園池の存在を確認した。平城京内では，奈良市第13中学校建設予定地における右京五条四坊三坪の調査（100次)，東大寺西面大垣，薬師寺西塔跡，西大寺本坊，法華寺金堂・経楼推定地，法隆寺本坊などで調査を行ない，見るべき成果をあげた。以下，主な調査の概要を報告する。

| 調査地区 | 遺跡・調査次数 | 調査期間 | 面積 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 6ABS−A.B・6ABF−B | 平城宮　第97次 | 76. 4. 1〜 7.24 | 32.50a | 推定第1次朝堂院 |
| 6ACO−C | 平城宮　第98−3次 | 76. 5.17〜 5.18 | 0.14a | 西北部（佐紀池） |
| 6ADB−M | 平城宮　第98−5次 | 76. 6.28 | 0.05a | 馬寮北方 |
| 6ABA−J | 平城宮　第98−8次 | 76. 8.30 | 0.04a | 北面大垣外 |
| 6ABA−L | 平城宮　第98−10次 | 76.11.16〜11.18 | 0.24a | 大膳職北方 |
| 6ABA−J | 平城宮　第98−15次 | 77. 2. 9〜 2.14 | 0.11a | 北面大垣外 |
| 6ADB−F | 平城宮　第98−19次 | 77. 2.15 | 0.17a | 西北官衙地区 |
| 6ALF−D.E.H.J.K | 平城宮　第99次 | 76. 7.26〜 8.11<br>10. 4〜77. 1.17 | 33.50a | 東院庭園 |
| 6ACA−W.S・6ACB | 平城宮　第101次 | 77. 1. 7〜 3.25 | 12.94a | 西北部（佐紀池） |
| 6AGR | 平城京　第98−1次 | 76. 4.12〜 4.21 | 2.00a | 右京京極、北辺坊 |
| 6AFC | 平城京　第98−2次 | 76. 5.11〜 5.13 | 0.07a | 左京一条二坊 |
| 6AGA | 平城京　第98−6次 | 76. 7. 1〜 7. 5 | 1.00a | 右京一条二坊二坪 |
| 6AGA | 平城京　第98−11次 | 76.12. 9〜12.15 | 0.28a | 右京二条一坊小路 |
| 6AGO | 平城京　第98−12次 | 76.10.19〜10.28 | 0.40a | 右京五条一坊三坪 |
| 6AGO | 平城京　第98−14次 | 77. 1.19〜 3.30 | 0.28a | 右京五条条間路 |
| 6AFC | 平城京　第98−20次 | 77. 2.22〜 2.24 | 0.86a | 左京一条二坊十坪 |
| 6BFK−H | 法華寺　第98−4次 | 76. 6.15 | 0.15a | 旧境内 |
| 6BFK−F | 法華寺　第98−7次 | 76. 8.12〜 8.19 | 0.90a | 旧境内 |
| 6BFK−O | 法華寺　第98−9次 | 76. 9. 2〜 9. 3 | 0.09a | 旧境内 |
| 6BFK−L | 法華寺　第98−17次 | 77. 2. 3〜 3. 1 | 1.22a | 旧境内 |
| 6BFK−O | 法華寺　第98−18次 | 77. 2.15 | 0.06a | 旧境内 |
| 6BFK−J | 法華寺　第98−21次 | 77. 2.28〜 3. 5 | 0.70a | 旧境内 |
| 6BTD | 東大寺 | 76. 4.21〜 6.23 | 3.35a | 西面大垣 |
| 6BTD | 東大寺　第98−13次 | 77. 1.10〜 1.19 | 0.58a | 旧境内 |
| 6BTD | 東大寺 | 76.12. 4〜12.15 | 2.50a | 旧境内 |
| 6BTD | 東大寺 | 77. 3.28〜 4. 4 | 0.60a | 旧境内 |
| 6BYS | 薬師寺 | 76. 7. 5〜 8.25 | 5.50a | 西塔 |
| 6BSD | 西大寺　第98−16次 | 77. 1.26〜 1.28 | 0.24a | 境内 |
| 6BHR−G | 法隆寺 | 76. 9.27〜12.11 | 6.64a | 境内 |

第1表　平城宮跡と平城京跡発掘状況

## 1. 平城宮跡の調査

**推定第1次朝堂院東北地区の調査**（97次）　今回の調査区域は第41次調査地の南に接し，東第一堂跡推定土壇の一部を含む。この地域の地形は推定第1次，第2次内裏がそれぞれ占地する二つの低丘陵の間を南北に延びる浅い谷筋にあたり，南へ向って緩やかに傾斜する。建物はこの谷を埋めたてて造営されている。

検出した主な遺構は建物5棟，掘立柱塀3条，築地塀1条，溝11条，井戸1基，土坑などである。これらの遺構は三層の整地土との関係からA・B・C・Dの4期に分けられる。

第1図　平城宮および平城京発掘位置図

A期　平城宮造営当初の整地以前の遺構で，4条の東西溝SD8372，8373，8380，8385と土坑SK8418がある。溝SD8372は幅1.2m，深さ0.3m程度の素掘りの溝で，宮を南北にほぼ二等分する位置にあり，第71次調査で検出した佐伯門東側，馬寮の南を限る東西溝の東延長上にある。SD8373はSD8372の南約10.5m（35尺）離れて平行する素掘りの溝である。土坑SK8418は浅いくぼみで，桧皮，木材加工時の削り屑を含む。

B期　第1整地層の上で，溝2条，掘立柱塀1条を検出した。南北溝SD3765は素掘りの溝で，幅2～3m，深さ約0.6mである。推定第1次朝堂院の想定中軸線から東103m（340尺）の位置にある。南北60mを確認したが，さらに南へ続く。溝底には厚さ約0.3mの堆積層があり，

第2図　第97次発掘遺構図

二層に分かれる。下層には奈良時代初頭の瓦，土器を含み，第2の整地土で埋められる。溝SD8376はSD3765に東から流れ込む。掘立柱塀SA8410はSD3765の東17.5mにある。11間分（10尺等間）を検出したが，さらに南北に延びる。

C期　第2整地層による整地が行なわれ，推定第1次朝堂院の東面が掘立柱塀SA5550Aにより区画される。その東に溝SD3715が設けられる。掘立柱塀SA5550AはB期の南北溝SD3765の約4m東にあり，推定第1次朝堂院の想定中軸線から東約107m（360尺）の位置にある。南北26間分（77m）を確認した。この上を第3整地層とD期の築地塀積土が覆う。

第3図　推定第1次朝堂院東第一堂発掘遺構

溝SD3715は塀SA5550Aの東17.5mにある素掘りの南北溝で，幅2～3m，深さ約1mある。奈良時代末まで存続し，少なくとも2回の改修がみられる。堆積層は3層に分かれる。下層からは多数の木簡が出土し，その実年代をつかむことができた。上層には多量の瓦，土器を含む。東西溝SD8419は南北溝SD3715に東から流れ込む素掘りの溝である。堰SX8411はSD3715に設けられた一辺4m程の溜りで，杭，板材とともに多数の木簡が出土した。

D期　第3整地層による整地が行なわれ，掘立柱塀が築地にかわり，基壇建物SB8400が築かれる。この地区が最も整備された時期である。

基壇建物SB8400は東西約19mあり，南北は20m分まで検出したが，さらに南へ延びる。基壇の掘込地業は全面を一様には掘り込まず，深い部分（0.5m）と浅い部分（0.3m）が帯状に複雑に認められる。掘込地業の底から整地層の上面までは粘質土を粗くつき固め，その上の基壇土はていねいに版築されている。基壇化粧は失なわれているため，建物規模の詳細は不明である。基壇西北にある土坑SK8398から円形の柱座の造出しのある花崗岩製礎石が出土したが，すでに原位置から移動している。基壇の東西の縁辺には，幅0.5mほどの浅い溝SD8401・8402がある。

築地SA5550Bは掘立柱塀SA5550Aの後身の塀である。第3整地層の上面に帯状に積まれた黄褐色粘質土があり，築地基底部の基壇積土と考えられる。上面は削平され，築地本体の位置，規模は確認できなかった。積土の西辺に沿って南北に延びる溝SD8392は築地の西側雨落溝である。塀SA5550Cは築地塀SA5550Bが再び掘立柱の塀に改作されたものである。柱間は10尺でSA5550Aと重複するが，柱心は約50cm東へずれる。

建物SB8370は5間×4間，南北両廂の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間約2.1m（7尺），梁間が身舎2.4m（8尺），廂2.7m（9尺）である。柱穴底に小さな礎板を敷く。柱穴掘形から出土した土器で奈良時代末に建てられたことが明らかになった。この建物の西妻はSB8400

の基壇の南北中軸線にそろい，棟通りは東西溝ＳＤ8372・8373の心にある。溝ＳＤ3715の東16ｍに掘立柱建物ＳＢ8405がある。東西２間，南北１間（８尺等間）分を検出した。これに重複するＳＢ8406は南北棟建物の南妻であろう。柱間は2.7ｍ（９尺）である。ＳＢ8405の東南７ｍに井戸ＳＥ8407がある。一辺2.7ｍの方形で深さ１ｍあり，底に礫を敷く。奈良時代中頃に造られ，奈良時代末に廃絶する。ほかに，調査地の東端で円筒埴輪列の一部を検出した。

遺物　土器，瓦，木器，木簡などがある。土器は主に南北溝ＳＤ3765・3715，井戸ＳＥ8407から出土しており，調査区全体としては量は少ない。ＳＥ8407の下層から平城宮Ⅲ（750年頃），上層から平城宮Ⅴ（780年頃）の土器がまとまって出土した。ほかに須恵器の蓋，杯を転用した硯，灰釉陶器，白磁，土錘などがある。木器の大半は溝ＳＤ3715から出土した。多くは棒状，板状品であるが，匙，篦状品，付札状品，箸，車輪部材，人形，形代などがある。

瓦には軒丸瓦196点，軒平瓦103点がある。このうち平城宮瓦編年のⅡ期（721～745年）の瓦6225，6311，6661，6685型式が多く，ついでⅠ期（708～721年）の瓦6284，6664Ｃ・Ｋ・Ｈ，6665型式や藤原宮式が多い。Ⅲ（745～756年），Ⅳ期（757～767年）の軒瓦は少ない。塀ＳＡ5550の西側では和銅創建時の軒瓦が多く，東側ではⅡ期のものが主体を占めている。溝ＳＤ3715では，その上層からⅠ期からⅣ期の瓦，中・下層ではⅠ，Ⅱ期のものが出土している。瓦敷ＳＸ8408から軒丸瓦6311型式がまとまって出土している。

木簡は南北溝ＳＤ3715，堰ＳＸ8411，これに注ぐ東西溝ＳＤ8419から総数163点出土した。主にＳＸ8411に多量の木片とともにその大半が包含されていた。記載内容は文書，帳簿，伝票，付札などで，神亀３年から天平３年までの紀年銘木簡が７点あり，この頃宮内で大規模な造営事業が行なわれたことが確認された。

まとめ　４期の遺構変遷において，Ａ・Ｂ期は和銅年間で，平城宮造営当初の時期にあたる。第１次内裏地区では周囲に築地回廊がめぐる。一方，第１次朝堂院地区を区画する施設としては掘立柱塀ＳＡ8410が考えられるが，一部を検出したにすぎず，なお今後検討する必要がある。Ｃ期は霊亀年間にあたり，東西を画する掘立柱塀と基幹水路が設けられるが，内側には建物は検出されていない。Ｄ期は神亀年間にあたり，この時期にはＣ期の塀が築地塀に改作され，中に基壇建物が築かれ，この地域が最も整備された時期である。

**東院庭園地区の調査**（第99次）　今回の調査は第44次調査で一部を検出した園池と東面大垣の北隣接地において行なった。この地区は北から延びる低丘陵が平地に移る付近の沖積面にある。地盤は砂地だが，地下水位は高い。調査地を庭園地区（Ｊ，Ｋ区）と東面大垣地区（Ｅ，Ｄ，Ｈ区）に分けて記述する。

庭園地区で検出した主な遺構は園池１カ所，建物４棟，渡廊１棟，橋１基，柱囲３条，溝４条，湧泉施設１基，土坑などである。これらの遺構は大きくＡ・Ｂの２期に区分でき，Ｂ期はさらに２期に分れる。

Ａ期　園池ＳＧ5800Ａとその西岸に建物ＳＢ8480，北岸に溝ＳＤ8456がある。ＳＧ5800Ａは

新池ＳＧ5800Ｂの下層から検出された。池は大垣に沿い，幅約13ｍの空間地をとって鍵の手に延び，複雑に屈曲した汀線をもつ。東，北岸の汀線を全て検出し，南北45ｍ，東西約46ｍのひろがりまで確認した。南岸は第44次調査地に延びる。南面大垣から北岸まで約72ｍある。入江，岬は上層池に比べ出入が少ない。東岸に岬２，入江３，西岸に入江５，岬２がある。池の深さ

第４図　第99次発掘遺構図

は平均40cm程度であり，池底に北岸では岸に沿って径30cm前後の扁平な安山岩を2～6m幅で帯状に敷く。この石敷は東岸では上層池の岬SX8452の下まで続く。西岸では岬SX8458の北側まで延び，この岬の周囲では失われている。この岬の南側の入江にも同様な石敷がある。池の中央には玉石を敷く。北西の岸辺では地山を急勾配に掘り込み，人頭大の石を積み，護岸石組とする。建物SB8480の周辺，東岸では緩やかな斜面に径10cm程の玉石を敷きつめる。南北溝SD8456はSG5800Aの東北隅に注ぐ石敷の溝である。幅60cm，底石のみ残り，側石は失われている。SG5800Aへの給水溝である。

建物SB8480は西岸にあり，掘込地業のみをとどめる。幅約2.5m，深さ1.5mの溝状の掘込みが東西12m，南北8.5mの矩形にめぐる。底に石を多数入れ，粘土と砂を版築状につき固めている。柱を据えつけた跡は残っていない。これをB期整地土が覆っている。B期の改修により，礎石建物の基壇が削平されたものであろう。

B期　当初，園池SG5800Bの周囲に礎石建物SB8470，柱囲SA8467・8468，橋SX8453が配され（$B_1$期），のちに柱囲は一部改修され，その東に建物SB8466，SC8465がとりつく（$B_2$期）。第44次調査で検出した八角楼SB5880などの遺構もB期に属する。

園池SG5800Bは下層池SG5800Aを全面的に造り替えている。下層池の石敷，石組の大半をとりはずし，粘土で埋め，その上に玉石を約10cmの厚さに敷きつめ，汀線まで玉石敷とする。池の深さは30cm程度である。池の概形は下層池を踏襲するが，岬や入江の出入は大きくなり，曲線的となる。北岸の築山SX8457は下層池の石敷に粘土，砂質土を交互に高さ60cm程度に盛り上げ，その上に玉石を置き，最大約1mの三笠安山岩，縞状片麻岩，花崗岩を据える。岬SX8452，半島SX8459，中島SX8460も同じ造成方法で築かれ，汀線に沿って大型石が配される。中島は南北9m，東西11mあり，北中央がくびれる。高さ0.5mある。池の東北隅は築地際まで拡張され，洲浜とされる。池は南北60mあり，東西もほぼ同規模と推定される。

礎石建物SB8470は5間×2間の東西棟建物で，柱間は桁行，梁間ともに10尺等間である。東妻柱と南，北側柱に安山岩の礎石5個が残る。棟通りに床束があり，東2間は池に張り出す。東妻に東西2間（7尺等間），南北2間の桟敷様施設SB8471がとりつく。

SA8467・8468はSB8470の前面を囲む掘立柱列である。柱根は八角形に面取りされ，凝灰岩の根巻石を伴う。SA8467はSB8470の南2.7m（9尺）にある。その南約9m（30尺）にSA8468があり，SA8467と柱筋がそろう。この柱列の東西両端では内側1.5mに4本の大型柱が立つ。柱は太さ42cm，八角形である。柱穴掘形は深さ約1mあり，底に根太を置き，柱に角材を差し込み，支えとする。池中の掘形には礎石を据えている。$B_2$期にはこの柱を除き，西に1.5m隔てて，南北柱列SA8469がとりつく。SA8469は柱間が4間で，両端間1.5m（5尺），中央2間が約3m（10尺）である。さらに，SA8467・8468の東側に建物SB8466，渡廊SC8465がとりつく。大型柱の柱根はSB8466の礎板に転用される。建物SB8466は4間×3間の南北棟総柱建物で，池に張り出す桟敷様施設であろう。掘立柱で柱筋は柱列とそろう。

桁行柱間は端間1.5m（5尺），中央2間が3m（10尺），東側柱南端間は約2.4m（8尺）で，柱を渡廊SC8465と共用する。梁間は西1間が1.5m（5尺），他は2.4m（8尺）である。西隅柱2本と西2列目の柱5本を柱列と共用する。柱穴掘形には鬼瓦，凝灰岩切石を敷いている。他に2個の礎石がある。渡廊SC8465は掘立柱で3間×1間である。桁行柱間約3.6m（12尺），梁間2.4m（8尺）である。南側柱はSA8468，SB8466と柱筋がそろう。橋SX8453はSG5800Bの東北隅に南北にかかり，桁行5間（9尺等間），幅3.0m（10尺）である。南北溝SD8455は東面大垣の西約4mにあり，上層池東北隅に注ぐ素掘りの溝で，幅1.8m，深さ0.4mある。上層池の給水溝である。

遺物　SG5800Bの堆積土を中心に多量の土器，瓦，木器，木簡，金属器，植物遺体などが出土した。木簡は堆積土から10点出土した。瓦には軒丸瓦96点，軒平瓦100点がある。このうち平城宮瓦編年Ⅰ期（708～721年）のものは軒丸瓦5点である。Ⅱ期（721～745年）の軒瓦は最も多く，6225，6308，6663型式が主である。Ⅲ期（745～756年）のものはそれにつぐ。Ⅳ期（757～767）の瓦は極めて少ない。下層池SG5800Aからは Ⅱ期の瓦が出土する。上層池SG5800B石敷中にはⅡ，Ⅲ期，その堆積土にはⅣ期の瓦が含まれる。また，鬼瓦2点，緑釉瓦1点，水波文塼1点がある。土器は主にSG5800Bの堆積土から出土した。その大半が平城宮Ⅶ（825年頃）に属する。SG5800Aからは平城宮Ⅲ（750年頃）までの土器を出土した。上層池SG5800Bの堆積土とその上層からは香炉蓋，三足盤など緑釉，灰釉陶器30点が出土した。墨書土器は23点あり，「蔵人所」と記した土師器がある。木製品は挽物円盆，蓋，杓子，布巻棒，斎串などが238点ある。建築部材も多く，斗栱の模型がある。金属製品には鎌，釘，銅製留金具などがあり，ほかに和同開珎1点，神功開宝1点が出土した。

東面大垣地区の遺構には築地大垣1条，溝3条，塀2条，建物1棟などがある。築地大垣SA5900は東院東南隅から北138mまで確認した。築地の基底部をH区で一部検出した。幅約3m（10尺）である。溝SD5815はSA5900の東側雨落溝である。幅0.7m，深さ0.4m前後あり，H，D区では両側に瓦をたて並べている。暗渠SD8436は東面大垣南端から北108m（360尺）にある。築地部分では幅1.2m，深さ0.5mの掘形に厚さ10cm，幅24cm，長さ5m以上ある桧板を組み，凝灰岩切石を蓋石とする。この溝は築地雨落溝の東で開渠となり，東二坊坊間路西側溝SD5780に注ぐ。SD5780は素掘りの溝で，深さ0.4～0.6mある。少なくとも1回の改修が認められる。暗渠が注ぐ付近で有機物層が形成され，多数の木簡が出土した。天平15，18，19，20年の紀年銘のある木簡がある。有機物層を境に上下2層に区分できる。大垣と大溝の間は幅約7.5m（36尺）程の塀地となる。大垣には改作は認められず，奈良時代の前半に造営され，奈良時代を通じて存続する。奈良時代以後，大溝，雨落溝が埋められ，仮設的な建物SB8433，塀SA8440などが設けられる。

遺物　主にSD5780から，土器，瓦，木器，木簡などが出土した。木簡は569点あり，紀年銘木簡7点を含む。「東薗」としるしたものがあり，園池地区を東薗に比定しうるかもしれな

い。土器はＳＤ5780から平城宮Ⅱ（725年頃）のものが出土し，壕地の整地土から緑釉，灰釉陶器が少量出土した。また「酒坏」としるした墨書土器がある。瓦は軒平瓦69，軒丸瓦92点ある。主体はⅡ期の瓦がこれにつぐ。Ⅳ期以後の瓦は少ない。木製品には槽，曲物，糸巻，人形など多様な製品がある。

まとめ　東院東南部の築地はすでに奈良時代前半に造営されており，奈良時代末まで存続する。築地の改修は認められなかった。築地の内側には南北60ｍ，東西約60ｍの範囲に園池がひろがる。Ａ期は天平末年以前で，養老５年頃まで遡りうる。Ｂ期は天平勝宝年間に始まり，池が廃絶するのは９世紀前半である。Ａ期園池の岸辺に沿って扁平な石を敷きつめる技法は，奈良時代前半に造られた左京三条二坊六坪（第96次）の北宮園池と類似するが，池中央部を玉石敷とし，護岸に石を積みあげる方法などに相違がみられる。Ｂ期の園池は玉石敷で旧池と全く趣を異にし，平安時代庭園に通じた造園方法がうかがえる。

**平城宮西北地区（佐紀池）の調査**（第101次）　佐紀池は平城宮の西北にある東西160ｍ，南北150ｍの不整形の溜池で明治17年に現在の一条通りに築堤して造られた比較的新しい池である。池の南⅔は特別史跡平城宮跡の一部として史跡指定と国有化がなされている。一方，北⅓はなお民有地であり，今回の調査はこの部分を対象とした。池の北端部に幅15ｍ，東西67ｍのトレンチと，これの東南約30ｍの地点に幅６ｍ，南北26ｍのトレンチとを設けた。

奈良時代の遺構　園池１カ所，溝２条がある。園池ＳＧ8500は西岸と東岸の一部を検出した。東岸の汀線は東西トレンチでは南北に，南北トレンチでは東西に延び，北端部で西へ狭まる。西岸は真南北に延びる。岸は傾斜約10°の緩やかな斜面で，拳大の石を幅２ｍ程に敷く。東岸には大小の自然石が配されていたらしい。池底は南へ緩やかに下る。池には厚さ約0.5ｍの植物腐蝕層があり，奈良時代から平安時代初期の遺物が出土した。溝ＳＤ8501は東西トレンチ中央の素掘りの南北溝で，ＳＤ8502は南北トレンチ中央の素掘りの東西溝である。

奈良時代以前の遺構　溝４条，堰２基，土坑１がある。すべて園池ＳＧ8500の底面で検出した。溝ＳＤ8520は東西トレンチ中央を南北に蛇行して流れる幅約３ｍ，深さ0.6ｍの溝で，途中で２つに分流したのち，また合流する。この溝の分流の始点に幅10～15㎝，厚さ５㎝の矢板を一列に打ち込んだ堰ＳＸ8524がある。溝ＳＤ8521は幅1.5ｍ，深さ0.5ｍのＶ字溝で西南からＳＤ8520に注ぐ。この合流点に，太さ６㎝の丸太杭を一列に打ち込んだ堰ＳＸ8523が設けられる。

遺物　園池ＳＧ8500の堆積層から土器，瓦，木器，金属器が出土した。土器は平城宮Ⅱから９世紀中頃までのものを含む。土師器の皿で，底部外面中央に「天平十八年潤九月廿七日□□□」とあり，内面に以下のように墨書したものがある。

（上段）二辛□〈□〉カ

（中段）土高佐良一　饗都支十口　□都支二□　鋺形冊　毛比冊　佐良八　高佐良九

（下段）匏五柄　片真利廾　毛比冊　佐良冊　□

辛櫃に納めた容器の品目，数量を記したものであろう。瓦には6225，6282型式などの軒丸瓦９点,6663型式などの軒平瓦４点がある。習書と文様風の木簡が２点ある。 木製品は下駄，甑底板，曲物底板，刳物，斎串など14点ある。ほかに，神功開宝１点，鉄鎌１点が出土した。

溝ＳＤ8520から後期弥生式土器，庄内式，布留式の土師器，木器，金属器が出土した。土器のほとんどが布留式であり，後期弥生式土器，庄内式土師器は少量である。木器には鋤，きぬた，ちきり，梯子があり，金属製品には小型素文鏡が１面ある。径2.8㎝，厚さ0.5㎜で，鏡背に鈕をもつ。なお，東西トレンチで土層観察のためにＳＧ8500の池底を一部掘り下げた際，池底より下のバラス層から縄文時代中期の土器片が12点出土した。

まとめ　佐紀池の北端部が奈良時代の園池であったことが明らかとなった。この地域は奈良山丘陵の谷筋にあたり，自然地形を利用した園池である。規模と形は現在の佐紀池とさほど大きな差異はなかったものと推定される。造成の時期は推定第１次内裏地域に築地回廊が設けら

第５図　第101次発掘遺構図

れる和銅造営当初，遅くとも神亀年間に遡る可能性があり，続日本紀天平十八年「秋七月癸酉，天皇御大蔵省覧相撲，晩頭転御西池宮」の記事にある「西池宮」に関連する可能性が強い。

## 2．平城京の調査

**右京五条四坊三坪の調査**（第100次）　本調査は奈良市の仮称第十三中学校建設計画に伴う事前調査であり，奈良市から調査を委託されて実施した。当該地は右京五条四坊三坪の全域を包含しており，谷筋をはさんで北東部と南西部が丘陵上となり，標高は約80mで五条一坊付近の平地部より20mほど高い。従来，右京における本格的調査は行なわれておらず，特に条坊遺構に関しては西隆寺・唐招提寺などで一部検出されたにとどまっていた。したがって調査は丘陵地域における京の造成状況，特に条坊遺構の解明を主な目的とし，坪の周囲に9本，坪内に4本のトレンチを設けて実施した。発掘成果はすでに「右京五条四坊三坪発掘調査概報」（奈良市1977年3月）として公表されている。

遺構　西三坊大路，五条条間路，六坪と三坪の間の小路に関しては予想位置で道路の側溝と思われる溝を検出したが，三坪と四坪の間の小路は検出できなかった。西三坊大路に関してはI・J両トレンチで南北溝SD001・002を検出した。溝の心々距離は70尺を越えるが，方位の振れの少ないSD001の溝心から30尺（推定大路幅の½）西を大路心と仮定すると，朱雀大路心からの距離（朱雀大路調査で明らかとなった平城京造営方位N0°15′41″Wによる換算値）は1601.93mとなり奈良尺1800尺の基本方眼地割とほぼ一致する。五条条間路に関しては，Hトレンチで東西溝SD006・007を検出した。心々距離は約20尺で従来の条間・坊間路の幅員に関する知見4～8丈に比べて狭いこと，基本方眼地割線より12.7尺北にずれていることなどの問題を残しており，Kトレンチではすでに削平されたのか側溝に相当する遺構は検出されていないことと合わせて，なお今後の検討が必要である。六坪・三坪間の南北小路に関してはFトレンチで南北溝SD004を検出した。溝SD004には西方から暗渠SX041が流れ込んでいること，溝の西側に近接して塀SA042が存在することから，この溝は小路の西側溝とみられる。溝

第6図　第100次発掘遺構図

心から前述の西三坊大路心までの距離は135.97mで，坪計画寸法450尺と小路幅の½の長さ10尺を合わせた460尺に近似した値を示す。

奈良時代の建物はGトレンチで2棟，Lトレンチで3棟，Mトレンチで1棟，ほかに塀5条を検出した。建物はいずれも小規模な掘立柱建物で瓦の出土は極めて少ない。年代を直接示す遺物の出土はないが，柱掘形の重複関係や方位の振れによってA・Bの2時期に分けられる。A期は平城京造営方位にそったもので，SB025・027・035，SA028・029がある。前述の南北小路の道路幅を20尺と仮定すると，この建物3棟は道路心よりそれぞれ50尺・150尺・200尺の位置に東側柱をそろえて建てられている。B期は京の造営方位より北で0.5～2°西へ振れており，SB017・026・034，SA018がある。なお，宅地として最適地とみられる東北部の高台からは1棟の建物を検出したにすぎないが，遺構面が地表から0.2～0.3mと浅く後世に削平されている可能性が強い。このことは遺物が高台の西斜面から二次堆積で多量に出土していることからも裏付けられよう。

高台のMトレンチと谷頭のLトレンチでそれぞれ井戸SE015・020を検出した。SE015は，長さ90cm，厚さ5cmの板枠からなる一辺80cmの井籠組の井戸で，上から6段目まで確認したが，さらに続くとみられる。井戸の周囲は，四段に階段掘りしてあり（SX016），最下段は構築後すぐに埋戻して洗い場として利用したとみられる。井戸は構築後比較的早い段階に崩壊し，8世紀前半には廃絶したものと思われる。SE020は径1.1mの円形縦板組の井戸である。板枠は幅28cm，厚さ6cmの細長い板材14枚から成り，板枠が折れて井戸内に落ち込んでいたものと合わせると，長さ4.5mに復原できる。板枠の左右には上下4箇所に枘穴を設けて固定している。また，上端の木口にも枘穴を設けているものもあり，側板上部を横材で固定していたものと思われる。SX021は，SE020の上段の掘形内にあり，井戸枠の西側に広い平坦面をとり，西に向かう溝がとりついていた。井戸に付属する洗場とその排水溝とみられる。SE020・SX021から出土した土器より井戸の廃絶時期は8世紀中頃と考えられる。建物の周辺から出土した土器は平城宮Ⅰ期（710年頃）からⅢ期（750年頃）のものであり，井戸の廃絶年代と合わせ考えると，この地域は8世紀後半にはすでに宅地としての機能を失っていたものと思われる。

東北部の高台と西北部の谷頭との境には階段状遺構SX024があり，前述の条坊遺構から求めた坪の東西心と一致する。また，坪の南北心は東北部の高台から南の谷への傾斜する位置にのっている。したがって，三坪がどのように宅地割されていたかは明らかでないが，少なくとも坪の東西心・南北心には境界があったとみられ，¼町以下の宅地が想定される。

そのほか，SB025の南に接して火葬墓SX030を検出した。一辺0.4m，深さ0.5mの墓坑の底に蔵骨器が直接納置されていた。墓坑に接して安山岩質の割石があり，墓坑上面を覆っていたものとみられる。蔵骨器は薬壺形の須恵器で平城宮第Ⅲ期（750年頃）に該当するが，蓋は別物でやや遡る。器内には微小な骨片と絹織物を含む沈澱物と，墨・筆管・和同開珎が入ってい

た。京内に於ける奈良時代の火葬墓としては初めての例であり，京内での埋葬を禁じた養老喪葬令の規定との関連が問題である。

遺物　土師器，須恵器，瓦塼類，木製品のほかに，火葬墓の副葬品がある。これらは奈良時代前半期のものが多くを占めており，主に土坑ＳＫ013，溝ＳＤ014，井戸ＳＥ020，土坑ＳＫ052，階段状遺構ＳＸ024から出土した。瓦塼類は軒丸瓦４点，軒平瓦１点，塼２点と極めて少ない。ＳＥ015・020の井戸底からは曲物８点，刀子柄１点が出土した。火葬墓の副葬品としては，墨，筆管，和同開珎４枚がある。墨はカラスミ形をしており，正倉院伝世品と同形であるがやや小さい。筆管は篠竹製とみられ，一方の端部の内側を刳って内径を広げており，これは筆毛を取り付けるための加工とみられる。

第７図　第100次出土蔵骨器と納置物

**法華寺経楼推定地の調査**（第98―17次）　本調査は法華寺境内での収蔵庫建設計画に伴う事前調査である。現本堂および鐘楼は，従来の発掘調査の結果から旧位置に再建されたものとみられており，当該地は本堂中軸線に対して鐘楼と対称位置にあることから経楼の遺構の検出が期待された。

調査の結果，掘立柱建物３，溝３，土坑２，井戸１を検出した。経楼推定地は後世の削平を受けており，経楼の遺構は確認できなかった。経楼北面雨落溝推定位置で検出した野面石組の東西溝ＳＤ03も後述するように，その北方の建物ＳＢ01Ｂと一連のものと考えられる。

ＳＤ03以南の経楼推定地では掘立柱建物ＳＢ05や中世以降の南北溝ＳＤ12，近世の井戸ＳＥ09などを検出した。掘立柱建物ＳＢ05は柱間約３ｍで東西２間・南北１間分を確認した。

ＳＤ03以北では３棟の建物ＳＢ01Ａ・ＢおよびＳＢ02を検出した。ＳＢ01Ａは１辺１ｍ以上の大きな掘形をもつ掘立柱建物で東西２間（柱間約３ｍ）・南北１間（柱間約2.7ｍ）分を確認した。遺存していた柱根は直径60～70㎝と太いもので，面取りされた痕跡が認められる。柱根下には根固めとして瓦片が詰められており，軒丸瓦6285Ａ・軒平瓦6667Ａが出土した。これらの瓦は天平初年を降るものがなく，ＳＢ01Ａは８世紀前半に造営されたと推定できる。ＳＢ01ＢはＳＢ01Ａの柱を根本で切断した上に根石を置いて，礎石立ち建物に改造している。平面は旧規を守っている。このような例は従来の法華寺境内の発掘調査でも，現本堂地下・本

第８図　法華寺経楼推定地発掘遺構図

堂南・本堂東で3棟が確認されている。東西溝SB03は南岸を野面石で護岸しているのに対して，北側では幅0.4mほどが一段低くなり，ここに多量の瓦片をつめ込んでいる。これは北岸施設の裏込めとみられ，この上に基壇の延石と考えられる数個の石がある。裏込めからは8世紀後半の土器が出土しており，年代的にもSD03はSB01Bと一連のものとみられ，SB01Bの南面雨落溝と考えられる。掘立柱建物SB02は東西2間（柱間約3m），南北1間分を確認したがSB01A・Bとの前後関係は明らかでない。

遺物としては土器類と瓦類がある。土器類の多くは土坑SK08から出土しており，多量の土師器・須恵器のほかに施釉陶器片約150点がある。瓦は古代から近世にわたり，軒丸瓦56点，軒平瓦52点，緑釉瓦一点，二彩釉瓦片1点が出土している。

第9図　法華寺金堂推定地発掘遺構図

調査の結果，当初の予想位置には経楼跡がみられず，かえって経楼推定位置に一部かかって奈良時代後半の礎石立ち建物を確認した。今後，法華寺の伽藍配置の再検討が必要となった。

**法華寺金堂推定地の調査**（第98—21次）　本調査は納屋新築に伴う事前調査である。当該地は法華寺の南北中軸線にあり，東南に隣接する地区では1974年の調査で金堂と推定される建物の南側柱を検出している。今回の調査地では推定金堂の南側柱西延長部分と入側柱の検出が予想された。調査の結果，建物2棟，中世の井戸状遺構等を検出した。推定金堂SB01は南側柱を2間（柱間14尺）分を確認したが，入側柱の痕跡は見出せなかった。しかし，現本堂地下および本堂東の地下遺構が掘立柱と礎石立ちの柱を混用しているので，この建物も入側柱は礎石を用いていたために削平されて痕跡を留めなかったものと考えられる。SB02は東西3間（10尺等間），南北1間（12尺）分を検出した。南側柱はSB01と重複し，これより新しい。東西棟建物の南廂部分と推定される。そのほか中世の井戸状遺構および小柱穴8個を検出した。井戸状遺構からは鎌倉時代の瓦片が多量に出土した。

**東大寺西面大垣跡の調査**　本調査は奈良県労働者住宅生活協同組合の分譲住宅建設計画に伴う事前調査であり，奈良県教育委員会に協力して発掘を行なった。発掘成果は『東大寺西面大垣跡発掘調査概報』（奈良県教育委員会 1977年1月）としてすでに公表されている。当該地は東大寺の転害門と焼門（西面中門）のほぼ中間にあたり，平城京東京極大路東半部および東大寺西面大垣の遺構の存在が予想された。検出した遺構は古代から現代まで6期に大別でき，上記の予想を裏付けるとともに，中世以降の宅地割の変遷が明らかになった。以下時期別に述べる。

Ⅰ期（奈良・平安時代）　平城京東京極大路ＳＦ100，その東側溝ＳＤ90，東大寺西面大垣ＳＡ05，その雨落溝ＳＤ09・10がある。東京極大路ＳＦ100は，旧河川の堆積土上に，バラス混り暗褐色土を盛って造成している。路面からは奈良時代の瓦が出土し，その上層から東大寺式軒丸瓦6235，興福寺式軒丸瓦6301等が出土した。大路の東端に側溝ＳＤ90がある。ＳＤ90は西肩のみを検出し，東肩は中世の溝で壊されているので幅は不明である。中から奈良時代から平安時代初頭にかけての瓦が出土している。

東大寺西面大垣については，転害門と焼門とを結ぶ線上で，築地ＳＡ05を検出した。旧河川のバラス層の上に厚く積土した後に，幅約４ｍの掘込地業を行ない盛土しているが版築はみられない。この盛土中に古代の瓦を含んでいる。築地は基底部しか遺存しておらず，築地本体の幅は不明である。築地をはさんで東西に雨落溝ＳＤ09・10があり，溝の心々距離は6.2ｍであった。築地心から大路東側溝西肩までは14.3ｍである。なお，大路・築地とも平安時代における改造の跡はみられない。

Ⅱ期（中世）　東京極大路の上層には，東西石組溝ＳＤ11，南北石組溝ＳＤ17，ＳＤ11に流れ込む暗渠ＳＸ83などが設けられ，大路東側一帯が次第に宅地化していった。東大寺西面大垣ＳＡ05はその北部を積み替えるとともに，築地の西側雨落溝ＳＤ10を改修している（ＳＤ10―Ｃ）。ＳＤ10―Ｃからは中世の瓦・五輪塔の台座等が出土した。ＳＤ09の東側で素掘りの南北溝ＳＤ16を検出した。瓦器や梵字のある軒平瓦が出土している。

Ⅲ期（近世）　京街道と西面大垣との中間に設けられた南北石組溝ＳＤ20と，ＳＤ10―Ｃを改修したＳＤ10―ｂを検出した。ＳＤ10―ｂとＳＤ20のそれぞれの中に打ち込まれた南北柵ＳＡ06・07も溝と同時期とみられる。ＳＤ10―Ｃの心より西11.1ｍの地点に石組井戸ＳＥ22があり，ＳＤ20の心より西11.1ｍの地点にも石組井戸ＳＥ21がある。京街道と西面大垣の間は南北溝ＳＤ20を境として東西二つに宅地割されたとみられる。東西の宅地内において井戸が同位置

第10図　東大寺西面大垣発掘遺構図

にあるとすれば，西方の宅地の西境は現在の京街道東歩道の東端あたりと推測される。

Ⅳ期（近世）　ＳＤ20，ＳＥ21・22は廃棄されて，Ⅲ期の東西の宅地は一つになり，宅地東限のＳＤ10は再び改修されている（ＳＤ10－ａ）。さらに，この宅地の東端に石組の井戸ＳＥ25と，井戸から竹筒を用いて水を西方に引く上水施設ＳＸ56～64を設けている。この上水施設はＳＸ57→ＳＸ58→ＳＸ63と三度作り替えている。この時期には多量の木炭・鉄滓をはじめ，鞴の羽口などが出土しているので，近くに鍛冶屋の存在が考えられる。この時期の遺構は火災にあっており，西面大垣も崩壊してしまった。この火災は「東大寺諸伽藍略録」にみえる慶長11年（1606）の今小路町を含む手貝町南方の大火に相当するものと考えられる。

Ⅴ期（近世）　東西に長い宅地が，石組列ＳＸ75や東西方向の杭列ＳＡ08によって南北にも細分化してくる。ＳＸ75は北に面をそろえており，崩壊後の西面大垣を横切って設けられている。その北に井戸ＳＥ23をつくる。ＳＸ75とＳＡ08に挟まれた南北幅９ｍの地域内には礎石立ち建物３棟ＳＢ01・02・03が建つ。礎石建物はいずれも南側柱のみを確認したにすぎないが，北側柱がＳＸ75の延長線以南におさまるとするなら，梁行は２間と推定される。礎石建物の周囲には座棺ＳＸ50，火葬骨壺ＳＸ52，55があり，五輪塔の一部や仏花器，多量の灯明皿なども出土していることからみて，この地域の遺構は東大寺の子院など寺の関連施設と考えられる。

**薬師寺西塔跡の調査**　本調査は薬師寺からの依頼により，西塔創建時の遺構を明らかにする目的で行なったものである。西塔の創建は，東塔の建てられた天平２年（730）頃とみられており（『七大寺年表』），享禄元年（1528）には筒井順興の乱によって金堂・講堂とともに焼失した（『薬師寺年記』）。その後，万治三年（1660）に食堂の西北方にあった文殊堂が西塔跡に移築され（『薬師寺縁起国史』『薬師寺志』），昭和９年に撤去された。現基壇上面には心礎のほかに，文殊堂で用いられていた礎石が12個残っており，東北と東南の隅の２個の礎石には一辺60～70㎝の方形柱座があり，西塔の礎石と考えられている。これまでの調査としては，昭和９年に足立康氏によって基壇上面の簡単な調査が行なわれ，昭和44年には薬師寺発掘調査団（団長杉山信三氏）が西面階段部分の遺構を明らかにしている。

遺構　心礎が原位置を保っていること，方形柱座をもつ２個の礎石は原位置を動き享禄焼失による焼土上に据えられていることを確認し，さらに四天柱と側柱の掘形をすべて検出した。裳階柱の掘形は発見しなかった。掘形が浅かったために削平されたものと思われる。心礎には掘形がなく，基壇築成の途中で据えられている。基壇化粧は花崗岩製地覆石と凝灰岩製羽目石とがわずかに遺存しており，基壇の一辺の長さは約13.6ｍと知られた。延石は用いず，地覆石上面に約１㎝の段を設けて羽目石を受け，見え懸かり部分を切石とする一方，隠れる部分には自然面を残している。階段は四方に設けられ，耳石を受ける枘穴の施された受石が東・西・南の階段に遺存しており，階段の規模は幅約３ｍ，基壇からの出約1.8ｍであることが知られた。この受石には枘穴の仕口に差異がみられることや西南隅地覆石の西面にだけ見付幅２㎝ほどの切面が施されていることなどから，基壇化粧石には創建当初から転用石材を混用していたもの

第11図　薬師寺西塔跡発掘遺構図

と思われる。

基壇回りには玉石を敷き詰めた幅0.5～0.6mの犬走りがめぐる。その外周に扁平な石を立てて側石とする内法幅0.5m㎝，深さ5㎝ほどの雨落溝がある。雨落溝は階段部分も凸型にめぐり，底には玉石を敷いている。同様の玉石敷は溝の外にも一面に広がっており，基壇縁から3.5mほどのところには一列に立石を並べて，塔を中心とする一辺20.6mほどの正方形の区画を構成している。なお，南面は後世の池によって破壊されており，この見切石は確認できなかった。玉石敷はこの正方形の区画の外方へさらに拡がっており，範囲確認のため北方へトレンチを拡張したが，玉石敷はなお発掘区外へ続くとみられ，回廊内全域が玉石敷であった可能性

も考えられる。なお，玉石敷の上には灰黄褐砂質土が堆積し，その上に焼土層がのっており，享禄焼失時にはすでに石敷面は埋もれていたとみられる。

基壇の復原高は1.4mで，その築成は次のような過程を経ている。掘込地業は行なわれず，旧地表面に直接積みあげている。まず，基壇の範囲全域に0.4～0.5mの厚さで暗灰黄褐粘土とバラス土を互層につきかためる。次いで，心礎を中心とする半径2.5mほどの範囲のみに入念に版築を行ない，その回りに灰黄色粘土を積みあげる。同時に基壇回りでは玉石を敷くために灰色粘土で整地している。次に，根石を置いて心礎を据えつける。その後，基壇上面まで褐色砂と粘土を互層につき固め，心柱以外の柱の掘形を設け，礎石を据える。最後に，階段部分に黄褐色土を積み，基壇化粧を行なう。

そのほかに，発掘区南端でやや時代の降るとみられる池の汀線を確認し，また，発掘区東辺と基壇南辺に沿って石敷および基壇を崩して設けられた竹筒の上水施設を検出した。

遺物　基壇上面の焼土層からは焼け崩れた塑像片や壁土が，基壇回りの焼土層からは大量の瓦が出土している。塑像片は，長和4年（1015）の『薬師寺縁起』に東西両塔に各々釈迦の四相の群像を置くと記されていることに相応すると考えられる。塑像片には頭部・手・胴部・足・袈裟・甲などがあり，なかには如来像・菩薩像と判定し得るものもある。また，彩色や金箔が残っているものもある。胎土には雲母の多い緻密な粘土を用いている。このほか塑像の胎土とは異なり，砂粒を多く含んだ破片があり，直線や曲線の凹凸に富む文様が施され，白色に彩色されている。これらは塑像の背景となった山岳や巌洞・台座などの一部とみられる。出土した軒瓦は約800点に達した。軒丸瓦は鎌倉・室町時代の巴文が多く，本薬師寺式や奈良時代の瓦は一割にも満たず，享禄焼失時にはすでに創建時の瓦はほとんど葺き替えられていたことが判明した。焼土層からは以上のほかに，棰先飾り金具，厚板，塑像芯銅線，鋲，帯状留め金具などの青銅製品や，釘，鎹，座金などの鉄製品，和同開珎などの銭貨，および少量の須恵器片が出土している。青銅厚板には「第二□」と陰刻したものがあり，相輪の一部かとも考えられる。

**法隆寺本坊西方地域の調査**　本調査は法隆寺寺務所の建設計画に伴う事前調査であり，既存建物の解体に対応して二次にわけて調査を行なった。第一次調査では遺構は検出されず，古代から中世にわたる瓦および土器片を包含した暗灰色粘質土層の上面に，水流によるものと思われる粗砂が堆積していた。第二次調査では，黄色粘土の地山から，中世の土師器片を含む小穴群と近世以降の溝4条および池の一部を検出した。池は長径約3mの小規模なものであるが，岸には人頭大の石がいくつか残っており，底には小石を敷いている。　（須藤隆・清水真一）

第12図　薬師寺西塔跡出土塑像

# 1976年度発見の平城宮木簡

平城宮跡発掘調査部

1976年度の平城宮跡発掘調査では総計744点の木簡が出土した。以下その概要を報告する。なお主なものは『平城宮発掘調査出土木簡概報(11)』（1977年5月刊）に収録している（口絵参照）。

**推定第1次朝堂院地区出土木簡**（第97次調査）

当地区では，第1次朝堂院東方の宮内基幹排水路である南北溝ＳＤ3715と，これに設けられた堰状遺構ＳＸ8411，およびＳＤ3715に東方から流入する東西溝ＳＤ8419から計163点の木簡が出土した。ＳＤ3715は二度の改修を受けており，木簡は下層溝の上・中層から出土した（20点）。ＳＸ8411では堰の北側と南側の堆積層から出土している（138点）。溝・堰とも木簡を含む堆積層は同一層位であり，出土木簡も同時期のものである。ＳＤ8419からは5点の木簡が出土しているが，出土層位がＳＤ3715のどの層位に対応するか未確認である。

これらの木簡の年紀は神亀3年から天平3年にわたっており，内容は宮内建物の建設に関するものが多いという特徴を示している。以下代表的な木簡について報告する。

「□里工作高殿料短枚桁二枝　□」

高殿に関する木簡は，他に「西高殿四人□」，「□東高殿(卅カ)□□□□□」等が出土している。第1次・第2次大極殿朝堂院地区には高殿に比定しうる楼風建造物が存在する。里工は官の工人に対する語であろう。他に習書で「雇工」と記したものがある。これらの木簡により新たな殿舎名が知られ，その建設が行なわれたことが判明する。これまで第2次内裏北外郭地区の土坑（ＳＫ2102）出土の木簡から神亀5年～天平元年頃にこの地区で造営が行なわれたことが考えられていたが，今回の木簡は更にこの時期の造営に関し新資料を加えたことになる。

（表）「右二人丸桁二枝継目口引坐田部大嶋宗小斗四材等□(口カ)引(坐カ)□」

（裏）「□引坐又丸桁一枝端鋳」

継目口引坐がどのようなものか未詳であるが，斗や丸桁がみえるので，この木簡も建築部材の製作に関するものであろう。鋳（タヅキ）は斧の一種である。同筆で同内容の木簡が他に3点ある。また柱の作製に関するもの3点や，「榑廿送」とあるものなど木工作関係のものが多い。

（表）「進上瓦三百七十枚　女瓦百六十枚　鐙瓦七十二枚　宇瓦百卅八枚　功卌七人　十六人各十枚　九人各八枚　廿三人各六枚」

（裏）「付葦屋石敷　神亀六年四月十日穴太□　主典下道朝臣向司家」

作瓦所からの瓦の搬入に関する木簡である。1人当り女瓦では10枚，宇瓦では6枚，鐙瓦では8枚運搬しているが，『延喜式』（木工寮）の瓦の人担数の規定では各12枚，7枚，9枚であり，枚数が近似する。作瓦担当官とおぼしき主典下道朝臣某は「向司家」となっているが，この司家は令制の司ならば四等官は「令史」であるからあるいは令外の官司とも考えられる。今

のところ司名は不詳である。 瓦についての木簡は他に「進上女□(瓦カ)」，「□(宇カ)瓦卌枚□車一□(両カ)」などがあり，いずれも瓦運搬に関する内容である。

宮内の営作を行なう官司は造宮省と木工寮が考えられるが，いずれの場合も木簡はその現場事務所的な場所で使用されたとみられる。また『延喜式』(弾正台) 中に「在二中院西一木工寮木屋材瓦」とあり，平安宮では宮城中央にある中院 (中和院) の西に木工寮の木屋が存在していた。『西宮記』(所々事) ではこれを「木工内候所」とする。今回発見の木簡中に削片だが「申木屋司御前」と記したものがあり，この木屋司もあるいは木工寮の木屋と関連があるかもしれない。

**東院園池・東面大垣地区出土木簡** (第99次調査)

宮内の園池地区では新池 (ＳＧ5800Ｂ) 底の堆積土中から10点の木簡が出土した。年紀のあるものはないが「蔵人□(所カ)」と記した墨書土器が伴出しているので，平安時代９世紀に入るものであろう。このうち「宗麻呂方『一丈』」，「貞雄方『一丈』」，「忠安方 『二丈』」の３点は同筆・同形態である。用途は判然としないが，布類の付札であろうか。

東面大垣 (ＳＡ5900) 地区では， Ｅ地区で外濠 (ＳＤ5780) から３点， Ｄ地区では大垣東雨落溝 (ＳＤ5815) から１点， 外濠から14点， 北のＨ地区では築地下の暗渠から外濠に流下する東西溝 (ＳＤ8436) から１点，外濠から550点出土した。 Ｈ地区の外濠では大部分の木簡は南端部に堆積していたが，北半部の木簡も内容的に共通し，一括しうるものである。以下質量ともに豊富なＨ地区の木簡を中心にのべることにする。

まず，木簡の年紀は天平末年の６年間に限られ，天平15年１点，同18年１点，同19年４点，同20年１点である。また貢進付札は11点と少ないことも特色である。文書様木簡では食品名を記したものや，次のような食品の請求・支給に関するものが顕著であり，この地区の木簡は食品の供給を行なっていた官司で使用されたものとみられる。

(表)「供養所食口 / □□□□ 糸井広庭　右漆人」(裏)「□□人□万呂　二月廿四日□□」

供養所の７人分の食料を請求したものであろう。供養所は，正倉院文書に造東大寺司内の一機構として散見するが，木簡記載のものがそれに当たるかどうか不明である。

(表)「鵤造花菀所請雇人三百六十八人食□米七石」

(裏)「『三斗六升 三石一斗四升二合』三月一日事受葛木梶嶋」

鵤造花菀所も未詳であるが，法隆寺の花菀造営に関するものであろうか。

「請糟五升東園器運衛士并舎人料 □□□連□(凡カ)」

東園に関しては，他にＤ地区の東雨落溝出土の木簡に「□(東カ)園進上」と記したもの，および平城宮西北部の馬寮推定地出土の嶋掃兵士関係木簡のうちに，(表)「□進兵士三人依東園□」，(裏)「□以移　天平十年閏七月十二□」としたものがある(木簡概報(8))。 東園が宮内の園池とすれば，今回発掘の庭園遺構などそれにふさわしいと言えようか。

この他に「造筥所」から酒糟を請求したものや，「春日所」なるところへ韮を支給した木簡がある。削片で単に「竪子所」，「刀子所」，「中宮」と記しただけのものがあるが，これもあるいは食品の支給先かもしれない。また（表）「大炊寮」，（裏）「十九年」の題籤があるが，これは同寮からこの官司が穀類を受けていたことを示していよう。断片・削片のため木簡の用途は知りえないが，他に食品名を記したものが多数あり，魚鳥類が多い。令制において諸官司への食品供給を任務としたのは大膳職であるから，これらの木簡は一応大膳職関係のものかと考えられるが，東院地区という場所からみて内廷の食品担当官司の可能性もある。

この官司内の機構をうかがえるものとして次の2点の木簡がある。

（表）「(北カ)□厨坊宿人　倉橋部人足　小月隼人　内蔵乙万呂
久米一万呂　因幡田作　鴨諸弟□
宮門本在　山口広足　□□福□万呂」　（裏）「合九人　十月七日倉橋部人足」

「北」らしい文字は追筆とみられる。この厨坊はおそらく調理を行なう場所であろう。『延喜式』（大膳職）によれば大膳職に大厨が付属しているが，それと同様の性格のものだろうか。

（表）「北一贄殿出帳」　（裏）「天平廿年」（題籤）

平城宮での贄殿の初見史料である。北一とあるのは複数の贄殿の存在を示している。『延喜式』（宮内省・内膳司等）によれば贄殿は内膳司に所属しているが，　場所的には内膳司と離れており，内裏内に所在していたようである。この贄殿には諸国貢進の御贄が納められ供御に充てられた。『延喜式』（宮内省）では，「太宰府所貢御贄」は調物・中男作物・粱作物・厨作物等から成り，これらは「並収贄殿」としている。このうち厨作物は大宰府主厨司の管理する厨の作物であり，『延喜式』(内膳司）には鯛醤，宍醢，蒜房漬等の作物をあげている。木簡中に「筑紫厨」と記した断片があり，これが大宰府の厨に当たるものとみられる。したがって木簡記載の贄殿は平安宮内膳司の贄殿に当たるものとみられるが，平城宮でも内膳司の管下にあったかどうか検討を要する。延暦17年に綱曳厨・江厨が，同19年に筑摩厨が大膳職から内膳司に所属替えになっており，平城宮では贄物が大膳職に収納されていたことも考えられるからである。

（表）「左衛士府　年魚御贄五十三斛」　（裏）「天平十九年」（習書は省略）

平安時代には衛府の御贄献進の史料が散見するが，奈良時代ではこの木簡が初出である。断片で「御贄鮭五十二」とあるのも同じく衛府の御贄であろう。『延喜式』（左右衛門府）によれば，六衛府の日次の御贄は蔵人所に収められる。平城宮での収納先は不明だが，大学寮の釈奠に用いる六衛府の祭牲が大膳職に送進されること（『延喜式』大膳職）は参考になろう。

以上のように，これらの木簡は食品関係官司に関するものとみられるが，官司名の推定には木簡の流出地点等を含め，さらに慎重な検討が必要であると思われる。

**佐紀池地区出土木簡**（第101次調査）

奈良時代の園池底の堆積層および同じく池底の細溝から各1点出土したが，内容的に顕著なものはなかった。

（加藤　優）

# 平城宮跡の整備 (7)

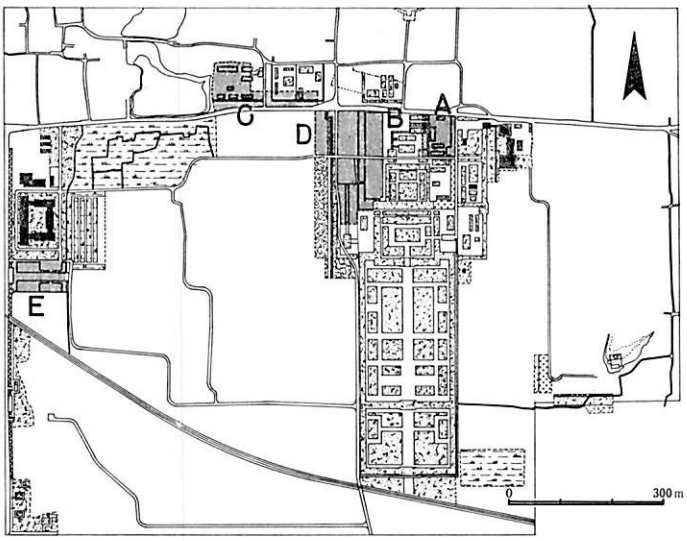
平城宮跡発掘調査部

1976年度の宮跡整備は，第2次内裏内郭および内郭築地回廊基壇復原整備，第2次内裏西方地区整備，北方官衙地区整備，緑陰帯造成，宮内道路造成および案内板の設置を行なった。

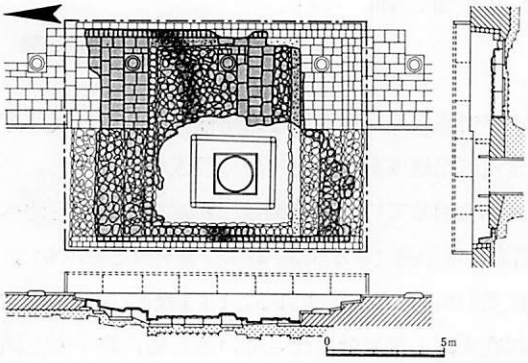
**第2次内裏内郭築地回廊基壇復原整備**　1974年度から始めている東辺築地回廊基壇の復原を北へ県道（通称一条通）までの約70m延長した。回廊には門跡（SB7970）および井戸（SE7900），内郭部には掘立柱建物4棟，玉石溝（SD7870）約115mなどが含まれる。（第1図A）　築地回廊の西内郭側はほぼ完全に復原したが，東側は現在水路と市道敷になっているため，昨年度と同様築地心より 2.5mまでを復原した。回廊の中央部西側で検出された井戸跡は，合成樹脂による現寸遺構模型を据え付け，遺構の欠失部はもとと同質材（切石は石川県産御音下凝灰岩，玉石は奈良市産三笠安山岩―通称カナンボ石）にて補充し復原した（第2図）。

井戸を中心とする施設は，回廊の西半をその一部に組入れ，東西8.3m南北12mの広さがある。井戸位置の地盤高は，回廊上面基準高より約1mの落差があり，東西辺は凝灰岩切石の擁壁，南北辺は敷石の施した階段を設けてふさぐ。階段は南北とも西半は踏面3段の玉石敷き，東半は下方の2段分を勾配を強くして1段とし，3段目以上は西半と合せている。但し踏面の寸法は北は1m，南は0.85mあり北の方が少し広い。井筒は，直径1.64mにおよぶ巨大な一木くりぬきの丸井筒で，地上部は一辺1.70mの方形枠を組んでいた。今回の復原では今後の維持管理のことも考慮し，丸井筒をコンクリートヒューム管に替え，地上方形枠のみ台桧材で復原製作して表示した。また井戸屋形の4本の掘立柱は60cmの高さに設置し，その間に凝灰岩切石をふせた。

合成樹脂による現寸遺構模型は，1973年度発掘調査の際にシリコン樹脂により型取りを行なったものを基に，ポリエステル樹脂，ガラスクロス，ロービングクロスなどを積層してすでに雄型をも製作済みである。これの設置にあたっては，遺構面を砂養生した上に1m×1m×0.12mのプレキャストコンクリート版の基礎を伏せ，基礎と模型本体との空隙はL形鋼（50×50×6）




第1図　平城宮跡整備図




第2図　井戸跡復原図

でフレームをつくり支持体とした。

模型面は回廊にあわせて遺構面より0.7m上りを復原高さとした。基礎高さとフレーム高さは遺構の状態が場所によって異なるため一定寸法には納まらず，模型本体を6個に分割し，その個々について妥当な位置・高さをきめ据えつけた。

その他特に配慮した点としてプレキャストコンクリート版間をアスファルトで充塡しその移動をふせぐと共に漏水処理を容易にしたこと，L型鋼は樹脂の皮膜で覆い防錆を図ったこと，フレーム外周はコンクリートブロックを積上げ土砂や水が直接入り込まないようにしたこと，などがあげられる。ただ露出展示であるため樹脂模型が直接外気にさらされることになり，温度差による膨張・収縮や紫外線による褪色の問題など耐久性について今後の経年変化をみきわめていく必要があろう。

**内裏西方地区整備**　1974年度より継続で進められてきた第2次内裏朝堂院地区の整備は，その中心地区については北西部を残すのみとなった。この地区は未発掘地であり，遺構の詳細については未確認であるが，周辺の整備の進行につれ環境整備が望まれるようになって来た。そこで東辺築地回廊と対称の位置に想定される西辺築地回廊の基壇を盛土張芝により表示し，回廊に囲まれた内裏空間を明確にすると共に第2次内裏朝堂院の中心地区について整備を完了するよう約11,800㎡について施工した（第1図B）。この地区では前述の築地回廊基壇の表示（延長180m）を行ない，回廊の両側は整地しクローバーの種子吹付け，西側外郭部には1本/150㎡程度の樹木植栽を行なうにとどめた。また1975年度に整備した外郭西南隅の礎石建物より始めた苑路（幅員5m砕石舗装）を北へ構内道路までの約110mを延長した。

**北方官衙地区整備**　北方官衙地区については1971・72年度の既整備地の西側で，1条通の北側を佐紀池東堤までの整備を行なった。施工区は発掘次数では2，4，6，81次調査にあたり，奈良時代後半（平城宮B期）の遺構を採り掘立柱建物8棟，築地塀185m，柵列36mおよび井戸跡3ケ所の復原表示を行なった。工法は掘立柱建物，築地塀，柵列については盛土張芝とし，掘立柱位置をツゲの植栽，築地塀をサザンカの植え込みにより表示し，井戸跡については，出土した井戸枠を新材（台桧）により製作し各々1段分を復原設置した（第1図C）。

**緑陰帯造成**　これまで資料館と覆屋を結ぶ構内道路以南を順次整備して来たが，今年度は第87次発掘調査で確認された1条通りから南へ構内道路までの約80mについて造成した。和泉砂岩割石で復原表示を行なっている南北大溝（SD3715）は，今年度施工区が水路上端となるため佐紀池より取水している灌水施設の装置を1部利用し，自動給水し日中水を流すようにした。また水路内に常時滞水するように4ケ所の堰を設け，同時に水の浄化を図った（第1図D）。

**宮内道路造成** 1971年度に復原整備した西面中門から東へ約110mについて施工した。復原道路は門基壇より幅員16mの砂利舗装をし，その両側は和泉砂岩割石溝（幅40cm）で道路排水を行なうようにした。また北側脇門から資料館に至る通路として，脇門幅（4.5m）で東へ資料館東側構内道路と結ぶ苑路を造成した。この苑路については今後車輛の通行も考えられるのでアスファルト舗装とした。またシーズンには資料館北側に設けている駐車場面積が不足する事が多くなるため，この苑路沿いに駐車場を設け混雑時の緩和を図った。復原道路の両側は盛土張芝をし2本/100㎡程度の樹木植栽を行なった。

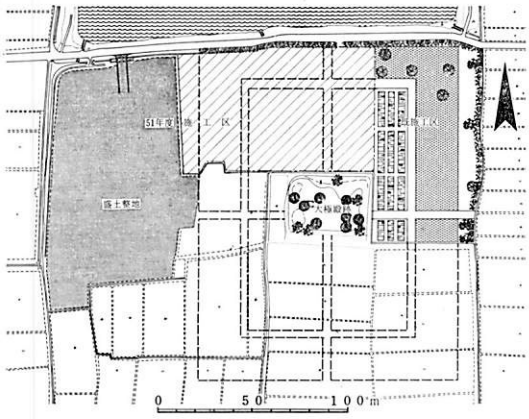
**そ の 他** 内裏内郭回廊部に復原した井戸施設の案内板を設置したほか，1970年以前に奈良県で設置していた案内板の説明図と現況とが発掘調査の進捗に伴い一致しない部分が多くなったため，説明図の修正貼り替えを8基について実施した。 （渡辺 康史）

| | 第2次内裏内郭回廊復原 | 内裏西方地区 | 北方官衙地区 | 緑 陰 帯 | 宮内道路 | 案内板 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 整備規模 | 5,950㎡ | 11,800㎡ | 11,100㎡ | 2,740㎡ | 7,040㎡ | 9基 |
| 工 費 | 31,200千円 | 31,000千円 | 30,200千円 | 8,000千円 | 23,800千円 | 1,290千円 |

# 藤原宮跡の整備 (2)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部・平城宮跡発掘調査部

1975年度に大極殿東北部から整備を始めたが，その西部（旧鴨公小学校跡地）が1976・77年度発掘調査予定地になっているため，今年度は小学校跡地（5,750㎡）の校舎基礎を処理するにとどめ，大極殿回廊外側北西部（約8,500㎡）の盛土整地を行なった。この地区は大極殿地区より約1m低く，道路を隔て北側にある醍醐池に水を引くために大極殿より南一帯の水が集中し，非常に湿潤で草刈作業等管理作業に困難を生じていた。また遺構が少ないことや将来大極殿地区の整備に関連して旧水田面より平均40mの盛土を行ない整地して，見学者の休憩，軽い運動等の使用も可能な多目的広場とした。この広場への進入路（幅員5.5m）を北側市道に取り付け，市道南側の水路部分はコンクリート橋とし，その上・下流共4.5mについて護岸工事を行なった。なお工費は21,000千円であった。 （渡辺 康史）



藤原宮跡整備図

# 平城京東三坊大路側溝出土の大型人形

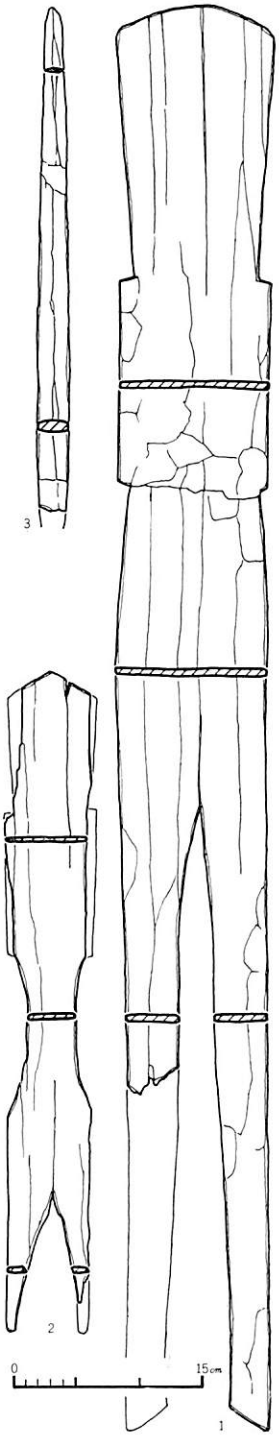
平城宮跡発掘調査部

東三坊大路東側溝（６ＡＦＢ区ＳＤ650）の調査成果は，すでに「平城宮発掘調査報告Ⅵ」として刊行したが，未報告の木製品があったのでここに補足しておきたい。

大型の人形が２点ある。１はほぼ全形をとどめる全長112.7㎝の長大な人形である。頭部で最大幅12.5㎝をはかり，しだいに幅を減じて肩部に至る。腰部は両側から切込み段をつけて表わすが腕の表現はない。以下脚部へ幅を拡げ，脚端部は斜めに切りおとす。桧の板目材から作り，一面は丁寧な削り整形をほどこすが，他面は割り裂き面を残す。墨の痕跡は認められない。厚さ0.6㎝前後。２は全長52.0㎝，最大幅6.6㎝，厚さ0.5㎝前後をはかる人形であり，頭・胴・脚の一部を欠くが原形はほぼ復原できる。大きく抉った腰部の表現と短い脚部に特徴がある。頭部は圭頭状につくり，腕は１と同様表現がない。桧の板目材からつくり，表裏面とも丁寧に削り整形をほどこしている。墨痕はみられない。

ＳＤ650Ａ出土の大型人形は，既報告の一例（877）を合せると計３点となり，平安時代初頭にみられる人形の大型化傾向をうらづける好資料ということができる。とくに１の人形は，全長１ｍをこす超大型品であり興味を引く。類例としては，長岡京跡出土の全長1.5ｍにもおよぶ人形があげられる。これら大型の人形は，すでに指摘があるごとく（京都考古21号），『親信卿記』にみえる「御等身人形」に相当する可能性が高く，20㎝前後の小型の人形とともに，今後さらに検討を要する問題である。

このほかに，剣形木製品１と曲物容器底板１，折敷４点がある。剣形木製品（３）は，棒の一端を剣先状に尖らし剣に模したもの。下端を欠く。現存長39.8㎝，幅2.5㎝，厚さ1.0㎝，桧の板目材からつくる。曲物容器底板は40.9㎝の径をもち，底板Ｉに分類できる。両側辺を欠くが，一部に欠損後の加工痕がみられる。厚さ0.9㎝，桧の板目材からつくる。折敷４点は，いずれも一辺の長さ（木目方向）55～60㎝にもおよぶ折敷Ａの大型品である。全幅をとどめないが，おそらく方形を呈したであろう。一辺に３対のとじ孔をもち，一部に樺皮を残すが側板をとどめるものはない。木取りは柾目・板目材が各２点づつである。　（黒崎　直）



# 奈良山出土の蔵骨器と墨

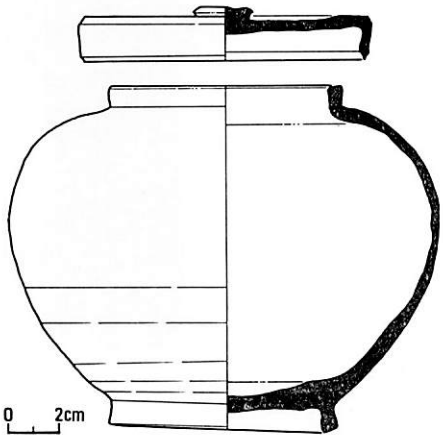
平城宮跡発掘調査部

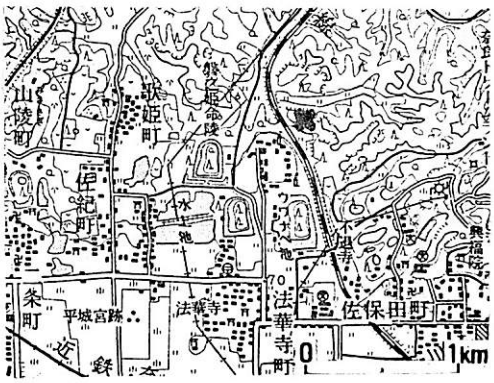
奈良山丘陵から数年前に出土した蔵骨器と萬年通宝２，神功開宝３などの一括遺物が昭和52年４月，発見者によって平城宮跡発掘調査部に届けられた。調査部では所定の手続きをとると共に現地を確認したが，発見時に蔵骨器中からとり出したというカーボン塊を光学的な観察をした結果，墨であることが判明した。現存するのは小指頭のもの１個と米粒大の小片数個のみであるが，昨年，奈良市平松町（平城宮跡発掘調査部　第100次調査）で完形の墨と筆管が蔵骨器中からみつかっていることから，とりあえずここに紹介する次第である。

蔵骨器の出土地は奈良市奈良阪町で，ウワナベ古墳から500m程北へ谷を入った東側の丘陵尾根上である。標高107mの丘陵頂から西へやや降ったところに自然崩壊による崖があり，この斜面に蔵骨器の一部が露出していたのを，昭和50年秋通りがかりにみつけ，掘り出して自宅に持ち帰ったという。地下40cm程のところに埋置されていたらしいが，その後の崩壊のため墓坑などの形跡はすでに認められなかった。

蔵骨器はいわゆる薬壷形の須恵器であり，直立する短かい口縁と丸く張った胴にやや外反する高台を持つ。外面は口縁から胴上半部をロクロ撫でし，下半はヘラケズリをする。底部外面はヘラケズリに撫でを加える。色調はやや白っぽい灰色を呈し，胎土中には細砂を含む。蓋は平坦な頂部と扁平なつまみを持ち，口縁部は直立する。頂部はヘラケズリ，口縁部は内外ともに撫でてある。色調，胎土は壺に同じである。時期は型式からみて奈良末頃とみられる。総高さ14.8cm。壺高さ14.0cm，口径9.1cm，最大径17.1cm，底径9.0cm。蓋径11.2cm，高さ2.4cm。

なお銅銭５枚は，器底に付着した銹から器底中央に一枚を置き，この四方に文字面を上にして並べてあったようである。いずれもサビが削られているが，うち三枚には文字面のサビ上に絹とみられる細い布目痕が認められる。萬年通宝はともに普通型であるが，うち一点（ａ）は6.5ｇもあり極めて重い（平均４ｇ）。神功開宝は大様型（ｃ）と長刀型（ｄ・ｅ）がある。（佐藤興治）




×印　出土地点

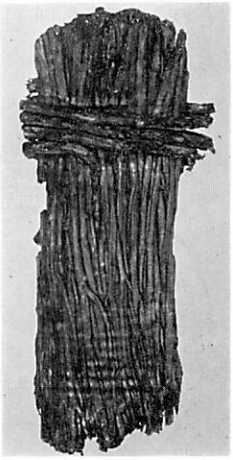
# 植物質繊維加工品の保存

平城宮跡発掘調査部

木製遺物と並んで比較的よく出土するものに蔦・藁・葦などを加工した編物や織物などがある。これらの遺物は自然に乾燥させると急激な収縮が起り，粉状化し，その形は完全に損なわれてしまう場合が多い。この種の遺物の保存はむずかしく，たとえば，木製遺物の場合のように乾燥させまいとして，水漬けにして保管するにも，編物や織物はやがてほぐれてしまい，その形状を水中で維持すること自体むずかしいことであった。このような遺物は，ダンマール天然樹脂と密ロウをしませて強化することができる。本報告では葦を加工した箒ようのもの（写真）と竹製の筆軸の保存処理を紹介する。

保存処理操作の手順：①埋没中にしみこんだ土壌成分などを抽出するため，遺物を水（できれば蒸留水を使う）に浸し，一ケ月以上放置する。途中，1週間毎に水を取り替える。②遺物に含蓄されている水分をエチルアルコールと置換する。充分にアルコールがしみこんだのちに，エーテルとアルコールが等量混合された液に浸す。さらに純粋なエーテルをしませる。③エーテルにダンマール樹脂を5％(重量比）添加する。そして，その濃度を徐々に上昇させ，20％に達したところで，さらに密ロウを加える。密ロウがエーテルに溶ける量は限られており，あまりよく溶融しない。密ロウはもろくてネバリの少ないダンマール樹脂に柔軟性を与える（密ロウの代わりに合成樹脂を使う例もある)。④最終的には40％前後のダンマール樹脂と5％程度の密ロウを加えたエーテル溶液をしませることになる。溶液から取り出したら，真空乾燥する。この時点では，遺物の表面上にダンマール樹脂・密ロウが少々残留するが，トリクレン溶液に数秒間浸すことによって解消する。

なお，筆軸については，その腐朽度が相当激しかったのでダンマール樹脂は60％濃度にまで上昇させた。そのあとは，すべて前者と同じ要領で処理した。



植物質繊維の場合，その種類によっては，組織が密で，ダンマール樹脂があまりしみこまないものもある。このような遺物は，処理後の数ケ月間に変形を生ずることがあるので，真空乾燥したあと，すぐに数％濃度のアクリル樹脂をコーティングして補強強化の処置をする。

上記の処理方法は，アルコール・エーテル・樹脂法（クリステンセンが，木材保存のために開発したエーテル法を応用したもの）と呼ばれ，植物質繊維加工品の他，臼ようの木製遺物や漆製品などの処理にも有効である。ただし，エーテルは無色特臭のある揮発性・引火性の液体なので，その取り扱いには細心の注意が必要である。

（沢田　正昭）

# 飛鳥・藤原宮跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では，1976年度の主要な調査として藤原京内で，朱雀大路，右京七条一坊の調査を行ない，藤原京条坊復原に貴重な資料を得た。また，飛鳥地域では大官大寺の回廊東南隅・寺域東限の調査と，山田寺の中門・塔地域の調査を実施した。主な調査地域とその期間，面積などについては第1表の通りである。

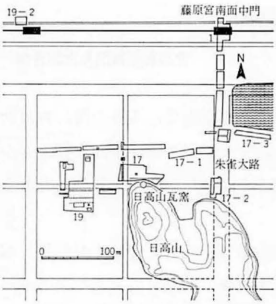
**藤原京朱雀大路の調査**（第17—2・3次）　この調査は，橿原市が日高山の北地区に計画した市営住宅建設に伴う事前調査である。調査地は藤原宮第1次調査で検出した藤原宮南面中門の南100～150mに位置し，朱雀大路推定地にあたる。調査区は日高山の北裾を南地区，そこから北へ50m離れた地区を北地区，北地区の東を東地区とした。今回の調査地の西に接する地域は第17・19次調査として発掘している（第1図）。

検出した主な遺構は朱雀大路とその両側溝および東西溝2である。なお，東地区では朱雀大路の側溝に沿って築地などの検出が期待されたが藤原宮期の遺構はみられなかった。

朱雀大路西側溝SD1952は南地区で検出した。幅4m以上，深さ0.4mを測る。東岸は南端から6mにわたって玉石を3段以上に積み護岸を施している。朱雀大路東側溝SD1951は北地区で検出した。幅4m以上，深さ0.45mを測る素掘りの溝である。両側溝からは藤原宮期の遺物が少量出土した。朱雀大路SF1950は両側溝SD1951・1952に挟まれた空間地に相当し路面幅は18mを測る。側溝はいずれも両岸を検出していないが，東西の側溝とも同規模で溝幅6mとすると両側溝間の心々距離は約24mに復元できる。これらの数値は第18次調査で検出した朱雀大路計画線と仮称している大路や本薬師寺西南隅で検出した八条大路と西三坊大路の側溝心

| 調査地区 | 遺跡・調査次数 | 調査期間 | 面積 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 6AJH | 藤原宮第17——2・3次 | 76. 4. 5～ 5.18<br>10.12～ 11. 6 | 9.0a | 朱雀大路 |
| 6AJH | 藤原宮第19次 | 76.11. 9～77. 2.11 | 26.0a | 右京七条一坊 |
| 6AJC | 藤原宮第19——1次 | 76. 5.25 | 0.2a | |
| 6AJH | 藤原宮第19——2次 | 76.10.22～77.11. 6 | 2.0a | |
| 6AJE | 藤原宮第19——3次 | 76. 8.26 | 0.1a | |
| 6AJF | 藤原宮第19——4次 | 77. 1.10～ 1.11 | 0.2a | |
| 6AJG | 藤原宮第19——5次 | 77. 1.13 | 0.2a | |
| 6BTK | 大官大寺 | 76. 4.22～77. 1.21 | 17.0a | 東回廊・寺域東限の確認 |
| 5BYD | 山田寺 | 76. 4.27～ 12.18 | 27.0a | 塔・中門・回廊の確認 |
| 6AMU | 軽池北遺跡 | 76. 5.13～ 6.23 | 11.0a | |
| 5BOQ | 奥山久米寺西方 | 76. 8.23～ 9.16 | 0.7a | |
| 5AOH | 小墾田宮推定地 | 76. 9.17～ 10. 4 | 0.4a | |
| 5AIB | 稲淵川西遺跡 | 76.12. 7～77. 3.15 | 7.2a | |
| 5BAS | 飛鳥寺 | 77. 3. ～ | | 北面大垣・北門 |

第1表　1976年度発掘調査状況



第1図　第17・19次発掘位置図

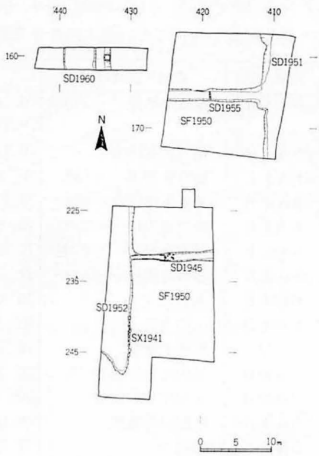
心距離約16mよりも広く，藤原京の中央大路としての性格の一端を窺うことができる。

朱雀大路ＳＦ1950上では東西溝２条を検出した。南地区で検出した東西溝ＳＤ1945は幅1.4m，深さ0.6mを測り，東端は西側溝ＳＤ1952に合流する。合流点から東へ6mの位置に暗渠の一部と考えられる玉石組みの施設が残っている。朱雀大路の両側溝を結んで排水するためのものであろう。この溝の位置は七条条間小路北側溝の推定位置よりも北にずれるため，小路側溝とするには問題が残る。北地区で検出した東西溝ＳＤ1955は幅1.5m，深さ0.45mを測る。この溝はＳＤ1951の西岸から西へ7mの位置に建築部材を転用加工した木堰を設けている。木堰の東では木杭に小枝をからませた「しがらみ」による護岸施設がみられる。ＳＤ1955はＳＤ1951の掘削時よりも古く掘られている。

今回検出した朱雀大路の中軸線は藤原宮中軸線の延長線とほぼ合致している。また，藤原宮北面中門地区（第18次調査）で検出した朱雀大路計画線と仮称したＳＦ1920の延長部はこの調査区内では検出していない。さらに，朱雀大路の西側溝ＳＤ1952は日高山の北裾にあたる位置で終っている。側溝は日高山の山腹まで延びていたのが後世に削平されてしまったものか，あるいは朱雀大路の側溝を掘削した当初からこの位置で止まっていたのかは明らかでない。朱雀大路に限らず，藤原京の大路や小路が丘陵にあたる場合，その処理の仕方が問題として残る。

**藤原京右京七条一坊の調査**（第19次）　この調査は橿原市が上飛弾町に計画した宅地造成に伴う事前調査である。調査地は日高山の西に接する水田で，藤原京右京七条一坊の推定地にあたる。藤原京の坊の坪割については，最近の発掘調査の成果から，東西，南北ともに坊の中央に1条の小路を設けて4つの坪に分けていることが明らかになっている。かりに平城京の坪割と同じ方法で呼ぶとすれば，今回の調査地は右京七条一坊三坪と四坪にあたる(第3図)。

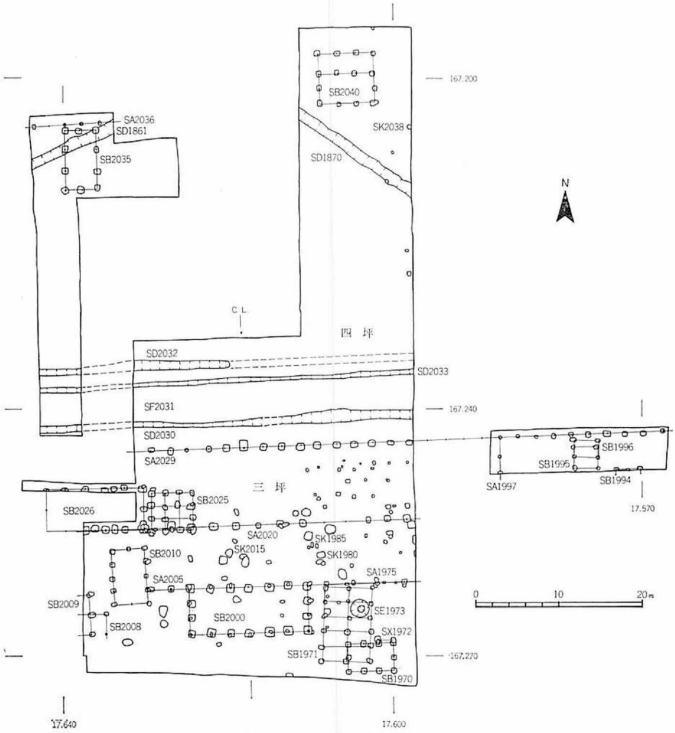
検出した遺構は，その重複関係や出土した遺物からみて，藤原宮造営前のもの（A期），藤原宮期のもの（B期），中世以降のものがある。A・B期の遺構は掘立柱建物13，道路1，掘立柱塀6，井戸1，溝3，土坑20である(第2表)。



第2図　第17―2・3次発掘遺構図

| 時期 | 遺　構 | 規　　模 | | | 時期 | 遺　構 | 規　　模 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A1期 | S B 1971 | 南北棟 | 5間×2間 | 9.0×6.0 | | S B 1970 | 東西棟 | 3間×2間 | 5.4×3.3 |
| | S B 1996 | 東西棟 | 1間×1間 | 3.0×2.0 | | S B 1994 | 南北棟 | ？間×2間 | ？×3.0 |
| | | | | | | S B 2000 | 東西棟 | 6間×3間 | 14.4×5.7 |
| | S B 1995 | 東西棟 | 1間×1間 | 2.9×2.7 | | S A 2029 | 東西塀 | 28間 | 62.5 |
| | S B 2008 | ？ | ？ | ？ | B1期 | S A 1975 | 東西塀 | 4間 | 9.6 |
| | S B 2009 | 東西棟 | ？×2間 | ？×4.8 | | S A 2005 | 東西塀 | 2間 | 5.9 |
| A2期 | S B 2010 | 南北棟 | 4間×2間 | 6.8×4.0 | | S A 2020 | 東西塀 | 14間 | 38.0 |
| | S B 2026 | 東西棟 | 5間×2間 | 11.6×5.0 | | S A 1997 | 南北塀 | 2間 | 4.4 |
| | S A 2036 | 東西塀 | 4間 | 8.0 | | S E 1973 | 井　戸 | | |
| | S D 2033 | 東西溝 | | | | S B 2035 | 南北棟 | 3間×2間 | 7.2×3.8 |
| | | | | | | S B 2040 | 東西棟 | 3間×3間 | 6.9×6.0 |
| | S F 2031 | 七条条間小路 | | | | | | | |
| B1期 | S D 2030 | 七条条間小路南側溝 | | | | | | | |
| | S D 2032 | 七条条間小路北側溝 | | | B2期 | S B 2025 | 東西棟 | 3間×3間 | 5.1×4.5 |

第２表　第19次発掘遺構時期区分




第３図　第19次発掘遺構図

A期の遺構には建物6，溝1，塀1があり，ほかに自然流路SD1861・1870がある。建物については，藤原宮第16次調査ですでに明らかにされているように（『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』6参照），重複関係や建物の方位の違いを手がかりにA期を$A_1$・$A_2$期に細分できる。$A_1$期は7世紀後半をそれほど遡らない時期，$A_2$期は藤原京条坊施行直前の時期をあてることができる。

$A_1$期の遺構は建物SB1971・1996がある。いずれも国土方眼北に対し北で東へ振れる方位を示す。SB1971の南北の妻柱穴および棟通りの北から3番目の柱穴は玉石を5～6個用いて根固めを施している。

$A_2$期の遺構には建物SB1995・2008・2009・2010・2026と塀SA2036，東西溝SD2033がある。いずれも国土方眼北に対し，北で西へ振れる方位を示す。建物はSD2033の南に集中している。SB2026は桁行11.6m，梁行5mを測り，この時期では最大規模の建物である。この建物は柱を建てる際，柱掘形の底を一段掘り凹め，その部分に石を据えて根固めとし，石の上に柱を建てている。溝SD2033は幅0.45～0.6m，深さ0.2～0.4mを測る素掘りの溝である。

B期の遺構には東西道路とそれより南では建物3，塀5，井戸1，土坑19があり，北では建物2，土坑1がある。道路SF2031は北側溝SD2032と南側溝SD2031を伴い，路面幅約6m，側溝心々距離約7mを測る。北側溝SD2032は幅1.2m，深さ0.2mの素掘りの溝で，調査区中央付近から東は削平されている。南側溝SD2030は幅0.75～1.45m，深さ0.25m前後の素掘りの溝で，堆積土からは，木簡，軒平瓦，土師器が出土した。道路SF2031の位置は他の条坊遺構から推して，七条条間小路と考えられる。なお，SF2031は西で南に約2°振れている。

条間小路SF2031より南の三坪の遺構は重複関係から$B_1$・$B_2$期に細分できる。

$B_1$期ではSF2031の南側溝SD2030の心から南へ3mの位置に東西の掘立柱塀SA2029を設け，小路との間を画している。さらにSA2029から南約9mの位置に東西方向の塀SA2020がある。$B_1$期の主要遺構はSA2020の南で検出した。建物SB2000は今回の調査範囲内では最大規模の建物であり，北側柱列の東と西には東西方向の塀SA1975とSA2005がとりつく。この建物を東西に二分する中軸線は，ほかの条坊遺構から推定される三坪の中軸線とほぼ一致している。SB2000の東では小規模な建物SB1970や井戸SE1973を検出した。

$B_2$期になるとSB2000，SB1970，SA2020は取りはらわれ，SB2025，SX1972が造られる。B期ではほかにSB2000の北方を中心に分布する多数の土坑がある。土坑の中に焼土，灰を多量に含むものが多く，SK2015からは塼仏の笵が出土した。

条間小路SF2031以北の四坪の遺構としては建物SB2035・2040と瓦溜りSK2038がある。SB2040は北に広廂をもつ建物である。四坪は三坪と比較して遺構は少なく，三坪でみられたSA2029のように坪の南を画する施設はない。四坪の東部についてはすでに第17次調査で発掘し，一坊坊間小路との間を画すると考えられる南北方向の塀SA1855を検出している。

出土遺物には塼仏笵，墨痕の残る木簡2と少量の土器・瓦がある。塼仏笵は雄型に粘土を押し焼成したもので，左下半部を残し，現存幅9㎝，高さ6.5㎝を測り，大小の蓮華座と2体の

立像の下半身が残る。復原すると，中央に如来立像を配し，左右に脇侍菩薩立像を置く形式となる。この笵から製作した塼仏は現在のところ知られていない。

今回藤原京の坊内を大規模に調査したことにより，藤原京における坪の実態をつかむ手がかりを得た。三坪の場合，坪の北半部を調査したのみであるが，坪の中をさらに細分する施設は検出していない。$B_1$期では，坪の北部で坪を東西に二分する中軸線上に大規模な建物を建て，周辺に小規模な建物や井戸を配置する宅地利用法の一端を明らかにした。坪全体を一つの宅地として使用していたものであれば，さらにＳＢ2000の南に主屋風の建物の存在が考えられる。七条条間小路についてはこれを東に延長すると日高山にあたる。朱雀大路と日高山との関係と同様に，道路が丘陵にあたる場合，その処理の仕方が問題である。第17次調査では，今回検出の七条条間小路の東延長上よりやや北に寄って東西溝ＳＤ1845を検出している。丘陵にあたる部分では，小路を北に迂回させていた可能性も考えられる。

**藤原宮出土木簡**　木簡は藤原宮東辺外濠ＳＤ170から37点と，藤原宮南辺内濠ＳＤ502から56点出土した。

東辺外濠ＳＤ170は，第19―１次調査として藤原宮東北隅から南へ約650ｍの地点を発掘し，幅5.3ｍ，深さ0.7ｍの外濠を長さ１ｍにわたって検出した。発掘面積が小さいにもかかわらず，37点の木簡が出土したのはＳＤ170が含んでいる木簡の多さを改めて確認することとなった。木簡は削り屑が多く釈読できるものは少ない。木簡の中で顕著なものとしては次がある。

（表）「□
□□春部己西部丸部□□人
春□□　□□□

（裏）□□　□□□
□　人人阿□□」

短冊形の木簡全面に習書として書かれたものである。その習書中に春部・己西部・丸部等の氏の名を記したものがある。また，削り屑の中にも習書で己西部と記したものもあり，木簡はこの習書木簡と，それと同類の木簡の削り屑とを一括して外濠に投棄したことを想像させる。なお，ＳＤ170はこれまでに奈良県教育委員会がその北端部分を調査し，当研究所では昭和50年度に今回調査地の北約90ｍの地点を発掘しており，いずれも木簡の出土をみている。

南辺内濠ＳＤ502は第19―２次調査として藤原宮南面中門の西約280ｍの地点を発掘した。調査地の東南隣接地は藤原宮南面西門の推定地である。ＳＤ502はすでに第１次調査で検出したものの西延長部にあたり，今回は幅2.1～2.6ｍ，深さ１ｍを測る素掘りの溝を長さ14ｍにわたって検出した。出土した木簡は56点で，そのうち釈読できるものは９点である。とくに内容上注目されるものとしては次の２点がある。　１「□□□□（内妻カ）自女卅　舟木若子女卅五□槐直在」
２（表）「但鮭者速欲等云□□　」（裏）「以上博士御前白　宮守官」　１は女性の名前と年齢等を書きあげた交名風の木簡で，婢，女丁，ないし縫女等藤原宮内で官衙の雑役等に従事した女性に関するものと思われる。２は宮守官が博士に対して報告している文書で，宮守官という官名は令文その他の文献史料にはみられず注目される。博士については大宝令制では大学博士，陰陽博士，医博士等があるが，どの博士にあたるものかは詳かにしない。なお，第１次調

査でもＳＤ502から木簡が出土している。

**大官大寺第３次調査**　南面東回廊・東面回廊，寺域東限，中ツ道の検出およびそれら相互の関連の追求を目的として調査を実施した。主な検出遺構には，回廊，掘立柱建物，塀，溝，土坑などがある（第４図）。

回廊は南面東回廊ＳＣ053を７間分，東面回廊ＳＣ051を４間分検出した。回廊東南隅は中門取り付き部から15間目にあたる。礎石はすべて原位置に据えられたまま残っており，桁行3.9ｍ（13尺），梁行4.2ｍ（14尺）である。脇門は検出されなかった。基壇の築成にあたっては掘込地業は行なわず，整地面上に直接積土している。基壇外装や雨落溝はみられずかえって基壇面が堅く焼けてしまり，その上面に垂木や屋根の裏板とみられる焼損材が遺存していた。中門と同様に未完のうちに火災にあった状況が窺えた。礎石は花崗岩製で，基壇土を積む前に据え付けている。回廊東南隅を検出したことにより，回廊の全規模の復原が可能になった。中門心から回廊東南隅柱位置までは71.8ｍとなり，回廊の東西総長は両端隅柱位置間で143.6ｍに復原できる。中門の東妻柱位置から回廊東南隅柱位置までは60ｍあり，200尺で設計されたと考えられる。南面東回廊の方位は真東西にほぼ一致し，既知の伽藍中軸線とは正確には直交しない。

回廊の規模を明らかにし得たので，寺域東限施設を発見すべく，発掘区を東に長く延長したが，築地など寺域の東を限る施設は全く認められなかった。しかし，ＳＸ240を境にしてその東西では遺構の分布，瓦の出土状況に顕著な違いがあり注目された。ＳＸ240は南北溝ＳＤ250Ｂと南北溝ＳＤ244とにはさまれた幅20ｍほどの地山の高まりである。ＳＤ250Ｂは幅５ｍほどの素掘りの溝で，大官大寺造営以前につくられ，大官大寺式の軒平瓦6661型式やフイゴの羽口，鉄滓を含む土で埋められている。ＳＤ244は中世の素掘りの溝である。ＳＸ240の位置は大官大寺伽藍中軸線から東へ約130ｍで，「中ツ道」の推定位置にあたる。ＳＸ240は中ツ道の可能性があるが，ＳＤ244は中世の溝であり，発掘範囲も狭く，その性格については即断を避けたい。ＳＸ240上には土坑ＳＫ245が設けられている。ＳＫ245からは手斧の削り屑，土器，瓦とともに木簡７点が出土した。木簡では「讃用郡驛里鉄十連」と書かれた播磨国からの貢進物付札が注目される。「郡」と里名の一字表記より，大宝から和銅初年にかけての年代が考えら

第４図　大官大寺第３次発掘遺構図

れる。ＳＸ240以西には，大官大寺造営期の南北溝ＳＤ260・255がある。溝内からは手斧の削り屑，瓦，土器が出土している。その他，造営中に出た廃材や焼亡後の焼土・炭化物・瓦などを捨てた土坑ＳＫ253などがある。ＳＸ240以東では掘立柱建物３，掘立柱の塀１，土坑，溝などを検出した。いずれも７世紀中頃の遺構で，ＳＸ240以東からはほとんど瓦が出土しなかった。

以上のように，大官大寺の関連遺構や瓦の出土はＳＸ240以西に集中することが明らかになった。寺域の東限を示す施設は確認できなかったが，ＳＸ240付近が寺域東限として意識されていたことを暗示する。「中ツ道」を利用して設定された藤原京東京極路との関連を含めて，今後の調査の進展に期待するところが大きい。

**山田寺第１次調査**　桜井市山田に所在する山田寺は，古くより四天王寺式伽藍配置をもつ寺院として知られている。塔・金堂・講堂跡の土壇や礎石がよく残っており，昭和27年には特別史跡に指定された。昭和50年３月から史跡指定地の国有化が進み，昭和51年度を初年度として史跡整備のため伽藍中心部を調査することとなった。今回はその第１次調査として塔を中心に中門，回廊推定地を含む約2700㎡を調査し，塔・中門，中門より塔に至る参道，および西回廊の一部を明らかにすることができた。

塔ＳＢ005の基壇は一辺約12.6ｍ（42尺）で，四辺の中央に各々幅３ｍの階段があり，四周を犬走りがめぐる。基壇には心礎と西北隅の四天柱の礎石が原位置をとどめていた。旧地表面から四天柱礎石上面までの高さは約1.8ｍである。礎石および礎石据え付け跡から復原すると，塔の平面規模は方３間，柱間は中央間が８尺，脇間は７尺もしくは８尺と推定される。したがって，一辺22尺もしくは24尺の塔ということになる。基壇規模などからみて『諸寺縁起集』の

第５図　山田寺第１次発掘遺構図

記述のように五重塔であろう。なお，塔中軸線は方眼北に対して北で西に約1°30′振れている。

心礎は基壇上面から地下１ｍにある。南北径1.72ｍ，東西復原径1.8ｍの不整形な花崗岩で，上面中央に二段に舎利孔を穿つ。上段の蓋を受ける部分は直径30㎝，深さ３㎝，下段の直径は23㎝，深さ15㎝であり，底は椀状を呈する。内面にはベンガラとおぼしき赤色顔料が付着していたが，蓋や舎利容器はすでに持ち去られていた。なお，心礎下面にも直径約１ｍの円柱座を確認したが，この柱座はノミの痕跡を留め荒仕上げの段階で放置されている。原位置に残る西北隅の四天柱礎石は長径1.62ｍ，短径1.2ｍ，厚さ0.58ｍの安山岩製で上面に径１ｍの円柱座を作り出している。なお，発掘以前から心礎位置に露出していた花崗岩製の礎石は，従来心礎かと疑われていたが，心礎の検出により二次的に動かされたものであることが判明した。この礎石の上面にも径１ｍの円柱座があり，四天柱礎石を後世に転がしたものと考えられる。

塔基壇の築成にあたっては，まず，基壇規模よりやや大きく南北15ｍ，東西16ｍの範囲を深さ１ｍまで掘り下げ，「掘込地業」を行なっている。底面に礫を置き，底から約1.6ｍの高さまで版築をした時点で，心礎据え付け穴を掘り，心礎を据え付ける。心礎を据えた後で基壇上部の築成を行なうが，この時にはすでに心柱が建っていたらしく，心柱周囲の根巻粘土と基壇築成土が互層になっていることが観察された。基壇は羽目石，葛石が全て抜き取られて，花崗岩の地覆石の一部が残るのみであったが，基壇周辺からは加工痕のある凝灰岩切石が多数出土した。このことから基壇は地覆石は花崗岩，羽目石・葛石に凝灰岩切石を用いた壇上積み基壇と推定される。階段はいずれも幅３ｍ，出 1.5ｍを測る。石階部分は全て破壊されてその構造は明らかでない。階段の基部は塔の基壇土を削り出して作り，部分的には塔の基壇土を削り取り，新たに黄褐色粘土を突き固めて構築している。

基壇周辺の犬走りは基壇から 1.5ｍ離れた位置に縁石として砂岩系の暗緑色の石を並べ，縁石と基壇との間には同質で，やや小さ目の石を敷きつめる。当初の犬走りは方形にすることを意識し，階段位置では地覆の線に揃えているが，後に階段部分に幅５ｍ，奥行１ｍほどの張り出し部を設ける。この改装時期は，後述するように境内を瓦敷にした奈良時代中頃と思われる。塔周辺では瓦敷を検出した。塔周辺を中心とし，発掘区東北隅にも広がっているが，一部に欠けた部分がある。瓦敷に使用された瓦は平瓦が最も多く，他に丸瓦・鴟尾・軒瓦・垂木先瓦・熨斗瓦・須恵器の大甕などがある。また，塔の東約14ｍの瓦敷の中には，直径30㎝，高さ24㎝の円筒土管を半分埋め込んだ施設が発見された。瓦敷にした時期は，瓦敷に混って出土した土器からみて塔創建当初ではなく，奈良時代中頃と考えられる。

瓦敷の上にはバラス敷がある。この中からは10世紀の土器片が出土しており，平安時代になってバラス敷にしたものと推定される。発掘区の東辺のバラス敷上からは東回廊のものと思われる垂木や茅負などの建築部材が出土しており，東回廊は10世紀頃に倒壊したものと考えられる。このバラス敷の上層には焼土層がある。焼土層は塔周辺で厚くなっており，中からは焼けた瓦・塼仏と共に12～13世紀の瓦器が出土した。塔は12～13世紀頃焼失したものとみられる。

参道ＳＸ004は塔の南正面と中門との間を結ぶもので，長さ約６ｍにわたって検出した。幅1.5ｍで，縁石として花崗岩を並べ内部に瓦を敷いている。当初は縁石のみの参道で，後に瓦敷としたものであろう。

中門ＳＢ003は基壇土の一部と中門を建てる時の足場穴ＳＸ013を桁行４間，梁行１間分検出した。柱間は14尺前後である。後述する西回廊との関係を考慮して，この足場穴から中門を復原すると，柱間は14尺前後で，桁行・梁行とも３間の重層門と考えられる。中門心から塔心までの距離は約29ｍである。中門と塔との間では現状で約１ｍの高低差があり，もとはこの間に階段状の施設があったと推定されるが，すでにこの部分は削平されてその痕跡をとどめない。

西回廊ＳＣ070は礎石抜取穴４個を検出した。これによって西回廊は桁行柱間3.6ｍ（12尺）梁行4.2ｍ（14尺）の単廊と復原できる。塔を南北に二分する中軸線は復原西回廊の南端から９間目の心と一致する。先の中門の復原と合わせると，中門以西の南面回廊部分は10間になる。塔心から西回廊心までは40.4ｍで，これを東に折りかえすと80.8ｍで，東回廊の推定位置は現在の里道の東にあたる。

このほかのおもな遺構としては土坑２，井戸５がある。土坑ＳＫ006は南北９ｍ，東西16ｍ，深さ1.1ｍを測る不整形の土坑で，７世紀後半の土器とともに多量の瓦，鞴の羽口，鉄釘が出土した。土坑ＳＫ201は中世の瓦溜りで瓦とともに瓦器が出土した。井戸５基はいずれも中世のものである。ＳＥ230・231・233・234は石組み井戸である。ＳＥ232には井戸枠等は残っていない。井戸のうちＳＥ230・231から13世紀前半の瓦器が出土した。

遺物には瓦塼類，塼仏，金属製品，木製品，土器がある。なかでも瓦は大量に出土した。数千点出土した軒瓦のうち，奈良時代のものは10点に満たず，他はすべて単弁８弁蓮華文軒丸瓦と重弧文の軒平瓦の組み合わせからなるいわゆる「山田寺式」であるが，従来，山田寺出土と伝えられている花弁中の子葉のまわりに火焔文をめぐらす軒丸瓦は出土しなかった。

塼仏は独尊，四尊連座，十二尊連座のものがある。独尊塼仏は一辺約３㎝の方形で最も小型である。四尊連座塼仏は如来座像を横２列２段に配し，十二尊連座塼仏は４列３段に配している(口絵10)。塼仏の中には金箔の痕跡の残るものがある。この他に大型の独尊座像塼仏の脚部片が出土した。

金属製品のうち注目すべきものに金銅製の風招がある。風招は下端に双円弧状のくり込みをもつ（第６図左）。このような形態は長谷寺の銅板法華説相図の多宝塔の初層の軒先にみられる風招と同じものである。昭和31年度に調査した飛鳥寺瓦窯跡

第６図　山田寺出土の風招と飛鳥寺瓦窯出土の瓦笵描

出土の平瓦にも，これとよく似た風招が線書されている（第6図右)。奈良時代に先行する型式のものと考えられる。

今回の調査によって，塔の規模・中門および回廊の位置をほぼ明らかにすることができた。最後に，塔・中門・回廊の造営・廃絶年代についてふれておく。山田寺の建立は『上宮聖徳法王帝説』裏書によると，舒明天皇13年（641）より始まっている。塔周辺が偉容を整えた時期を知る手がかりとして，伽藍造営時の廃棄物を一括して捨てたと考えられる土坑ＳＫ006の出土土器がある。ＳＫ006出土土器は７世紀の第Ⅳ四半期に位置づけられるものであり，この年代は『上宮聖徳法王帝説』裏書にある塔建立年代とも矛盾しない。塔の焼失時期は12～13世紀頃と考えられるが，10世紀頃には東回廊の一部はすでに倒壊していたらしく，さらに，13世紀前半には回廊内の各所に井戸が掘られるほど荒廃していたらしい。

**飛鳥寺北方の調査**　住宅建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は飛鳥寺安居院の北方約220ｍ，字石神の東方約150ｍの水田である。検出した遺構には掘立柱の塀と溝及び建物の一部とみられる柱穴などがある。東西方向の一本柱の塀ＳＡ500は柱間2.7ｍ等間で６間分検出した。真北に対して東で1°弱北に振れる。塀の北に沿って幅約2.4ｍ，深さ約1.0ｍの東西溝ＳＤ501があり，溝は発掘区の西端で止る。塀と溝の心々距離は2.4ｍを測る。溝内や付近には石塊が散乱しており，溝は玉石で護岸していた可能性が強い。埋土からは炭化物に混って多量の瓦・土器が出土した。軒丸瓦では飛鳥寺創建瓦と推定される単弁10弁蓮華文軒丸瓦のうち中房周縁の圏線が突出するものが，出土軒丸瓦の70％近くを占めている。また，土器の大部分は奈良時代後半に属する。その他の遺構としては，塀ＳＡ500の南９ｍにある幅約２ｍの東西溝ＳＤ503および南17ｍ付近に点在する柱穴群があるが，発掘区が狭く詳細は不明である。

以上のように，東西方向に走る一本柱の塀ＳＡ500とそれに伴う溝ＳＤ501は，位置と出土遺物からみて飛鳥寺の北を画する施設の可能性が強い。飛鳥寺南門と塀ＳＡ500との心々距離は約293ｍを測り，寺域はこれまで想定されてきた北限よりも約１町北へ拡がる可能性がある。なお，溝が塀に沿ってそのまま西に延びず途中で止まり，基壇状の高まりが北に突出する位置は，従来推定されてきた寺域の中軸線の北延長線上にあたり，この高まりＳＸ502が塀に取り付く門など建物の基壇跡の可能性も残されている。

**稲淵川西遺跡の調査**　この調査は飛鳥国営公園祝戸地区の駐車場建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は坂田寺跡の西方約200ｍ，

第７図　飛鳥寺北面大垣発掘遺構図

稲淵川を隔てた水田中にあり，北を通称「フグリ山」の山塊に画された南北に細長い平坦地である。

検出した主要な遺構は掘立柱建物4と石敷広場1である。ＳＢ001は桁行5間以上，梁行4間の四面廂付と推定される東西棟掘立柱建物である。柱掘形は幅1ｍ，長さ3.2ｍ前後の長方形平面で，側柱と入側柱を一組にして一つの掘形内に2本の柱を立てる特異なものである。ＳＢ001の北および東側柱外方に接して厚さ1㎝，長さ1ｍほどの板材を横長に立て並べた施設を検出したが，その性格は判然としない。ＳＢ002は桁行8間以上，梁行4間で南側に廂を持つ東西棟掘立柱建物である。柱掘形は2種類あり，南側柱列は通有の形態であるが，入側柱列は溝状に穿った一連の掘形（布掘り掘形）に9本以上の柱を立てる形態を取る。北側柱列も同様に布掘り掘形であろう。ＳＢ003は桁行2間以上，梁行4間で西に廂を持つ南北棟掘立柱建物で，入側柱列および東側柱列を布掘り掘形としている。ＳＢ004は桁行15間，梁行4間で，総長26.4ｍに及ぶ細長い南北棟掘立柱建物である。ＳＢ003と柱間寸法，柱掘形状況，廂の付き方など全く同様である。

第8図　稲淵川西遺跡発掘遺構図

ＳＨ010は発掘区の中央で検出した南北14ｍ，東西18ｍ以上の石敷広場である。北は高さ15㎝前後の石列で限り，ＳＢ002の南側柱列に接する。南はＳＢ001の北に接する先述の板材で画し，東はＳＢ004西側柱列付近まで及び，西は発掘区外に拡がる。石敷は40㎝前後の花崗岩質の玉石を全面に敷きつめているが，一部は石が抜取られている。敷石上や目地にはかなりの量の炭化物が認められた。

石敷広場と4棟の建物は同じ整地土上にあり，同一時期の造営による一連の遺構である。これらの遺構の方位は国土方眼方位に対して北で25.5°東に振れる。稲淵川と「フグリ山」とにはさまれた遺跡地の現地形は遺構方位とほぼ一致する方向に細長い平坦地であり，遺構方位は地形に制約されたのであろう。

出土遺物の大部分は土師器・須恵器などの土器類で，瓦類・金属器などは少量である。柱掘形や整地土中からは7世紀中頃の土器が出土し，遺構を覆う黄色粘質土や柱抜取痕跡および石

敷上の炭化物層からは7世紀末年前後の土器が出土した。

以下，本調査で判明した二，三の事項について記述する。まず，遺構配置の整然とした規格性が注目される。ＳＢ001とＳＢ002の東側柱列が一致すること，ＳＢ003とＳＢ004の柱筋が一致すること，ＳＢ001の妻柱の位置がＳＢ003とＳＢ004の中央に一致すること，ＳＢ001・002とＳＢ003・004の建物間距離がＳＢ003とＳＢ004間のそれに一致することなど，多くの点で建物の配置の計画性を窺うことができる。また，ＳＢ001・002は西半部が未調査であるが，両者の桁行総長は一致するものと予想され，9間と14間に復原できる。周辺の地形を考慮すれば，ＳＢ001・002の西方にＳＢ003・004と同様な建物を想定することもさほど困難でない。もしそうであれば，ＳＢ001を中心とした東西対称の建物配置となる。このような建物配置や，飛鳥板蓋宮伝承地や宮滝遺跡と同様に建物間に石敷広場を設けること，瓦を伴わないことなどから，本遺跡はコンパクトにまとめられた宮殿跡の色彩が濃厚である。その年代は出土遺物によって7世紀中頃に造営され，7世紀末前後に廃絶したものと推定される。検出遺構に重複はみられず，建替えなどは行なわれないまま比較的短期間のうちにその役割を終えたらしい。廃絶の事情は明らかでないが，敷石上の炭化物の堆積からみれば，罹災した可能性も考えられる。

造営尺については1尺≒0.2933mとすると，建物総長や柱間寸法に完数が得られ，最も矛盾が少ない。古代の造営尺については一般的に言って1尺は0.295mより大きい数値を示すが，本遺跡の造営尺は藤原宮造営尺（1尺=0.294m）や前期難波宮造営尺（1尺=0.292m）に近く注目される。

また，今回の調査では，一連の柱掘形に複数の柱を立てるという特異な工法を認めることができた。この種の類例として前期難波宮跡の内裏東方にある門（第20次調査のＳＢ2001）がある。本遺跡と年代が近く，興味深い問題といえよう。

以上のように7世紀中頃に造営された宮殿跡とすると，当然文献にみられる「宮」との関連が問題になるが，現状では「飛鳥河辺行宮」をその候補の一つとして指摘するにとどめ，今後の検討をまちたい。

（川越　俊一・岩本　正二）

第9図　稲淵川西遺跡遺構模式図

# 飛鳥・白鳳在銘金銅仏の調査

飛　鳥　資　料　館

51年度秋期特別展示「飛鳥・白鳳の在銘金銅仏」にともなう調査のうち，法隆寺蔵の戊子の年記をもつ釈迦如来及脇侍像に関する一知見と各銘文の鏑刻技法上気づいた点をのべる。

**戊子銘像の調査**　像は光背裏に戊子年の銘があり，推古36年（628）と推定され，大きな蓮弁形挙身光を負う一光三尊式の銅造釈迦三尊像（総高49.7㎝）で，いま右脇侍を失い，近世の木造漆箔の台座にのっている。法隆寺金堂釈迦三尊とよく似た様式をもち，止利派の一基準作となっている（第1図）。しかし，次にのべる諸点によって，この脇侍と戊子銘光背が本来一具としてよいかに疑いがもたれてきている。光背は下辺から4.4㎝の高さに中尊用の枘穴があり，下辺左右にほぼ同高の位置に両脇侍用の縦長長方形の枘穴が各々2個並んで穿たれている。左右の内側の穴の高さはほぼ同じであり，向って左に並ぶ2個の穴もまた同じ高さであるが，右の現在脇侍のある方は外側の穴が低い。また左右の内側と外側の穴は大きさと形をやや異にする。中尊の枘穴の周囲にはタガネでたたいた痕があるが，同様の痕が左右の内側の枘穴にも認められ，外側の穴はどちらも切口が雑である。このことから中尊と左右内側の枘穴は同時期のもの，すなわち当初の枘穴と考えられる。一方脇侍像には背面腰部と後頭部に丸穴付の縦位置の枘がある。背面の枘は現在光背の外側の穴に差込まれており，この枘は内側の旧穴には入らない。後頭の枘は法隆寺金堂釈迦三尊と同じく，脇侍のみの頭光がかつてあったと考えられる。また，現存脇侍の右側下端の天衣先端部が上下2.2㎝，左右0.4㎝にタガネによって垂直に切断されていることが注目されるが，この部分は現在の中尊の台座に接している。

以上にのべた脇侍の天衣が削られている点および脇侍用の枘穴が平行に2個づつあり，かつ内側の穴には入らない点よりみて，現存の脇侍が当初から戊子年銘光背と一具であったかに疑いがもたれてきたのであるが，このたびの調査で戊子銘光背と現存脇侍が本来一具であり当初は旧穴に頭後の枘が留められて

第1図　戊子銘釈迦如来及脇侍像

第2図　復原位置

あったであろうとの知見を得た。脇侍の背面枘が旧穴に入らないことを確認するとともに新たに頭後の枘が旧穴にぴたりと入ることを確めたのである（第3図）。そこで脇侍をその当初の位置に取付けた場合，脇侍像の底部と中尊像の懸裳の先端の高さがほぼ一致し，後頭部と光背との間に脇侍像の頭光一枚が丁度入る程の間隙が残されることも確認した。またその時，脇侍の背面枘は上面が光背下辺に接している。これは現光背は脇侍背枘を受ける枘穴のあった部分を切取っているとみられたのである。いま光背の底辺は中央に幅1.45cm，出1.3cmの枘（現在は後方に折り曲られている）を造り出し，その左右が水平になっているが，おそらく当初は台座天板の幅を除いた両側部が当初の台座下框の上面にまで伸びており，脇侍背枘用の穴はこの部分に穿たれていたと考えられる。

第3図　脇侍と光背側面

ところで台座は近世の後補である。脇侍の天衣の先が切られている点に関し，後補の木造台座のために本来の金銅像を切断するということは考えられず，これは現台座の新造以前にすでに行なわれていたと見なすことができ，また現台座の損傷を防ぐために銅製の光背に別穴をあけたとも考えにくい。さらに右脇侍台座には脇侍像の乗っていた痕跡が認められない。現在の台座新補時にはすでに外側の枘穴および光背下辺両側の切断が行なわれており，右脇侍と頭光も亡失していたと思われる。なお外側の穴の切断面に金が認められ，その点から鍍金以前の仕事とみなして当初より現在の姿で一具のものであったとする見解が出されている。しかし金が認められるのは切断した際の表面のくいこみ或いは後鍍金ともみることができよう。

以上から現存の光背と脇侍とはもともと一具で，当初は脇侍の位置が現状より低い位置にあり（第2図），その後（少くとも台座新補以前），おそらく法隆寺金堂釈迦三尊のプロポーションにならって現在の位置に置きかえられたものであろう。なお脇侍の天衣下端の切断は鋳造時の台座との関連によるものと考えられる。ここに想定された当初の形（第2図）の作例が他にあるかという問題などを含め，なお今後の検討を要する。なお本像の調査には奈良国立博物館主任研究官阪田宗彦氏のご協力を得た。

**銘文の調査**　銘文については展示されなかった法隆寺金堂釈迦三尊，同薬師如来坐像を含めて文字の拡大写真を作成した。その写真と調査結果に基づく釈文は別に公刊した『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』（銘文篇）に譲り，ここでは主に鐫刻技法の問題について述べる（口絵）。

鐫刻技法については各銘文に次のような特徴がある。（1）甲寅年光背銘　筆画の起点にメクレが著しい。これは筆画と逆方向にタガネを入れた結果，その終点部分にメクレが生じたためである。鐫刻内に鍍金はない。（2）丙寅年菩薩半跏像銘　メクレは全くなくタガネを用いたあとを研磨し，その後に鍍金する。鐫刻内に鍍金がある。（3）戊子年釈迦・脇侍像光背銘　メクレはなく鐫刻内に鍍金がある。ただ本光背は銅板製で，鋳銅製品の場合とやや事情が異なるか

もしれない。銘文の書風は(12)に近い。(4)辛亥年観音像銘　メクレはないがタガネを抜く時の線が残っており，それとは別に文字の刻線の周辺に筆画とほぼ平行するような細線が多く認められる。この細線は二次的なキズとも解されるが，鍍金前につけられていることから，むしろ文字を刻む前にアタリとしてつけたものと考えられる。鏨刻内に鍍金がある。(5)戊午年光背銘　本光背は火中による荒れが甚しく技法的な観察は困難である。裏面に金が一，二カ所残るが，全面に鍍金があったかどうかは疑問である。(6)野中寺弥勒半跏像銘　メクレが文字の輪郭の全部に亘って認められる。また，タガネを抜いたあとが細線として筆画の末端に残る。その残存状況からすると，タガネは筆画と大体同じ方向に入れられているようである。鏨刻内に鍍金はない。(7)法華説相図銘　メクレはなく鍍金も認められないが，火中したため表面が荒れており，当初からなかったか否かは不明である。(8)鰐淵寺観音像銘　火中したためか(5)(7)などと同様，技法が明確でない。メクレはもともと存在せず，刻銘後研磨されていた可能性が強い。(9)甲午年銅板銘　(6)と同様に，文字の輪郭全体にメクレの残存が顕著である。タガネを抜くときの線はない。また，文字の中に鍍金があって刻銘後の鍍金である。(10)大分長谷寺観音像銘　この像も火中していて技法上の観察は困難であるが，「背」等の文字にはメクレらしいものが残り，その状態からみて(9)と同様の形であった可能性がある。鍍金は文字の周辺に散見するが，刻銘との先後は不明である。(11)阿弥陀三尊像台座銘　メクレは全く認められず，鍍金も刻銘中に入っており，研磨の上鍍金されていることが明らかである。(12)法隆寺釈迦三尊光背銘　顕著なメクレはないが，文字の角などにごくわずかのメクレが認められる。鍍金について充分な確認はできなかったが，現状では刻銘中にはないようにみえる。(13)法隆寺薬師如来坐像　筆画の始めや終わり，角の部分に顕著なメクレがある。これも(1)と同様タガネを入れた終点や角の部分にメクレを生じたものであろう。鍍金は明らかでないが，刻銘中に入っていないとみられる。

各銘文の技法的な特色は以上の通りである。現在伝統的技法によっている鋳金家のタガネ技法では，文字を鏨刻する場合削りタガネと打ちタガネの二種類が使用される。削りタガネの場合は地金を削るように寝かせて打つのでタガネ打の速度が落ちる場所にメクレができやすい。一方打ちタガネではタガネを立てて地金を押開くように打つので文字の輪郭全体にメクレが生じることが多い。また，削りタガネの場合，一本の線は一気に刻み，線の肥瘦はタガネの角度（上下，左右方向）で調節する。以上のような技法がそのまま古代の作例にあてはまるかどうかは検討を要するが，遺品を調査した結果からは古代の技法とさほど差はないように思われるので，一応これを上記の作例にあてはめ分類してみると，(1)～(4)，(7)(8)(11)～(13)などは削りタガネ，(9)は打ちタガネによる刻銘と考えられる。(6)は削りタガネの上に打ちタガネの技法を併用している可能性が強い。なお，(3)(12)(13)を比較すると，(3)(12)は鏨刻技法や書風の上で親近性が強いのに対し，(13)は全く異質である。これは製作年代の考察上注意されてよかろう。

（星山　晋也・東野　治之）

# 遺跡探査法の開発

埋蔵文化財センター

地下にある遺跡を発掘調査によらずに，遺構の種類や規模などの概要を知るため，航空写真や物理器機を利用し，探査する方法はかなり知られているが，現状ではいまだ遺跡の探査方法として定着するまでには至っておらず，利用されることも決して多くない。当センターでは，これら遺跡探査法を確立するための調査研究を続けている。航空写真判読法については，その一部を既に昨年度の年報に紹介しており，ここでは物理器機を利用する方法について，これまで行なった実験と調査成果の一部を報告することにする。

物理器機による探査では，大地比抵抗測定と地磁気変動測定の二つの方法を試みている。

大地比抵抗測定法は，一般に「電探」として知られる方法で，地中に直接電流を通じ，土壌に含まれる水分の量の違いによって生じる電気抵抗の差を調べ，土質やその厚さを知るものである。この方法は当研究所では，はやくから実施し，その成果の一部は学報ですでに報告しているが，近年測定器が改良されたのを機会に，新たな器機を購入して実験を進めている。この測定器（シントレックス，ＲＳＰ－６型）も，測定原理は従来のものと基本的に同じであるが，測定点間毎の地中の自然電位差も測ることができる。電位差も土質の違いによって生じるわけだから，地中の電気抵抗値と比較照合すれば，より詳細な土壌内容をつかめることになる。しかしながら，この電気抵抗を測定する方法は，地面が乾燥していたり，湿潤な場合は，電気の流れが不安定になるため，適用範囲が限られるうらみがある。調査例は多くないが，古墳の周濠を探査した場合でみると，調査対象の水田が細分されていたり，水田毎の含水率に差があると測定値に影響があらわれた。その結果データ分析はむつかしくなり，周濠の有無は判別できても，土層を詳細に区分することは困難であった。今後は，このような現地の条件に左右されない測定法を開発していく必要があると考えている。

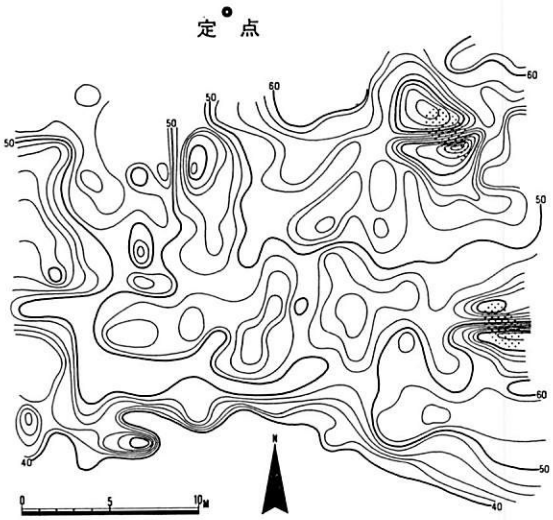
物理器機を応用したもう一つの探査法は，地磁気変動測定である。これは，地磁気の局地的な異状を検知して，地下遺構を探査する方法である。例えば，窯跡や炉跡のように，一度熱を受けた遺跡は熱残留磁気をもち，その周囲の磁場に影響を与えていることはよく知られている。しかし，これらの他でも溝や土坑，柱穴等の遺構は，埋土の土質と周囲の土質とが異るため，土壌帯磁率に差が生じている。磁場に与える影響がわずかでも，これを測定できれば，各種の遺跡を探査できるのである。ただし，この方法では，遺跡以外の強い磁気を生む電車線路，自動車道，人家，高圧送電線等によるノイズが常に問題となる。これらのノイズ発生源の付近では，地磁気は不規則に変動して，そのノイズの量が大きくなると，遺跡，遺構による磁気異常は消されてしまい，検出が困難になる。したがって，このようなノイズに影響されずに，測定できる手法を開発するのが重要な課題であった。そこで，ノイズ除去法を見つけるために，次のような実験を行ない，新たな探査法を見いだす手がかりを得た。

実験を行なったのは，三重県・水池遺跡で，土師器を焼いた6×2m前後の焼成坑群と掘立柱建物が発見された遺跡である。土師器焼成坑は須恵器や瓦の窯跡に比べると規模は小さく，焼け方も弱い。また遺跡の場所は電車線路から400m程度しか離れておらず，かなりのノイズが予想され，従来の測定法では遺構探査が困難と思われる条件にあった。

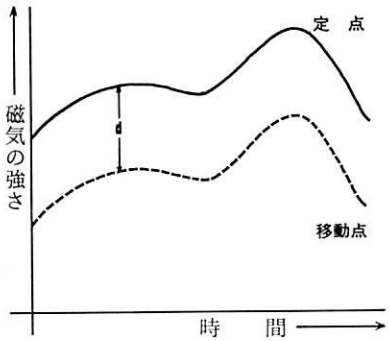
測定には2台の磁力計を使用した。1台は固定点に置き，他は調査区内を移動して各測定点毎の磁気の強さを測る。2台は同時に作動させ，定点と移動点との磁気測定値の差を読みとり，この差を測定点の磁気の強さとするのである。この方法で測定したところ，調査中には80ガンマに及ぶ磁気の不規則な変動があったにもかかわらず，測定範囲内では定点と移動点の受けるノイズの影響は同時で，かつその大きさもほぼ同じであることがわかった。つまり，定点と移動点との磁力差は一定であるが，両者の測定値は等量変動する。また移動点毎の測定は3回実施したが，各点における測定誤差も±2ガンマ以内であることを確かめている。このように，わずか数ガンマの磁力差が測定できることで，微細な磁気変動としてしか表われない遺構に対しても，磁力計が適用できる見通しを得たと考えている。

しかし以上のようなノイズ除去法による探査を実用化するには，なお次のような問題が残されている。例えば測定面積が広範で数百mにわたるような場合には，近くにノイズ源があれば，調査区域内の部分によって受けるノイズの量が異なり，定点と移動点間の測定値差が不安定になることが予想されるのである。この対応策は現在実験中であるが，ノイズ源に余りにも接近すると（電車線路に100m以内），測定は不能であった。今後はノイズが同時かつ同量と考えてよい範囲を確認して，広域遺跡における測定技法を開発してゆく必要がある。またこれとは別に，広範な遺跡を探査して，測定点が多数になった場合のデータ記録方法と，その分析処理法についても検討しなければならない。

（西村　康・岩本　圭輔）




水池遺跡の探査結果




定点と移動点における磁器変動

# 埋蔵文化財関係用語の収集と整理

埋蔵文化財センター

昭和50年度中の全国の発掘調査は2万4千件をうわまわり，調査報告書類の数だけでも700冊を越えるというように，発掘調査件数の急激な増加にともない，埋蔵文化財関係の情報資料は膨大な量となって，その種類についてみても様々な形をとるようになってきた。調査報告書類，雑誌論文，航空写真，地図あるいは図面等の資料の全貌は，もはや誰にも把握しきれない。このため現在，研究，文化財保護の仕事にたずさわる者が，過去の資料の蓄積を適切に選択して利用するのは，大変に難かしいという状況にあり，将来この傾向がさらに甚しくなることは目にみえている。

埋蔵文化財センターは，昭和51年度から，埋蔵文化財関係の情報資料の整理，編集，検索システムの確立を目指して，コンピューターの利用を前提とする研究を開始した。これは，以前からすすめられている，資料の収集および，調査報告書，雑誌論文等のマイクロフイルム化などの仕事とともに，当センターの重要な将来事業計画の一環を担うもので，全国の研究，遺跡保護行政機関が主な対象となる各種資料の共同利用組織を実現することを目的としている。

いかなる形であれ，コンピューターを利用した資料の整理，検索は，考古学関係の学術用語が主体となった単語の群を媒体として行なうのが，最も自然かつ有効な形であることはいうまでもない。たとえば情報資料全体を遺跡を核として整理，編集し，互に関連づけた上で「縄文時代中期」，「墳墓」，「土器」，「～県」などのようなキイワードを与えて，これを満足する資料を抜き出させる，というような資料検索のシステムも想像できよう。ここで，学問の進捗段階に従っての学術用語の変遷，縄文時代，弥生時代あるいは仏教関係など対象分野による傾向のちがい，用語の内包する概念の変化，特定の語の消長等に関して，客観的な資料にもとづく検討が，まず必要となる。この作業は，それ自体でも学史的な意味をもちうるかも知れないが，なにより資料活用のシステムの基本的な構造を考え，検索のための媒体となる用語リストを作り出す上で，不可欠といっていい。

本年度はこの仕事の第一歩として，世界考古学大系（日本）のⅠ～Ⅳ巻を資料に選び，この中に含まれる65万字すべてをコンピューターに入れ，約3万種類の用語を旧石器，縄文，弥生などの時代区分ごとに，出現頻度とともに抽出した。これについて考古学の学術用語，関連諸学の学術用語，重要な一般語，それぞれから派生する語，その他の用語という分類を行なった上で，現在構造分析，用語の体係づけの作業を続けている。コンピューターによる用語抽出のプログラムについても，いくつかの問題点が明らかになった。次年度以降はこれを改良した上で，さらに多くの考古学関係の文献資料について同様の作業をすすめる。表題の研究は，当面充分な量の資料についての検討と整理ののちに，作業のとりまとめとして考古学関係用語シソーラスを作成することを目標に置いている。

（岩本　圭輔）

# 在外研修成果報告

## —S・ヘディン，A・スタイン収集の木簡調査—

1976年10月16日から12月15日までの2ケ月間文部省在外研修により，ヨーロッパを訪れた。ストックホルム民族学博物館と大英図書館で表記の木簡の調査を行なったほか，両国をふくむヨーロッパ9ケ国をめぐり，博物館，美術館，古城などの遺跡，ロンドン・シティの発掘現場をたずねる機会をもった。以下木簡の調査を中心に報告する。

ストックホルム民族博では，同館の東洋部長ボ・ソムマストロム博士のお世話で，ヘディン収集の晋代の楼蘭簡70点余を調査することができた。同館は目下新館建設中で郊外のビルに収蔵品とともに仮住いであったから，ものをだしてもらうのは容易でなく，一部とはいえ実物を観察する機会をあたえていただいたのは，博士の特別の計らいによる。ヘディンの収集品は，彼自身のぼう大な調査記録のほか，動植鉱物，天候・地質の記録，地図など多方面におよび，なかでも彼の手による現地の写真のごとき克明なスケッチは，興味深いものであった。

木簡はボール紙の特製の箱に収められており，3箱約70点をみせてもらった。紙木併用期の楼蘭簡は，日本の木簡と書体や形態等も類似していて親しみやすかった。表裏両面をつかって一簡で完結する内容である。ただ削屑が部厚く荒削りのもので，日本のように薄手でないのが印象的であった。なおソムマストロム博士によると，この楼蘭簡は，正確には民族博ではなくスウェーデン王立アカデミーの一機関であるスエン・ヘディン財団に属し，近い将来いずれかの機関に移される可能性がある。しかしそうなっても，民族博を通してコンラディのプレート番号を示すことで，容易に木簡をみることができるとのことだった。

大英図書館のスタイン収集の木・竹簡（大部分は木簡）は，シャバンヌ（第1次収集品），マスペロ（第3次収集品）の釈読本に収載されているものを，はるかに超える分量が収蔵されている。聞くところによると，書庫には観音開きのキャビネットが三つあって，それぞれに幅45㎝，奥行60㎝ほどの引出しが20個づつあって，引出し1個には木簡40点ほどが，布テープでおさえられて収納されている。3週間の調査では⅓程度をみることでおわらざるをえなかった。

敦煌簡（漢），楼蘭簡（晋），ニヤ簡（晋），バラワステ簡（唐）を，とくに形態上の特徴について調べた。敦煌簡は，黒みがかった褐色の材（檉柳 tamarisk か）が多い。長さは23㎝強（漢代の1尺），35㎝（1尺5寸）のものが多く，幅は1.1～1.2㎝厚さは2～3㎜のものが大部分を占める。径1㎝強の細い木を，心で2片に割り，木心側を裏面にして，文字を書く面は，樹皮側の丸味をていねいに削ってつくるのである。したがって木簡の両側に樹皮ののこっているものが相当数あった。また上端の木口を表側から裏側に斜めに削り落すつり方や，文字面をなにものかで，こすって光らせた形跡のあるものなどが多くのものに認められた。楼蘭，ニヤ，バラワステのものは，敦煌簡のように，ある一定の寸法につくることも少なくなり，表裏両面に書くものが多くなるなど，日本簡に近づいてくるさまが明瞭にみてとれた。　（狩野　久）

# 公開講演会要旨

**平城宮の井戸**　発掘調査で知られた平城宮の井戸は約20基をかぞえる。井籠組構造の井戸枠が多いが，他に縦板組や曲物を用いるものもある。遺跡内における井戸の位置関係をみると，内裏のような大きな区画に伴う場合と一つの官衙区域のように比較的小さな区画に伴う場合とがある。官衙の井戸は，また正殿の正面や区画の中央に位置するものと，正殿の横や後あるいは区間の隅に位置するものに区別できる。前者では方1.8m以上の大型の井戸に限られ，官衙比定からすると官衙の業務と深く結びついていたようだ。後者では，方1.5mを最高に0.9mまでの各種があり，官衙の規模などと関係する。詳細は月刊文化財1976年4月号参照。（黒崎　直）

**古代の測量術**　奈良時代およびそれ以前に行なわれた測量の技術を，文献や発掘成果から類推しさらに実験を加え復原的に考察した。具体的な方法については，周髀算経，九章算経に記載された方法が実行されたことは疑いなく，円を描く為のコンパス，直角を出す3：4：5の原理なの実用化も行われていたことが推定される。測量に必要な道具は，上記のほかに表（8尺の棒）と間縄があり，これで，方位を決め地割を施していった。古墳・水路などの工事には，水平を出す道具もあったであろうが，それがどのようなものか決定的なことは言えない。図を作成するには，方眼を描いて，見取りをオフセットしていく方法が用いられている。条里の地割のあるところは，地割と図の方眼が一致し，かなり精度のよいものになっている。（木全敬蔵）

**古代寺院の基壇**　日本の瓦積基壇を，構造，成立時期，分布，どの建物に用いられているかなどについて検討してみると，成立の時期が7世紀後半初めに集中し，その契機が極めて一元的な要素をもつ。7世紀後半の例はすべて主要な建物に用いられ構造も企画的であるが，8世紀になると，周辺建物や補修に用いられる例が多くなる。これは，切石積基壇が段階的に発展し8世紀に入ると壇正積基壇として完成され，国分寺造営を契機に拡がるのと対照的である。このことは基壇構築技術の伝播の背景にあるものを示唆している。瓦積基壇の成立についていえば，大津京の官寺である崇福寺や南滋賀廃寺の造営を契機に意図的に採用されたにもかかわらず，その主流としての位置が比較的短命であったことを示すのではなかろうか。（田辺征夫）

**平城京と宮の園池**　園池の水源は湧泉については山麓の一部に限られ大部分が河川によるため園池および園池を持つ邸宅が河川沿いに集中したものと考えられる。園池の形態は，山麓部については侵食谷，湿地を利用する形で，文献にみられる堤（塘）に関係するもので，平地部においては谷筋で旧河床や濠を利用する自然順応のものと，尾根筋で池を穿ものとの2つの形態がみられる。発掘事例でみられるように平地部の園池は，水源が浅い谷筋をもつ河川のため，多くの流量が期待できず，水深30cm未満の浅い池となる。また園池の意匠としては，岸辺が蛇行する形に州浜状に玉石や礫をゆるい勾配で敷きつめる形や，庭石の種類，配置などに共通点を持ち，建物が近接していることから観賞・遊宴に供用されたものと考えられる。（田中哲雄）

# 調 査 研 究 彙 報

## 共 同 研 究

**護国寺本諸寺縁起集の研究**　美術工芸・建築・歴史・考古の各部門の協力によって，その逐語的かつ総合的な研究をしようとするものである。昭和51年度は「勝尾寺縁起」の半ばより「法隆寺」項の始めまでの検討を行なった。

**海住山寺文化財の総合調査**　美術工芸研究室と歴史研究室との協同調査。昭和49年度調査の後をうけて実施し，今年度の調査によりいちおうその全調査を完了した。（本文ならびに『海住山寺文化財総合調査目録』参照）

## 美 術 工 芸 研 究 室

**日本美術院彫刻等修理記録の刊行**（特別研究）　本年度は同書のⅢとして奈良県下の東大寺，興福寺等の彫刻等74件について資料の整理を行ない，図解360頁，解説160頁，写真117頁にわたる修理記録を公刊した。なお本巻の刊行に際し興福寺木造千手観音立像（旧食堂本尊）などの調査を行なった。

**東大寺所蔵絵画調査**　本年度は仏画，肖像画が中心で，すでに調査件数は100を超えた。時代的には鎌倉時代から江戸時代までのものがほとんどで，絹本著色十一面観音来迎図1幅（鎌倉時代），絹本著色釈迦三尊及十六羅漢図1幅（南北朝時代）などの作品が注目された。

**奈良県及び周辺の文化財調査**　今まで知られているが詳細な調査が行なわれていないもの，或は未調査のものが中心で，奈良県法輪寺，法起寺，新薬師寺の彫刻，大阪府延命寺の絵画その他の調査を行なった。また文化庁の頭塔石仏の調査に協力した。

**その他の調査**　春に奈良国立博物館で開催された「平安・鎌倉の金銅仏」展，秋に飛鳥資料館で開催された「飛鳥・白鳳の在銘金銅仏」展に出品された作品の調査を行ない，幾つかの新知見を得た。

## 建 造 物 研 究 室

**奈良県民家緊急調査**　奈良県教育委員会に協力して1966年に次いで2回目の調査。前回はおもに18世紀中頃までの古い民家に重点がおかれたが，今回は19世紀までも含めて県内民家の変遷をたどることを主目的とした。（本文参照）1976年度。（上野・中村・松本）

**当麻寺の調査**　東西両塔および金堂・講堂など，おもに昭和初年以前に修理された建造物の調査。明治末年作製の実測図や部材に残る痕跡などにより，修理前と現状との違いをもとに復原的調査を行なった。（本文参照）7月。（岡田・細見・宮本・上野・中村・松本・清水・福田）

**談山神社社殿の調査**　本殿を中心とする境内諸社殿の調査。奈良県教育委員会と協同。（本文参照）7月。（岡田・宮沢・細見・中村・福田）

**神戸北野・山本地区の補足調査**　前年度神戸市に協力して行なった伝統的建造物群調査の補足。9月。（宮沢・宮本・中村・清水）

**五條町並の補足調査**　前年度五條市に協力して行なった伝統的建造物群調査の補足。その成果は『学報30冊』として刊行した。

**般若寺楼門の調査**　叡尊・良恵による文永年間の復興時に建立された門であるが，上層組物はあたかも箱造りの本体に，表面だけ組付けたような特異な技法でつくられている。中世における大工の意匠重視のあらわれが認められ興味ぶかい。10月（工藤・松本・清水）

**円成寺楼門と庭園の調査**　現在上層は大正4年の解体修理時に整備されているが，応仁2年建立以来，尾垂木より上方が未完成のまま，仮葺きの屋根に覆われて伝えられてきたことが明らかになった。なお，大正修理の際発見された墨書の所在は現在不明である。庭園は8月に行なわれた整備後の状態を実測した。10月（工藤・宮本・高瀬・伊東）

**桂離宮建築調査**　桂離宮御殿の解体修理に伴って，諸建物の造営当初の平面，後世の変更箇所，ならびにそれら技法の調査について昨年度に引続き宮内庁に協力した。1976年度。（鈴木・工藤）

**識名園庭園実測調査**　識名園環境整備委員会よりの依頼。庭園修復前の現況地形実測調査および石垣・育徳泉・橋などの写真測量を行なった。（本文参照）11月～12月。（牛川・木全・伊東・田中・渡辺・高瀬）

**東大寺修二会関係建物の調査**　寛文9年再建の二月堂を根本堂にして参籠所・閼伽井屋など10棟におよぶ建造物群によって構成され，奈良時代以来連綿と続けられている修二会の行事の際にはそれぞれの建物がより有機的に結ばれる。なかでは明治3年完成の茶所，常宿所が最も新しく，現在の景観はその時よりすでに100年の歴史をもっている。1月。（細見・上野・清水・福田）

**歴史研究室**

**東大寺文書調査**　文化庁よりの委嘱によるもので，1974年度からの継続調査。未成巻文書第1部第24（雑荘）721号より，第3部第4（請文）22号までの調査を行なった。また東京大学文学部所蔵東大寺文書の調査ならびに写真撮影を実施した。

**西大寺典籍古文書調査**　従来よりの調査の継続。6月，2月。

**興福寺典籍古文書調査**　文化庁実施の春日版板木調査への協力（11月）の他に，一時中断していた典籍古文書調査を再開実施し，計8函の調査を了えた。10月。

**仁和寺典籍古文書調査**　笈ならびに御経蔵第150函所収文書の調査ならびに写真撮影，および塔中蔵階下収納典籍類第170～180・183函の調査を行なった。3月。

**第2回木簡研究集会**　1977年1月11・12日の両日，平城宮跡発掘調査部資料館会議室において開催された。前回の研究集会により木簡の調査研究の実状や，今後の課題が研究者の共通認識となったが，今回は，この成果を継承し，なお残された諸問題をより解明するために行なわれたものである。参会者は昨年度より若干ふえて47名の大規模な研究集会となった。

第1日目は，木簡をめぐる二三の問題（上智大学　弥永貞三氏），貢進物荷札について（奈文研　今泉隆雄）第2日目は，漢簡研究の現状（藤枝晃氏），文書木簡に関する諸問題（奈文研　横田拓

実),飛鳥京跡第51次発掘調査出土の木簡について（京都大学　岸俊男氏，橿原考古研　菅谷文則氏）の5本の報告を用意した。

弥永報告は，木簡の縦横比を計数的に提示し，日本簡と中国簡の形態の比較を考察したもの，今泉報告は，貢進物荷札の書式，書風から木簡がどの段階で書かれたかを問題としたもの，藤枝報告は，永年にわたる氏の漢簡研究について拠るべき資料を中心に要約したもの，横田報告は，文書木簡の機能，性格を文書木簡の分類を通して解明しようとしたもの，岸・菅谷報告は，注目の飛鳥京跡出土の木簡について出土状況，伴出遺物，木簡の形態，内容などを詳細に報告したものである。

以上の報告にもとづいて，熱心な質疑討論が行なわれた。研究集会も第2回目を迎えて，ようやく日本における木簡学も研究の第一歩を踏み出したと言えよう。

**その他の調査**

法華寺　3月。　醍醐寺　8月。　高山寺　4・7・12月。　石山寺　7・12月。　大覚寺　4・8月，1月。　東寺観智院聖教調査　5・9月。　般若寺　11月。

**平城宮跡発掘調査部**

**法隆寺の発掘**　現在の寺務所の西側に新たに寺務所を建設するための事前調査を奈良県教育委員と協力して実施した。西園院と地蔵院の両子院にわたる地域であったが，後世の攪乱が著しく両者の境界を示すような関連遺構は検出できなかった。おもな遺構として大湯屋東南を限るかと考えられる溝を検出するにとどまった。9月～12月。（森・宮本・岡本・高瀬・安田・巽）

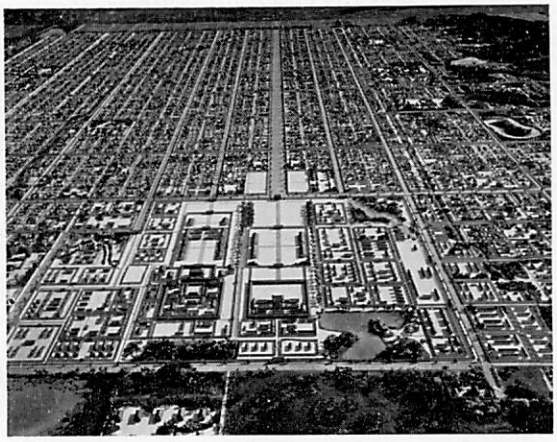
**伯耆国庁の発掘**　国庁の範囲を確認するための第4次調査。内郭は2度大改作がおこなわれており，Ⅱ期には内郭（東西距離 81m，南北距離 91m）および外郭（東西距離 273m，さらに東に51mの拡張区がある）を濠で区画していることを明らかにした。倉吉市教育委員会。10月～11月。（佐藤・菅原・山中）

**東海地方出土瓦の調査**　平安時代後期の瓦を中心として名古屋市教育委員会，小牧市教育委員会，大府市教育委員会，東海市平州記念館，名古屋大学等所蔵の東海地方出土瓦を調査した。安楽寿院への供給など，多くの知見を得た。11月。（森・岡本・安田・巽）

**金属製遺物の非破壊的方法による材質分析の原理的検討**（科研特定研究・代表者樋口隆康　京都大学）主として当研究所設置の螢光X線分析装置を利用する。非破壊的な方法による材質分析なので遺物の表面の分析をすることになり，したがって殆んどの場合，表面のサビを分析することになる。本研究は，そのような分析値を考古学的研究に利用できる方法を検討し，開拓しようとするもでのある。初年度の昭和51年度は，異なる分析値のクロスチェックを主として行なった。（佐原・沢田・山本・秋山）

**美濃国分寺跡環境整備**　大垣市の依頼により，発掘調査で明らかになった築地（南面），回廊（南・西）および，回廊内の暗渠造成工事の実施計画と指導を行なった。1976年4月～77年3月。（牛川・田中）

**平城京の復原模型**　奈良市の依頼によって平城京復原模型1/1000の設計を実施し，設計に当っては平城京模型調査委員会（池田源太委員長，岸俊夫，木村博一，横山浩一，鈴木嘉吉，狩野久，高山遅治）の指導を受けた。



平城京復原模型

模型の規模は東西8.4m，南北6.3m，模型の含む範囲は，東は若草山山頂，西はあやめ池の東，南は大和郡山市下三橋，北は神功皇后陵付近までである。平城宮，条坊および官衙，寺院（26箇寺），宅地（約7,200戸），古墳（13基），河川，条里，京外道路，集落，樹木などは発掘調査の成果と文献資料と遺存地割，地名などに基づいて復原し，地形や個々の建物（約26,000棟）は高さを実際の2割増しにして設計した。

模型は昭和52年2月に完成し，奈良市庁舎1階展示ホールに設置されている。なお，『平城京復原模型記録』が奈良市により刊行された。（宮本・今泉）

**平城宮1/600復原模型**　当模型は昭和39年度に製作されたが，その後の発掘調査の結果，宮城は東に拡張していることが明らかになったため，拡張区の復原模型を増設した。（宮本）

**平城宮跡保存の先覚者たち—北浦定政を中心として—展**　1976年10月23日から11月7日まで，平城宮跡資料館において開催した。

北浦定政（1817～1871）は江戸時代の末に平城京や大和条里の研究を行なった先覚者であり，また，陵墓の調査や修復にも尽力した人物である。この記念展示は，彼の生誕160年を機に「北浦定政顕彰会」が行なった顕彰事業の一つで，当研究所が顕彰会と共催したものである。

展覧にあたっては，平城宮跡保存の先覚者たちの名のもとに，北浦定政を中心とし，明治30年代にはじまる関野貞（1867～1935），喜田貞吉（1871～1939）らの都城制研究，この研究をうけて明治末年から大正にかけて地元の棚田嘉十郎（1860～1921），溝辺文四郎（1852～1918）らの宮跡の顕彰，保存運動などに功績のあった人々の業績や遺品などを蒐集展示した。この展示が先覚者たちの業績を改めて認識し，また今後の平城宮跡をはじめ都城制研究の再検討の機会となったことは大きな収穫であった。また，北浦家をはじめ関係ご遺族の方々から貴重な資料類を拝借・展示すると同時に，これらをすべてマイクロ撮影することができた。

平城宮跡発掘調査部では，記念展示パンフレット「平城宮跡保存の先覚者たち—北浦定政を中心として—」（A4判，32頁）を作成した。本展覧会の入場者は平城宮跡資料館特別公開入場者ともあわせて9,785名の多数にのぼった。なお，10月23日9時30分から，ご遺族はじめ関係者参列のもとに，会場の肖像の前で献花式を行ないオープンした。

**飛鳥資料館**

**飛鳥・白鳳の在銘金銅仏展**　9月23日から11月23日までの二ケ月間にわたり，本年度の特別展示として開催した。国宝1，重要文化財8件を含む11件の作品が展示され，これは飛鳥・白鳳時代の在銘金銅仏13件の大半に当る。彫刻史・古代史の専門家は勿論のこと一般の人々からも好評であった。本展示に因んで町田甲一（名古屋大学教授），田辺三郎助（文化庁主任文化財調査官）の両氏による特別講演会を催した。

また，展覧会のカタログを兼ねて図録『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』を刊行し，あわせて展示された11件の作品に法隆寺金銅釈迦三尊像・薬師如来坐像（各国宝）を加え，飛鳥・白鳳の在銘金銅仏の拡大写真集『銘文篇』を刊行した。

**古代墓誌の調査**　52年度特別展示「日本古代の墓誌」展の準備に伴う調査，文禰麻呂墓誌（国宝），伊福吉部徳足骨蔵器（重文），小治田安万侶墓誌（重文），美努岡万連墓誌（重文），宇治宿禰墓誌など東京国立博物館保管の日本上代の墓誌五点について調査した。2月。

**石造品の模造作製**　山田寺の塔心礎，高取城跡の猿石，高取町光永寺の人頭石の模造を作製し，屋外に展示した。模造の方法は吉備姫王墓の猿石と同様（1976年度年報参照）にしたが，更に混入する石の量を増すなどして堅固にし，風化防止のための工夫をした。

なお人頭石は奈良県文化財保存課の県下石造品調査に関連して発見されたもので，現在光永寺客殿の庭に置かれ手洗鉢として使われている。自然石（花崗岩）の凹凸を利用して壮年の頭部を彫刻している。

**埋蔵文化財センター**

**能代大館遺跡測量図化**　能代市教育委員会は，野代営に擬定される大館遺跡の史跡指定を行なう為の調査の一環として，写真測量による地形図図化を行なった。河岸段丘の先端に土塁・堀・櫓跡などがあり，丹念に補測を行ない，それらを明瞭に表現するよう図化の指導・監督にあたった。能代市教育委員会。6月。（木全・田辺）

**熊野磨崖仏の写真測量**　大分県豊後高田市田染（タシブ）にある磨崖仏，大日如来（国宝，高さ7m）と不動明王（重文，高さ9m）の調査。大日如来の保存修理工事にさきだって，写真測量により現状記録をし，あわせて二像が彫られている岩石の経年移動量を知るための基準点埋設，及び計測。豊後高田市教育委員会。7月。（伊東・西村・田辺・亀井）

**立洞2号墳の写真測量調査**　立洞2号墳は福井県敦賀市にある径25m，高さ3mの円墳で，北陸縦貫道建設予定地にかかるため，福井県教委が発掘調査を実施した。同教委の依頼をうけ，墳丘の立面図を作成する目的で，写真測量調査を行なった。福井県教育委員会。8月。

（伊東・西村・亀井）

**大山廃寺の調査**　塔跡以外の堂宇探索を目的とした調査。七間四方と三間四方の礎石建物を検出。いずれも中世に再建された建物で，古代の堂宇は平安後期に焼失したことを確認。奈良～鎌倉期の瓦・土器類・蓮華文鬼瓦・風鐸等が出土。小牧市教育委員会。8月。（山中）

**横滝山廃寺の発掘**　新潟県三島郡寺泊町所在。鴟尾片，瓦等の出土，礎石様の石の存在から，小丘陵上の平坦面が寺院の跡と推定されていた。遺構確認のため，発掘調査を実施。建物基壇外縁とみられる切石列の一部を検出した。建物の規模，性格については，今後の調査を待つ。寺泊町教育委員会。8月。（岩本圭）

**黒笹7号古窯保存対策**　愛知県愛知郡東郷町にある黒笹7号古窯の保存指導。窯は，天井部が一部残存しており，数年前に覆屋が設置されたが，その後崩壊が進行している。今回は，合成樹脂等による土質の補強・強化など保存対策について指導した。東郷町教育委員会。8，10月。（秋山）

**達谷窟磨崖仏の調査**　岩手県平泉町にある推定鎌倉時代の磨崖仏（高さ9m）について，同町教育委員会より現状記録方法と，今後の保存処置法の検討を依頼されたもの。岩石の一部に樹脂を塗付し，越冬後の変化を観察する資料とした。平泉町教育委員会。11月。（木全・西村）

**美作国分寺跡の調査**　美作国分寺跡の範囲確認発掘調査と，整備事業にともない，推定寺域を中心に，0.13㎢の区域の地形図（縮尺1/500）を作成するに先だって，基準点埋設作業の指導にあたった。なお今年度小規模な発掘調査も実施され，建物の基壇の一部が検出された。津山市教育委員会。11，3月。（伊東・田辺）

**座喜味城石垣写真測量調査**　沖縄県読谷村，座喜味城跡の整備，修復にともない，城壁の写真測量調査を行なった。この調査は1974年からの継続で，今回で城跡の西半分，二の丸地区の調査をほぼ完了した。12月。（木全・伊東・田中・高瀬・渡辺）

**周防国府の調査**　周防国府の範囲については，西北隅と西南隅が一応確認されていたが，今回は南限東部の確認調査であった。「船所」・「浜の宮」の字名の残る地点である。総柱の掘立柱建物などを検出したが，南限線については，明確な遺構は検出できなかった。防府市教育委員会。2月～3月。（田辺・工楽・佐原・伊東・山中）

**埋蔵文化財に関する実態調査**　埋蔵文化財関係情報資料収集の活動の一環として，各種の実態調査を継続的に行なっているが，本年度は，各都道府県における写真測量の利用状況と，全国市町村の埋蔵文化財に関する現状調査を行なった。写真測量関係の調査結果については，『埋蔵文化財ニュース』7に掲載した。（田辺）

**航空写真の管理と活用**　日本写真測量学会と日本土木学会の依頼をうけ，現在当研究所は，昭和30年から昭和40年にかけて撮影された航空写真を約3,000缶，件数にしておよそ，12,000件保管しているが，これの管理活用をはかるため，リスト作成をめざし，標定図の整理作業を行なった。なおこの作業は，昭和49年に発行されたリストⅠに継続するものである。（伊東）

**遺構の埋蔵環境と劣化現象ならびに保存処理に関する研究**　遺構を現場で露出したままの状態で保存するための基礎的な研究と，その保存技術の開発を目的とし，昭和51年度から三年計画で遂行予定。初年度には，主として凝灰岩質遺構の風化と埋蔵環境特に水質との関係について検討した。（横山・町田・工楽・沢田・山中・光谷・秋山）

# 奈良国立文化財研究所要項

## Ⅰ　事業概要

### 1　研究普及事業

**公開講演会**

(1)　1976年5月15日　第39回公開講演会
「平城宮の井戸」　黒崎　直
「古代の測量術」　木全　敬蔵

(2)　1976年11月13日　第40回公開講演会
「古代寺院の基壇」　田辺　征夫
「平城京と宮の園池」　田中　哲雄

**現地説明会**

(1)　1976年6月19日　平城宮跡推定第一次朝堂院東第一堂発掘調査現地説明会　高瀬　要一

(2)　1976年8月7日　薬師寺西塔跡発掘調査現地説明会　岡本　東三

(3)　1976年8月21日　山田寺塔・中門・回廊跡及び大官大寺回廊跡発掘調査現地説明会　山崎　信二・松本　修自

(4)　1976年11月27日　平城宮跡東院庭園跡発掘調査現地説明会　須藤　隆

(5)　1977年1月29日　稲淵川西遺跡発掘調査現地説明会　黒崎　直

(6)　1977年3月12日　平城宮跡（佐紀池）発掘調査現地説明会　吉田　恵二

**平城宮跡資料館・覆屋公開**

(1)　春季特別公開
1976年4月25日～5月5日　見学者 5,963名
秋季特別公開・資料展示「平城宮跡保存の先覚者たち―北浦定政を中心として―」
1976年10月23日～11月7日　見学者20,425名

(2)　見学者数

| 区　分 | 資料館 | 覆　屋 | 計 |
|---|---|---|---|
| 1976年 | 48,776 | 60,746 | 109,522 |
| 累　計 | 226,192 | 440,335 | 666,527 |

※資料館は1970年度・覆屋は1968年度以降

### 2　1976年度文部省科学研究費補助金による研究

| 種　別 | 研　究　課　題 | 研究代表者 | 交付額 |
|---|---|---|---|
| 特定研究(1) | 遺構の埋蔵環境と劣化現象ならびに保存処理に関する研究 | 横山　浩一 | 5,000千円 |
| 〃 | 写真測量による建造物の経年変化の研究 | 鈴木　嘉吉 | 2,900 |
| 〃 | 地下遺構の探査法の開発 | 田中　琢 | 3,400 |
| 〃 | 遺跡に関する情報の活用システムの基礎的研究 | 田中　琢 | 1,000 |
| 一般研究(C) | 中世公家法資料の収集ならびに研究 | 田中　稔 | 1,200 |
| 一般研究(D) | 奈良・平安時代古写経遺品についての基礎的研究 | 鬼頭　清明 | 390 |
| 〃 | 書風よりみた木簡の研究 | 東野　治之 | 290 |
| 〃 | 古代脱穀具の系譜的研究 | 木下　正史 | 300 |
| 奨励研究(A) | 土師器における轆轤技法採用の研究 | 千田　剛道 | 230 |
| 〃 | 日本中世集落遺跡の研究 | 安田龍太郎 | 270 |
| 海外学術調査 | 海外学術調査の成果の整理、活用等に関する調査研究（考古・美術史関係） | 横山　浩一 | 1,500 |

### 3　飛鳥資料館の運営

**展　示**

第一展示室　常設展示

第二展示室　特別展示「飛鳥の寺院遺跡―最近の出土品」（1975.9.22～1976.5.31）

特別展示　「飛鳥・白鳳の在銘金銅仏」（1976.9.23～11.23）

常設展示　飛鳥・白鳳の彫刻コーナーを新設

(3) 平城宮跡整備基本計画策定に関する小委員会
1977年2月15日　於平城宮跡資料館
第3回飛鳥資料館運営協議会
1976年5月25日　於飛鳥資料館
第2回木簡研究集会
1977年1月11日・12日
於平城宮跡資料館

**外国出張**

田中琢　東・東南アジアにおける青銅器文化に関するシンポジューム出席のためタイへ派遣された。
1976年7月4日～同年7月10日

木全敬蔵　タークイ・ブスタン浮彫の写真測量調査（イラン・イラクにおける古代遺跡の美術・考古学的調査及び発掘）のためイランへ派遣された。
1976年8月1日～同年9月22日

牛川喜幸　クシャーン朝文化を中心とする中央アジアの考古学的調査のためアフガニスタン・パキスタン・イランに派遣された。
1976年9月3日～同年11月1日

狩野久　文部省在外研究員としてスウェーデン・デンマーク・ドイツ連邦共和国・連合王国・フランス・イタリアに派遣された。：木簡の研究調査のため(本文参照)
1976年10月16日～同年12月15日

亀井伸雄　ローマ文化財修復国際センターにおける史跡記念物の保存に関する研修コースへの参加及びヨーロッパにおける文化財建造物の修復技術の調査研究のためイタリア・フランス・ドイツ連邦共和国に派遣
1976年12月30日～1977年7月15日

**協力事業等**

(1) 「北浦定政顕彰会」の諸事業（田原顕彰墓碑周辺整備・古市墓地への誘導計画・記念展開催・記念出版等）の遂行に，随時所員一同が協力した。(研究彙報参照)

(2) 文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており，1972年度からは当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収事務を担当しているが，1976年度の状況は下記の通り

| 区　分 | 面　積 | 購入額 |
|---|---|---|
| 1976年 | 30,923.06 m² | 505,297,506円 |
| 国有地合計 | 114,856.03 | 1,761,197,606 |

大蔵省より移管の 1,404.92 m²を含む

## II　図書及び資料

図書　38,348冊

| 区分 | 種別 | 購入 | 寄贈 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 1976年 | 和漢書 | 1,598 | 3,704 | 5,302 |
| | 洋書 | 251 | 29 | 280 |
| 累計 | 和漢書 | 23.254 | 12,560 | 35,814 |
| | 洋書 | 2,201 | 333 | 2,534 |

写真　149,996点（1976年度末現在）

## III　研究成果刊行物

**1976年度刊行物**

| 名称 | | 担当者 |
|---|---|---|
| 学報第30冊 | 五條　町並調査の記録 | 鈴木・岡田・宮沢・細見・宮本・上野・中村・松本・清水・佃・福田 |
| 史料第II冊 | 日本美術院仏像等修理記録III | 田中(義)・星山・百橋・森(庸)・八幡 |
| 基準資料第4冊 | 瓦編4解説 | 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 |
| 基準資料第5冊 | 瓦編5解説 | 平城宮跡発掘調査部考古第三調査室 |
| 図録第1冊 | 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 | 飛鳥資料館学芸室 |
| 図録第2冊 | 飛鳥白鳳の在銘金銅仏銘文篇 | 同　上 |
| 概報他 | 海住山寺総合調査目録 | 田中(稔)・星山・加藤・綾村・東野・百橋 |
| | 平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報 | 狩野・佐藤・田中(哲)・岡本・毛利光・土肥・清水 |
| | 飛鳥編年史料集稿1 | 鬼頭・東野・宮川・泉谷 |
| | 飛鳥編年史料集稿2 | 鬼頭・東野・宮川・泉谷 |

## 前年度までの刊行物

### 奈良国立文化財研究所学報

| 年度 | 名　　称 |
|---|---|
| 1954 | 第1冊　仏師運慶の研究 |
| | 第2冊　修学院離宮の復原的研究 |
| 1955 | 第3冊　文化史論叢 |
| 1956 | 第4冊　奈良時代僧房の研究 |
| 1957 | 第5冊　飛鳥寺発掘調査報告 |
| 1958 | 第6冊　中世庭園文化史 |
| | 第7冊　興福寺食堂発掘調査報告 |
| 1959 | 第8冊　文化史論叢II |
| | 第9冊　川原寺発掘調査報告 |
| 1960 | 第10冊　平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 |
| 1961 | 第11冊　院家建築の研究 |
| 1962 | 第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶 |
| | 第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察 |
| | 第14冊　レースと金亀舎利塔に関する研究 |
| | 第15冊　平城宮発掘調査報告II　官衙地域の調査 |
| 1963 | 第16冊　平城宮発掘調査報告III　内裏地域の調査 |
| 1965 | 第17冊　平城宮発掘調査報告IV　官衙地域の調査 |
| | 第18冊　小堀遠州の作事 |
| 1967 | 第19冊　藤原氏の氏寺とその院家 |
| 1969 | 第20冊　名物裂の成立 |
| 1971 | 第21冊　研究論集I |
| 1973 | 第22冊　研究論集II |
| 1974 | 第23冊　平城宮発掘調査報告VI　平城京左京一条三坊の調査 |
| | 第24冊　高山一町並調査報告一 |
| 1975 | 第25冊　平城京左京三条二坊 |
| | 第26冊　平城宮発掘調査報告VII |
| | 第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告I |
| | 第28冊　研究論集III |
| | 第29冊　木曽奈良井　町並調査報告 |

### 奈良国立文化財研究所史料

| 年度 | 名　　称 |
|---|---|
| 1954 | 第1冊　南無阿弥陀仏作善集(複製) |
| 1955 | 第2冊　西大寺叡尊伝記集成 |
| 1963 | 第3冊　仁和寺史料　寺誌編1 |
| 1964 | 第4冊　俊乗坊重源史料集成 |
| 1966 | 第5冊　平城宮木簡　1　図版 |
| 1967 | 第6冊　仁和寺史料　寺誌編2 |
| 1969 | 第5冊　平城宮木簡　1　解説(別冊) |
| 1970 | 第7冊　唐招提寺史料　1 |
| 1974 | 第8冊　平城宮木簡　2　図版・解説 |
| | 第9冊　日本美術院仏像等修理記録　I |
| 1975 | 第10冊　日本美術院仏像等修理記録　II |

### 奈良国立文化財研究所基準資料

| 年度 | 名　　称 |
|---|---|
| 1973 | 第1冊　瓦編1　解説 |
| 1974 | 第2冊　瓦編2　解説 |
| 1975 | 第3冊　瓦編3　解説 |

## IV　機構・定員

### 機構の改正

1976年5月10日省令改正に伴い埋蔵文化財センター研究指導部に集落遺跡研究室新設。

### 定員

| | 指定職 | 行政一 | 行政二 | 研究職 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1975年度 | 1 | 23 | 7 | 65 | 96 |
| 1976年度 | 1 | 23 | 7 | 67 | 98 |

（増員内訳）埋蔵文化財センター　3
（減員内訳）平城宮跡発掘調査部　1

## V　予算（1976年度）

| 歳　　出 | 984,924,511円 |
|---|---|
| 人件費 | 313,460,511 |
| 運営費 | 436,071,000 |
| 事業管理 | 5,172,000 |
| 一般研究 | 40,460,000 |
| 特別研究 | 2,198,000 |
| 発掘調査 | 282,942,000 |
| 宮跡整備管理 | 32,706,000 |
| 飛鳥資料館運営 | 42,356,000 |
| 埋蔵文化財センター運営 | 30,237,000 |
| 施設費 | 235,393,000 |
| 施設整備費 | 126,220,000 |
| 平城宮跡地等整備費 | 108,660,000 |
| 各所修繕 | 513,000 |

## VI　施設

**土地**　23,371㎡（当所所管）

春日野地区　5,126㎡　　飛鳥資料館　16,902㎡

資料館地区　1,343㎡

1,068,198.30㎡（文化庁所管）

平城宮跡地区　953,342.27㎡

（他に奈良県先行取得地59,682.956㎡がある）

藤原宮跡地区　114,856.03㎡

## 建　物

| 建　物 | 春日野 | 平　城 | 藤　原 | 飛鳥資料館 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 事務所 | 797 | 1,820 | 465 | 152 | 3,234 |
| 倉庫収蔵庫 | 191 | 3,777 | 963 | —— | 4,931 |
| 車　庫 | 20 | 130 | 120 | 94 | 364 |
| 会議室 | 40 | 192 | —— | 42 | 274 |
| 講　堂 | 109 | —— | —— | 89 | 198 |
| 写真室 | 86 | 192 | 32 | 49 | 359 |
| 展示室 | —— | 360 | —— | 648 | 1,008 |
| 覆屋・展示棟 | —— | 1,518 | —— | —— | 1,518 |
| その他 | 200 | 1,427 | 152 | 1,581 | 3,360 |
| 計 | 1,443 | 9,416 | 1,732 | 2,655 | 15,246 |
| 重要文化財旧米谷家住宅 | | | | | 198 |
| 合　計 | | | | | 15,444 |

## 主要工事

(1)施設整備費

飛鳥藤原宮跡発掘調査部研究棟新営工事　6,850千円

同　上　電気工事　710

飛鳥資料館西側法面整備工事　760

飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺物収蔵庫電気工事　590

飛鳥資料館水道引込工事　1,100

平城宮跡第4収蔵庫建設予定地造成工事　3,421

平城宮跡発掘調査部受電設備改修工事　1,170

飛鳥藤原宮跡発掘調査部新営遺物収蔵庫収納棚設置工事　1,968

飛鳥資料館周辺整備工事　3,550

覆屋便所給水管敷設工事　467

飛鳥藤原宮跡発掘調査部油庫新設工事　589

(2)平城宮跡地等整備費

説明板設置工事　2,111

平城宮跡環境整備昭和51年度第1期工事　31,200

同　上　第2期工事　93,000

平城宮跡取水施設工事　1,930

平城宮跡昭和51年度買収地環境整備工事　1,050

藤原宮跡環境整備昭和51年度工事21,150

(3)建設省近畿地方建設局委任工事

飛鳥資料館整備工事　24,685

## Ⅶ　人事異動

（1976年4月1日～1977年3月31日）

4月1日　文化庁文化財保護部無形文化民俗文化課課長補佐に転任　原田　拓

庶務課長に転任　音川啓太郎

文部省に出向（木更津工業高等専門学校事務部庶務課長に就任）五十嵐春雄

飛鳥資料館庶務室長心得に配置換　森口　節之

会計課課長補佐に昇任　吉田　博次

京都国立博物館学芸課考古室長に転任　八賀　晋

平城宮跡発掘調査部考古第二調査室長に昇任　佐藤　興治

飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任　小笠原好彦

会計課に転任　小林　雅文

事務補佐員採用　藤本　節子

研究補佐員採用　丸川　義広

5月10日　埋蔵文化財センター研究指導部集落遺跡研究室長に配置換　佐原　真

文部技官採用　小林　謙一　井上　和人・清水　真一

5月16日　文部技官採用　巽　淳一郎

文化庁へ出向(文化財保護部記念物課)　稲田　孝司

6月21日　技能補佐員採用　吉村　司朗

研究補佐員採用　新田　洋

7月30日　辞職　梶　幸治郎

10月1日　文化庁文化財保護部建造物課主任文化財調査官に転任　岡田　英男

11月1日　建造物研究室長に配置換　牛川　喜幸

12月23日　技能補佐員採用　望月　正治

1月31日　辞職　刀谷　純子

3月30日　辞職　沖村　和子・石田賀代子　石谷　幸子・山田　猛　坂野　和信・福田　洋子

## Ⅷ　組織規定

### 文部省設置法　抜萃

昭和24年法律第146号
昭和43年6月15日一部改正

第36条　第43条に規定するもののほか，文化庁に次の機関を置く。

国立文化財研究所（前後略）

第41条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2　国立文化財研究所の名称及び位置は，次のとおりとする。

| 名　　称 | 位　置 |
|---|---|
| 東京国立文化財研究所 | 東京都 |
| 奈良国立文化財研究所 | 奈良市 |

3　国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

4　国立文化財研究所及びその支所の内部組織は文部省令で定める。

### 文部省設置法施行規則　抜萃

昭和28年1月13日文部省令第2号，追加昭和43年6月15日文部省令第20号
昭和45年4月17日文部省令第11号，昭和48年4月12日文部省令第6号，
昭和49年4月11日文部省令第10号，
昭和50年4月2日文部省令第13号，
昭和51年5月10日文部省令第16号

第5章　文化庁の附属機関

第4節　国立文化財研究所

第2款　奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条　奈良国立文化財研究所に，所長を置く。

2　所長は所務を掌理する。

（内部組織）

第124条　奈良国立文化財研究所に，庶務部，美術工芸研究室，建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2　前項に定めるもののほか，奈良国立文化財研究所に，飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

（庶務部の分課及び事務）

第125条　庶務部に，次の二課を置く。

一　庶務課

二　会計課

2　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

一　職員の人事に関する事務を処理すること。

二　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四　この研究所の所掌事務に関し，連絡調整すること。

五　この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

六　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

3　会計課においては，次の事務をつかさどる。

一　予算に関する事務を処理すること。

二　経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四　庁舎及び設備の維持，管理に関する事務を処理すること。

五　庁舎の取締りに関すること。

（美術工芸研究室等の事務）

第127条　美術工芸研究室においては，絵画，彫刻，工芸品，書跡その他の有形文化財（次項及び第3項に規定するものを除く），及び工芸技術に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行なう。

2　建造物研究室においては，建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行う。

3　歴史研究室においては，考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

（平城宮跡発掘調査部の六室及び事務）

第128条　平城宮跡発掘調査部に，考古第一調査室，考古第二調査室，考古第三調査室，遺構調査室，計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては，平城宮跡に関し，次項から第六項までに定める事務を処理するほかその発掘を行なう。

3　考古第一調査室，考古第二調査室及び考古第三調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く）の保存整理及び

調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

5　計測修景調査室においては，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

6　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部の二室及び事務）

第129条　飛鳥藤原宮跡発掘調査部に，第一調査室及び第二調査室を置く。

2　第一調査室及び第二調査室においては，それぞれ藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡(藤原宮跡を除く)に関し，次の各号に掲げる事務を処理するほか，その発掘を行なう。

一　遺構及び遺物の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表

二　遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表

三　史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表

（飛鳥資料館）

第130条　飛鳥資料館においては，飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に関し，国民の理解を深めるため，この地域に関する考古資料，歴史資料その他の資料を収集し，保管して公衆の観覧に供し，あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行なう。

（飛鳥資料館の館長）

第131条　飛鳥資料館に，館長を置く。

2　館長は，館務を掌理する。

（飛鳥資料館の二室及び事務）

第132条　飛鳥資料館に，庶務室及び学芸室を置く。

2　庶務室においては，飛鳥資料館の庶務，会計等に関する事務を処理する。

3　学芸室においては，次の事務をつかさどる。

一　飛鳥地域に関する考古資料，歴史資料，建造物，絵画，彫刻，典籍，古文書その他の資料の収集，保管，展示，模写，模造，写真の作成，調査研究及び解説を行うこと。

二　飛鳥地域に関する図書，写真その他の資料の収集，整理，保管，展示，閲覧及び調査研究を行うこと。

三　飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

（埋蔵文化財センター）

第133条　埋蔵文化財センターにおいては，次の事務をつかさどる。

一　埋蔵文化財に関し，調査研究及びその結果の公表を行うこと。

二　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して，専門的，技術的な研修を行うこと。

三　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ，専門的，技術的な指導及び助言を行うこと。

（埋蔵文化財センターの長）

第134条　埋蔵文化財センターに長を置く。

2　前項の長は，埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

（埋蔵文化財センターの内部組織）

第135条　埋蔵文化財センター内に，教務室及び研究指導部を置く。

（教務室の事務）

第136条　教務室においては，研修の実施に関する事務を処理するほか，埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

（研究指導部の四室及び事務）

第137条　研究指導部に，考古計画研究室，集落遺跡研究室，遺物処理研究室及び測量研究室を置く。

2　考古計画研究室においては，第133条各号に掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

3　集落遺跡研究室においては，集落遺跡に関し，第133条各号に掲げる事務（遺物処理研究室及び測量研究室の所掌に属するものを除く）をつかさどる。

4　遺物処理研究室においては遺物の処理に関し，第133条各号に掲げる事務をつかさどる。

5　測量研究室においては，埋蔵文化財の測量に関し，第133条各号に掲げる事務をつかさどる。

## 職　員　（1977年7月16日現在）

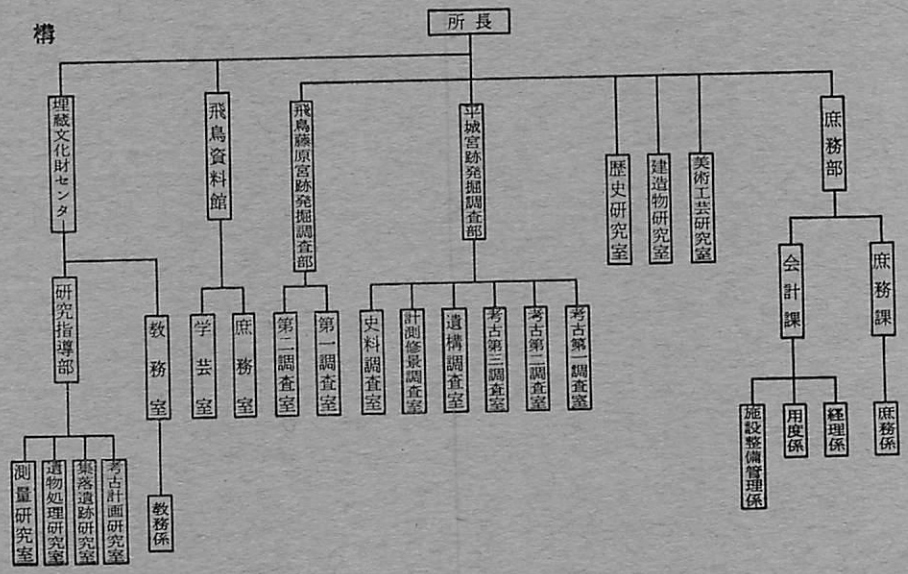
| 所属 | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---|---|---|---|
| | 坪井　清足 | 文部技官　所長 | |
| 庶務課 | 服部　栄次 | 文部事務官　部長 | |
| | 音川啓太郎 | 文部事務官　課長 | |
| | 岩本　次郎 | 文部事務官　課長補佐 | |
| | 山崎　一博 | 文部事務官　係長 | |
| | 西　徹 | 文部事務官 | 人事 |
| | 忠　利二 | 文部事務官 | 庶務 |
| | 木寅　忠雄 | 文部事務官　警務員長 | 平城警備 |
| | 森田　光治 | 文部事務官　警務員 | 平城警備 |
| | 岡田　博旡 | 文部事務官　警務員 | 警備 |
| | 栢本　安臣 | 文部事務官　専門員 | 平城事務 |
| | 八幡　扶桑 | 文部技官　専門職員(併任) | 写真 |
| | 宮本　宣代 | 事務補佐員 | 所長室付 |
| | 港　悦子 | 事務補佐員 | 庶務 |
| | 中川かよ子 | 事務補佐員 | 図書資料 |
| 会計課 | 杉本　光司 | 文部事務官　課長 | |
| | 吉田　博次 | 文部事務官　課長補佐 | |
| | 日高　参夫 | 文部事務官　課長補佐 | |
| | 吉田　博次 | 文部事務官　経理係長(併任) | |
| | 冬野　徹 | 文部事務官 | 経理 |
| | 大西　肇 | 文部事務官 | 経理 |
| | 前川　重子 | 事務補佐員 | 経理 |
| | 吉田　和子 | 事務補佐員 | 経理 |
| | 藤本きよえ | 事務補佐員 | 経理 |
| | 西田　健三 | 文部事務官　用度係長 | |
| | 新井　耕治 | 文部事務官 | 用度 |
| | 小林　雅文 | 文部事務官 | 用度 |
| | 中西　建夫 | 文部技官 | 自動車運転 |
| | 飯田　信男 | 文部技官 | 自動車運転 |
| | 東田　道代 | 事務補佐員 | 施設 |
| | 日高　参夫 | 文部事務官　施設整備管理係長(併任) | |
| | 渡辺　康史 | 文部技官 | 整備管理 |
| | 奥村　末儀 | 文部技官 | 施設 |
| | 高木　博子 | 事務補佐員 | 施設 |
| | 加藤　建夫 | 文部事務官　専門職員 | |
| 美術工芸研究室 | 田中　義恭 | 文部技官　室長 | 彫刻 |
| | 百橋　明穂 | 文部技官 | 絵画 |
| | 守田　公夫 | 調査員　(非常勤) | 工芸 |
| | 西　庸子 | 研究補佐員 | 資料整理 |
| 建造物研究室 | 工藤　圭章 | 文部技官　室長(取扱) | 建築 |
| | 細見　啓三 | 文部技官　(併任) | 建築 |
| | 宮本長二郎 | 文部技官　(併任) | 建築 |
| | 上野　邦一 | 文部技官　(併任) | 建築 |
| | 田中　哲雄 | 文部技官　(併任) | 遺跡庭園 |
| | 光谷　拓実 | 文部技官　(併任) | 遺跡庭園 |
| | 福山　敏男 | 調査員　(非常勤) | 建築 |
| | 福田　幸子 | 研究補佐員 | 資料整理 |
| 歴史研究室 | 田中　稔 | 文部技官　室長(取扱) | 歴史 |
| | 東野　治之 | 文部技官　(併任) | 歴史 |
| | 綾村　宏 | 文部技官　(併任) | 歴史 |
| | 山中　敏史 | 文部技官　(併任) | 考古 |
| | 千田　剛道 | 文部技官　(併任) | 考古 |
| | 須藤　隆 | 文部技官　(併任) | 考古 |
| | 堀池　春峰 | 調査員　(非常勤) | 歴史 |

| 所属 | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---|---|---|---|
| | 狩野　久 | 文部技官　部長 | |
| 平城宮跡発掘調査部 考古第一調査室 | 町田　章 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | 沢田　正昭 | 文部技官 | 保存科学 |
| | 菅原　正明 | 文部技官 | 考古 |
| | 土肥　孝 | 文部技官 | 考古 |
| | 小林　謙一 | 文部技官 | 考古 |
| | 中村　友博 | 文部技官 | 考古 |
| | 八幡　扶桑 | 文部技官　専門職員 | 写真 |
| | 佃　幹雄 | 文部技官　専門職員 | 写真 |
| 考古第二調査室 | 佐藤　興治 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | 吉田　恵二 | 文部技官 | 考古 |
| | 須藤　隆 | 文部技官 | 考古 |
| | 安田龍太郎 | 文部技官 | 考古 |
| | 井上　和人 | 文部技官 | 考古 |
| 考古第三調査室 | 森　郁夫 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | 岡本　東三 | 文部技官 | 考古 |
| | 毛利光俊彦 | 文部技官 | 考古 |
| | 巽　淳一郎 | 文部技官 | 考古 |
| 遺構調査室 | 宮沢　智士 | 文部技官　室長 | 建築 |
| | 中村　雅治 | 文部技官 | 建築 |
| | 清水　真一 | 文部技官 | 建築 |
| | 宮本長二郎 | 文部技官　(併任) | 建築 |
| 計画修景調査室 | 安原　啓示 | 文部技官　室長 | 遺跡庭園 |
| | 田中　哲雄 | 文部技官 | 遺跡庭園 |
| | 光谷　拓実 | 文部技官 | 遺跡庭園 |
| | 加藤　允彦 | 文部技官 | 遺跡庭園 |
| | 森　蘊 | 調査員　(非常勤) | 遺跡庭園 |
| 史料調査室 | 横田　拓実 | 文部技官　室長 | 歴史 |
| | 今泉　隆雄 | 文部技官 | 歴史 |
| | 綾村　宏 | 文部技官 | 歴史 |
| | 加藤　優 | 文部技官　(併任) | 歴史 |
| 調査部 | 細見　啓三 | 文部技官　主任研究官 | 建築 |
| | 加藤　優 | 文部技官　主任研究官 | 歴史 |
| | 宮本長二郎 | 文部技官　主任研究官 | 建築 |
| | 栢本　安臣 | 文部事務官　事務総括(併任) | 事務 |
| | 木寅　忠雄 | 文部事務官　(併任) | 警備 |
| | 森田　光治 | 文部事務官　(併任) | 警備 |
| | 飯田　信男 | 文部技官　(併任) | 自動車運転 |
| | 石田　信子 | 事務補佐員 | 図書資料 |
| | 橋本　伴子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 中村美千代 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 宍戸　雅子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 中西千枝子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 池田千賀枝 | 事務補佐員 | 写真 |
| | 吉村　司朗 | 技能補佐員 | 保安 |
| | 城本きよの | 業務補佐員 | 庁務 |
| | 石川千恵子 | 研究補佐員 | 公開 |
| | 泉谷　聖子 | 研究補佐員 | 資料整理 |
| | 岩本さよ子 | 研究補佐員 | 資料整理 |
| | 福原まり花 | 研究補佐員 | 資料整理 |

| 所属 | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---|---|---|---|
| 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 | 工藤　圭章 | 文部技官　部長 | |
| 第一調査室 | 猪熊　兼勝 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | 甲斐　忠彦 | 文部技官 | 考古 |
| | 上野　邦一 | 文部技官 | 建築 |
| | 西口　寿生 | 文部技官 | 考古 |
| | 川越　俊一 | 文部技官 | 考古 |
| | 岩本　正二 | 文部技官 | 考古 |
| 第二調査室 | 鬼頭　清明 | 文部技官　室長 | 歴史 |
| | 黒崎　直 | 文部技官 | 考古 |
| | 西　弘海 | 文部技官 | 考古 |
| | 金子　裕之 | 文部技官 | 考古 |
| | 千田　剛道 | 文部技官 | 考古 |
| | 山崎　信二 | 文部技官 | 考古 |
| | 松本　修自 | 文部技官 | 建築 |
| | 小笠原好彦 | 文部技官　主任研究官 | 考古 |
| | 木下　正史 | 文部技官　主任研究官 | 考古 |
| | 加藤　建夫 | 文部事務官　事務総括(併任) | 事務 |
| | 刀谷　敏博 | 文部技官　(併任) | 自動車運転 |
| | 畑野　恵子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 井上　直夫 | 技術補佐員 | 写真 |
| | 望月　正治 | 技能補佐員 | 保安 |
| | 宮川　伴子 | 研究補佐員 | 資料整理 |
| | 丸川　義広 | 研究補佐員 | 考古 |
| | 立花　聡 | 研究補佐員 | 考古 |
| 飛鳥資料館 | 坪井　清足 | 文部技官　館長(取扱) | |
| 庶務室 | 森口　節之 | 文部事務官　室長 | |
| | 大西　肇 | 文部事務官　(併任) | 事務 |
| | 奥村　末儀 | 文部技官　(併任) | 施設 |
| | 刀谷　敏博 | 文部技官 | 自動車運転 |
| | 米田一二三 | 警務員 | 警備 |
| | 中垣　睦美 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 寺田千鶴子 | 事務補佐員 | 事務 |

| 所属 | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---|---|---|---|
| 飛鳥資料館 庶務室 | 島田　郁子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 秋本　喜子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 稲垣　耕正 | 技能補佐員 | 自動車運転 |
| | 乾　春雄 | 技能補佐員 | 保安 |
| | 福井　敏子 | 業務補佐員 | 庁務 |
| 学芸室 | 田中　義恭 | 文部技官　室長(併任) | 彫刻 |
| | 星山　晋也 | 文部技官 | 美術 |
| | 東野　治之 | 文部技官 | 歴史 |
| | 大脇　潔 | 文部技官 | 考古 |
| | 津村　広志 | 文部事務官 | 図書普及 |
| | 藤沢　一夫 | 調査員　(非常勤) | 考古 |
| 埋蔵文化財センター | 田中　稔 | 文部技官　センター長 | |
| 教務室 | 岡本　清 | 文部事務官　室長 | |
| | 乾　敏光 | 文部事務官　教務係長 | |
| | 藤本　節子 | 事務補佐員 | 事務 |
| 研究指導部 | 田中　琢 | 文部技官　部長 | |
| 考古計画研究室 | 松沢　亜生 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | 岩本　圭輔 | 文部技官 | 考古 |
| | 山本　忠尚 | 文部技官 | 考古 |
| 集落遺跡研究室 | 佐原　真 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | 田辺　征夫 | 文部技官 | 考古 |
| | 山中　敏史 | 文部技官 | 考古 |
| 遺物処理研究室 | 工楽　善通 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | 秋山　隆保 | 文部技官 | 保存科学 |
| 測量研究室 | 木全　敬蔵 | 文部技官　室長 | 測量 |
| | 伊東　太作 | 文部技官　(併任) | 測量 |
| | 西村　康 | 文部技官 | 考古測量 |
| | 亀井　伸雄 | 文部技官 | 建築測量 |
| | 伊東　太作 | 文部技官　主任研究官 | 測量 |

## 機構



# ANNUAL BULLETIN
## OF
## NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

## 1977

CONTENTS


Page

Preface ..... 1

Research

General Investigation of the Kaijûsenji Temple ..... 2

Investigation of the Sculptures in the Hôrinji and the Hokkiji Temples ..... 7

On the Picture Scroll of "Zenzai-dôji" in the Tôdaiji Temple ..... 10

Urgent Survey of the Domestic Houses in Nara Prefecture ..... 12

Surveys of the Eastern and Western Pagodas in the Taimadera Temple ..... 16

Surveys of the Buildings in the Danzanjinja Shrine ..... 18

Surveys of the Shikinaen Garden in Okinawa Prefecture ..... 19

Photogrammetrical Study on Secular Change of Historical Buildings ..... 20

Excavations of the Nara Palace Site and the Ancient Metropolis of Nara ..... 21

Wooden Tablets Excavated at the Nara Palace Site during 1976 ..... 38

On the Physical Layout of the Nara Palace Site (7) ..... 41

Wooden Figures Found from the Ancient Metropolis of Nara ..... 44

Cinerary Urn and Ink Stick Excavated at Narayama, Nara City ..... 45

Preservation of the Unearthed Artifacts Made of Plant Textile ..... 46

Excavations of the Asuka and Fujiwara Palace Sites ..... 47

Investigation of the Gilt-bronze Buddhist Images with Inscription ..... 59

Geophysical Prospecting of Archaeological Sites ..... 62

An Analytical Study of the Technical Terms in Archaeology ..... 64

Report and News

Research Abbroad by the Affiliate of the Institute ..... 65

Symposia and Lectures

Open Lectures Held by the Institute during 1976 ..... 66

Other Specific Researches and Surveys ..... 67

Organization and Activities of the Institute ..... 73



Published by

Nara National Cultural Properties Research Institute

Nara, 1977